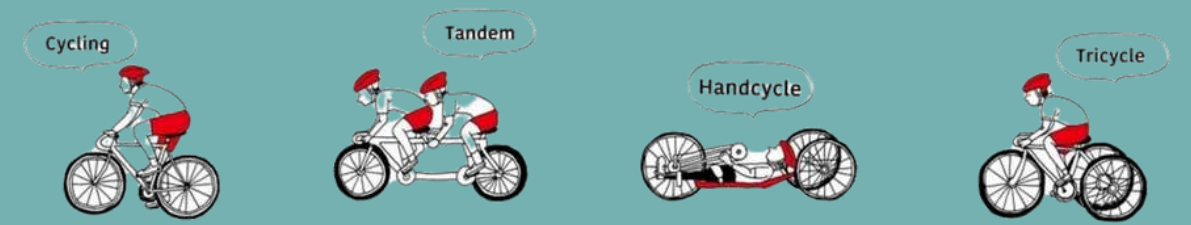


日本パラサイクリング連盟



JPCF 中長期戦略（2024年度）レポート

1

2025年3月 (updated)

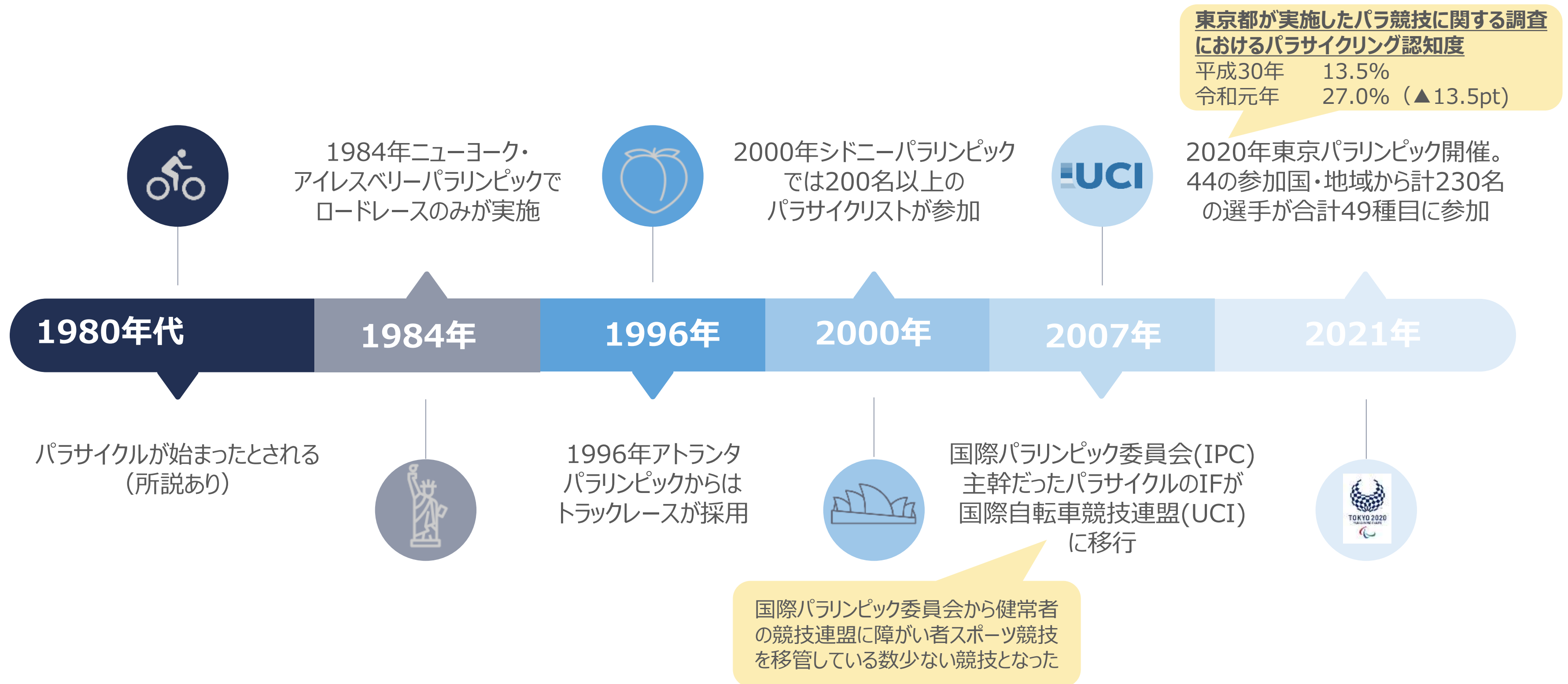
ポータス・コンサルティング株式会社



目次

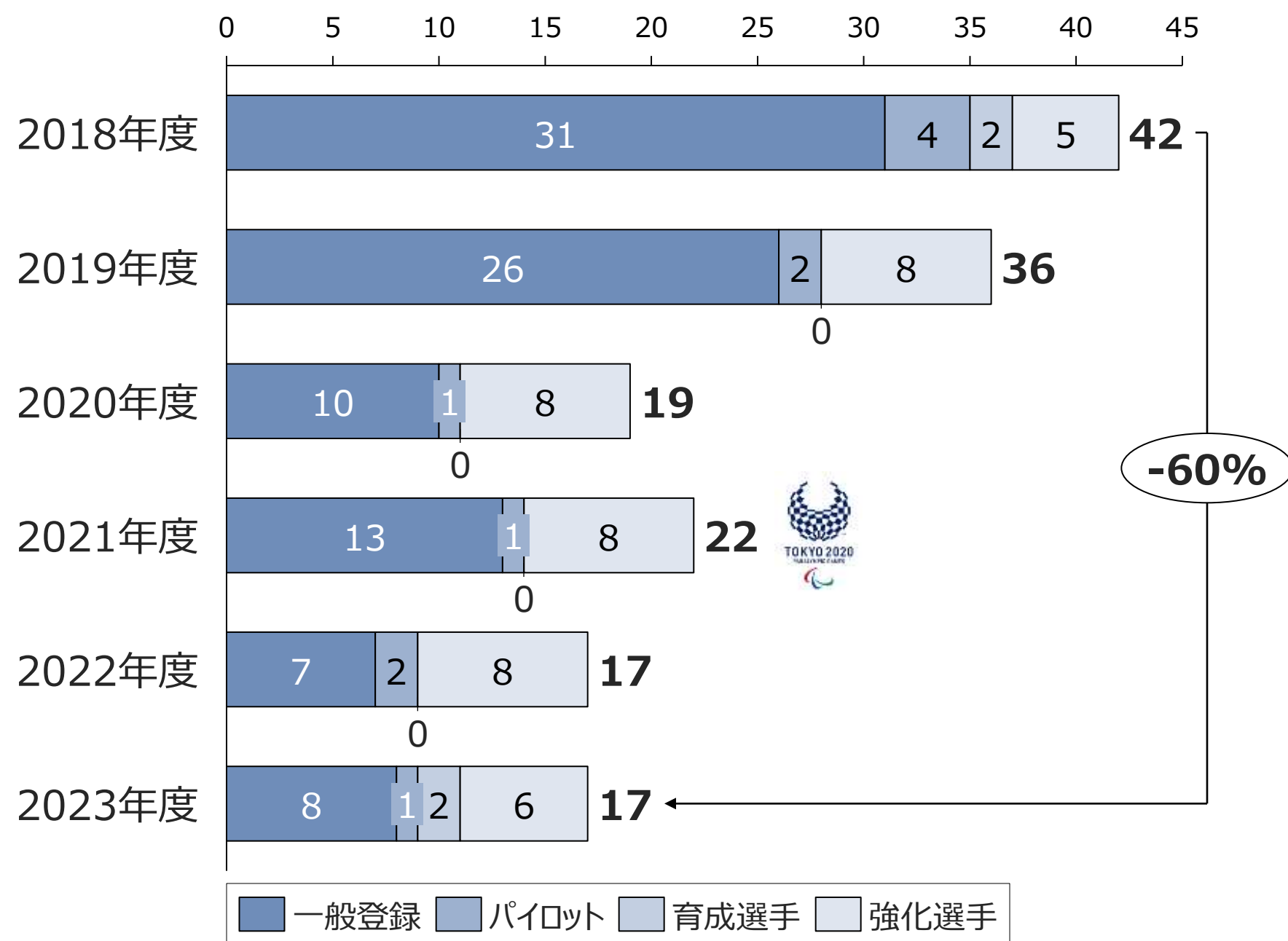
- **プロジェクト背景**
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

パラサイクリングは世界で約40年の歴史があり、東京パラリンピックでは44の参加国・地域から230名の選手が参加し、日本においてもパラサイクリングの認知度向上にも貢献した



しかし、パラリンピックを機に認知度を増やせたものの、会員数は減少の一途をたどっており、早急に普及を含め中長期計画の策定・実施をしなければ競技の衰退につながりかねない

日本パラサイクリング連盟(JPCF)選手登録者数の推移 (2018-2023年度、人)

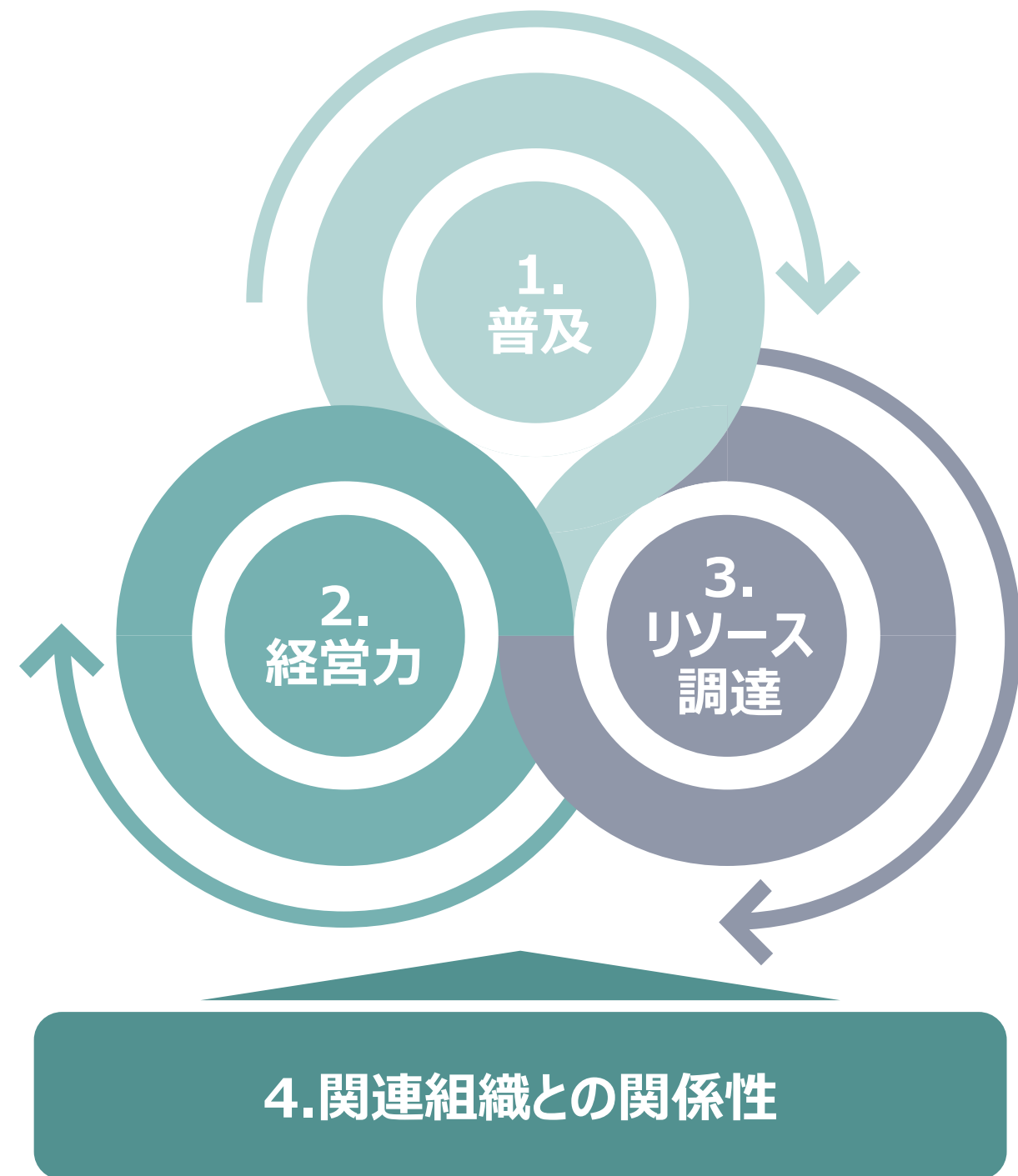


- 東京パラリンピック実施に際し、東京都が平成30年と令和元年に実施したパラリンピック・パラ競技に関する調査においてパラサイクルの認知度について次のデータがある
 - 平成30年 13.5%
 - 令和元年 27.0% (▲13.5pt)
- 認知度については東京パラリンピックを機に上昇しているが、一旦コロナ化で減少した会員数は東京パラリンピック後もパラリンピック前の水準まで戻っていない
 - 強化選手数の変動は少ないものの、一般登録者数が2018年と比較し大幅減少している

長期的に普及も含め検討していかなければ、将来的な団体・競技としての衰退につながってしまうため、早急に中長期計画の策定を通じた基盤強化が求められる

また、中長期計画策定にあたり、JPCFは独立した競技組織且つJCFの関連団体でもあるため、普及・経営力・リソース調達以外にも関連組織の関係性など様々な課題を抱えている

本プロジェクトを実施する背景として、大きく以下の4つの課題が挙げられる：



1.普及

- 東京パラリンピックをきっかけに日本におけるパラスポーツの認知度は総じて上がった一方で、する・みる・ささえるの拡大にはまだ結び付けられていない

2.経営力

- 他の多くの競技団体と同様、組織基盤の脆弱性に課題意識を持っているが、中長期計画の策定及び施策の実行ができていない

3.リソース調達

- 東京パラリンピック後、スポーツ業界全体としてスポンサー離れや助成金の削減が起こっている普及及び経営力を強化するにあたって、人的及び財政的なリソースが不足している

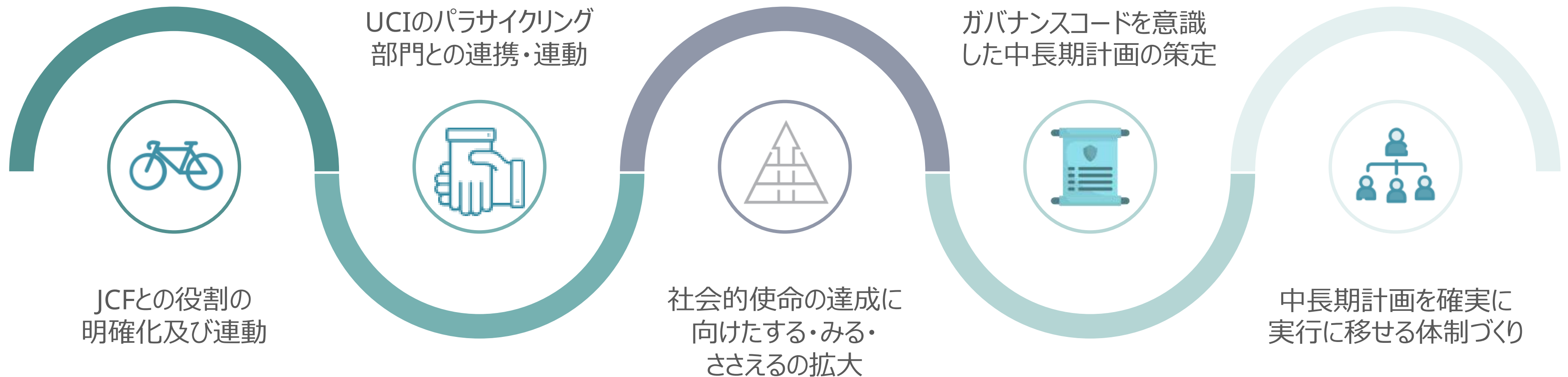
4.関連組織との関係性

- 日本においてもJPCFは日本自転車競技連盟(JCF)の関連団体であるため、JCFとの兼ね合いも考慮した計画策定・実行が必要不可欠である
- 国際レベルでも、国際自転車競技連盟(UCI)及びその傘下のパラサイクリングとの連携を進めて効果的に計画を実施する必要がある

これらの課題なども踏まえ、本プロジェクトでは今後のJPCFの基盤となる中長期戦略の策定を行い、実現性の高い、次の5～10年のJPCFのロードマップを検討することが求められている

本事業の目的

独自の組織としてだけでなく関係組織とも連動することでシナジーを最大活用した、長期的なパラサイクリングの普及・繁栄を可能とする中長期計画の策定の上、現実的に実行可能なプランの策定を行う



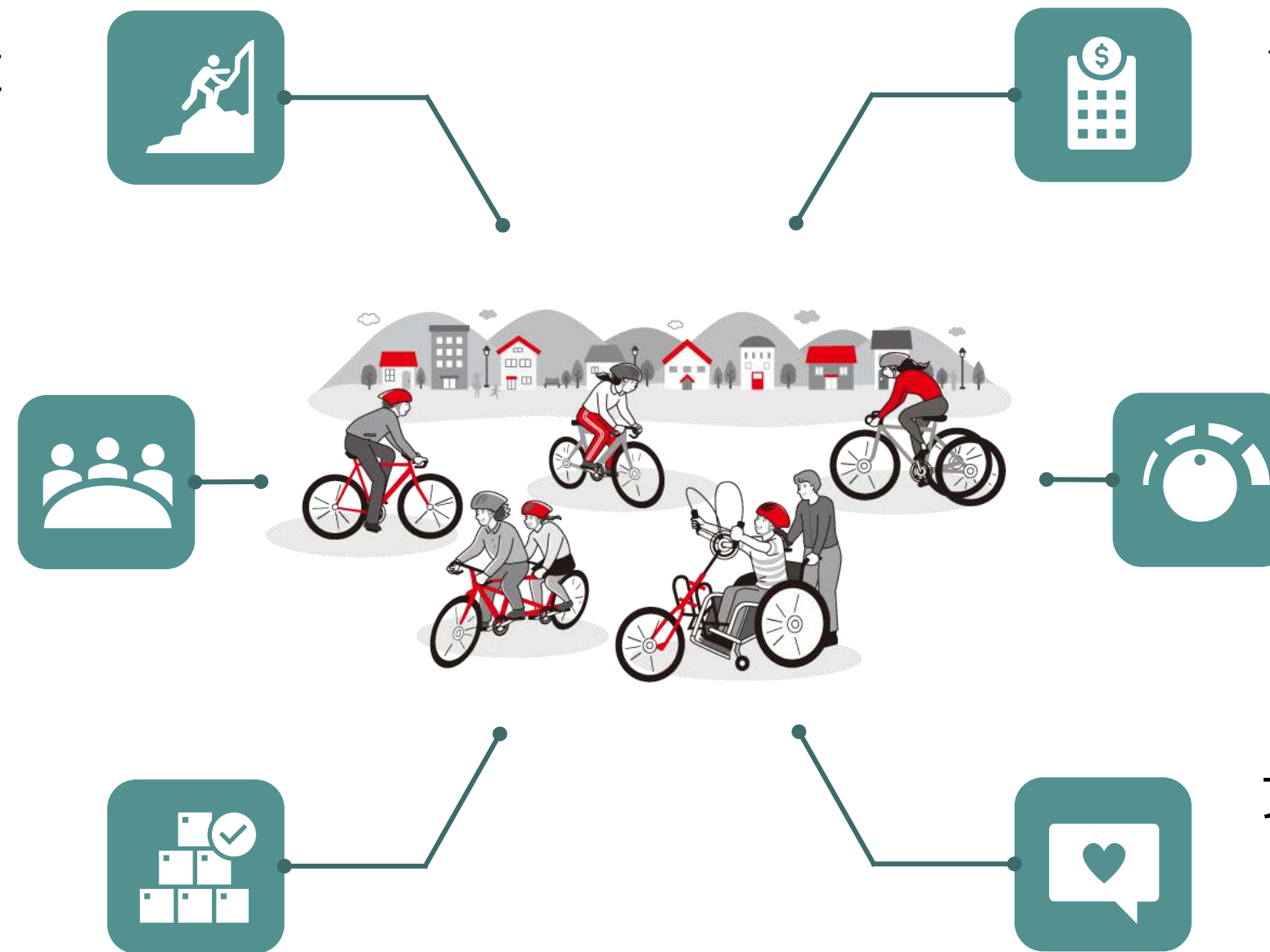
中長期戦略を策定・設定することはJPCFにとって、活動の効率化を進め、かつ内部・外部に向けての方向性の明確化による連携体制の強化が望める

戦略策定・設定することによるJPCFにとってのメリット

組織全体としての幅広い戦略に基づいた**効果的かつ効率的な事業計画の立案が可能**

JCFやUCI等の関連団体も含めた**役割及び今後の動き**が明確になる

今後数年間の経営における**必要なリソース**が明らかとなり、その調達を計画的に実施できる



パートナー企業への今後の方向性・計画についてのコミュニケーションが容易となり、**サポートが得やすくなる**

中長期的な代表チームの**育成に向けたロードマップ**を組織の戦略でサポートすることが可能

ファンに対して方向性を明確に示すことで、**エンゲージメントを高める**ことができる

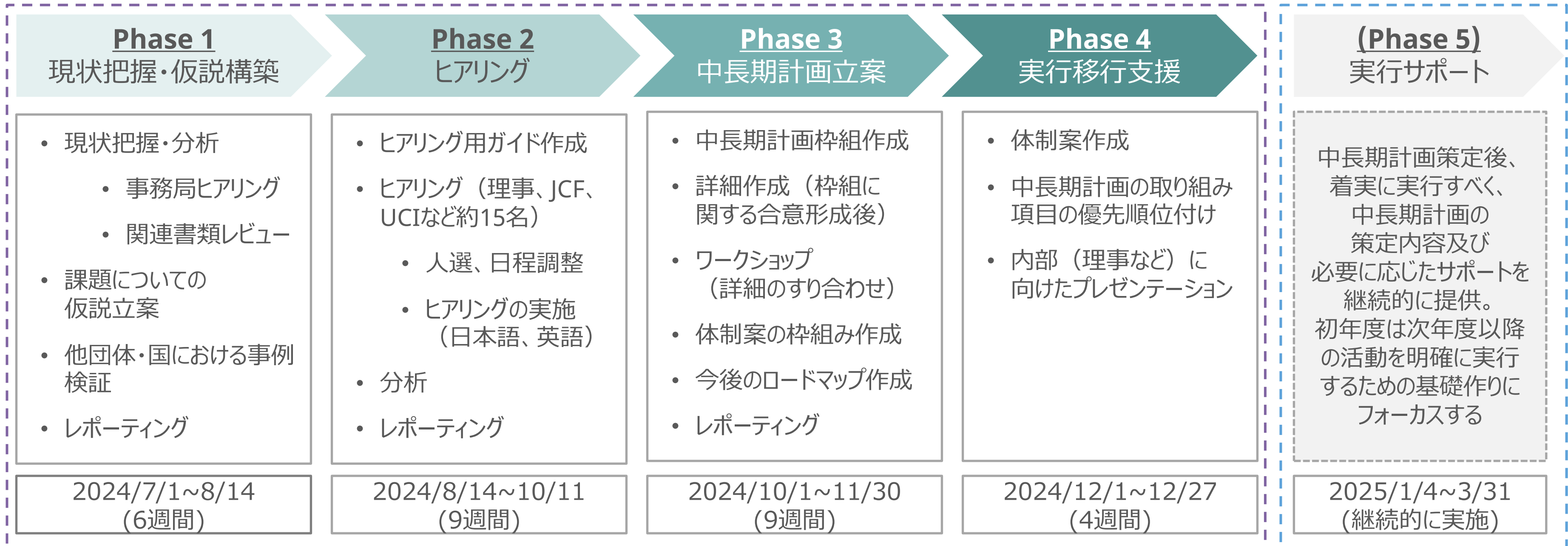
プロジェクトの進め方：全体像

初年度となる令和6年度は、中長期計画策定及び中長期計画に沿った取り組みの実施の基礎となる具体的な施策の検討を行う。なお、令和7～8年度に実施する内容を念頭に令和6年度での中長期計画策定を行い、次年度以降の計画も考えていく



プロジェクトの進め方①初年度における5つのフェーズ

本プロジェクトは初年度、まず5つのフェーズに分けて実施いたします。そこで決定した中長期計画の内容を実行に確実に移すための実行サポートを5つ目のフェーズとし、Phase 1~4完了後に継続的に実施支援いたします。2024年度のPhase 5については特に2025年度以降、確実に中長期計画を遂行できるためのレジリエントな基礎作りを中心にサポートを行った



初年度のメインフォーカス

次年度に向けた基礎作り

目次

- プロジェクト背景
- **フレームワーク**
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

Phase1ではまず現状把握とその分析を行った上で、JPCFへの学びや課題を明確化し、更に次のフェーズのヒアリングに向けた仮説構築までを実施した

現状把握・分析

仮説構築



JPCFの現状



世界のサイクリング及び
パラサイクリング連盟の現状・学び




日本のその他の競技団体の現状

これら进行分析し、
学び及びJPCFにおける
課題を明らかにする


- 現時点の分析から明らかになった現状から戦略構築に必要な課題についての仮説を構築
- 構築された現時点での仮説は次のフェーズのヒアリングの際に検証し、課題をより精緻に理解する

Phase1においては、関連資料のレビュー、事務局ヒアリング及び国内外の団体や取り組みなどに関するデスクトップリサーチを中心に現状把握を行った


現状把握に使用したソース


日本パラサイクリング連盟
 HP、事務局ヒアリング、
 各種JPCF提供資料


各種団体
 サイクリングNF（海外）、UCI、
 その他NF（国内）、NPCなど


その他リサーチ
 ニュース、プログラムサイトなど

リサーチを行った対象の国・地域、団体など

対象国	 Australia	 Canada	 New Zealand	 Europe <ul style="list-style-type: none"> - Austria - Belgium - France - Germany - Italy - Spain - The Netherlands
	 South Africa	 United Kingdom (focus: England)	 United States of America	
対象団体・サイト (例)	<hr/>			
	<div> Australia <ul style="list-style-type: none"> - Aus Cycling - Paralympic Australia </div> <div> Canada <ul style="list-style-type: none"> - Cycling Canada Cyclisme - Sport for Life </div> <div> New Zealand <ul style="list-style-type: none"> - Cycling New Zealand </div> <div> South Africa <ul style="list-style-type: none"> - Cycling South Africa </div> <div> UK <ul style="list-style-type: none"> - British Cycling </div> <div> USA <ul style="list-style-type: none"> - USA Cycling - Charlie's Champs - Bike Share Programs </div> <div> Europe <ul style="list-style-type: none"> - Cycling Austria - Belgian Cycling - Fédération Française de Cyclisme (France) - De Koninklijke Nederlandsche Wielren Unie (The Netherlands) </div>			

Phase2においては、JPCF内部の理事等の関係者を中心にヒアリングを実施した。一部ヒアリングについて中長期戦略の方向性が定まった後、実現性を意識し、ワークショップ後に実施した



ヒアリング対象組織・対象者

Phase 2でのヒアリング実施対象

JPCF関係者

- ・ 理事長：岡泰宏 様
- ・ 専務理事・ハンドサイクルコーチ：松本亘 様
- ・ ヘッドコーチ：沼部早紀子 様
- ・ 育成部会：荒賀博志 様
- ・ 広報担当（ヘキレキ舎）：小松理虔 様

Portas Consulting

- ・ 社内エキスパートネットワークと適宜ヒアリング・相談実施

国内他団体・海外パラサイクリング連盟関係者

国内の関連団体関係者

- ・ JCF：原田事務局長、三瓶HPD

Portas Consulting

- ・ 社内エキスパートネットワークと適宜ヒアリング・相談実施

海外パラサイクリング連盟関係者

- ・ UCI: Todd Fraser (Para-cycling Manager)
- ・ AUS Cycling: Warren McDonald (Para Technical Director Performance)
- ・ Paralympics New Zealand: Brendon Cameron (Para-Cycling Program Manager)
- ・ U.S. Paralympics Cycling: Ian Lawless (Director)

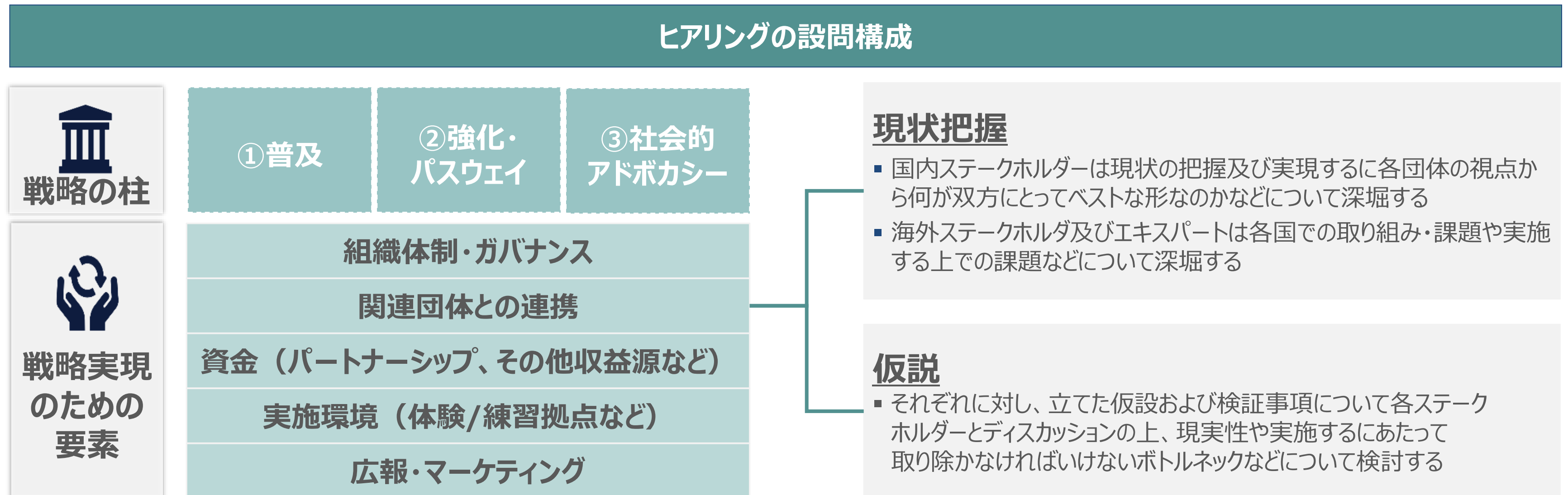
プロジェクトを進める中で、中長期戦略の方向性をJPCF内で定め、それを実現する上で、

- 1) どのようなことが可能か具体的なイメージを持った上で検証したい
- 2) 実施するにあたっての好事例及び必要な検討事項等についてヒアリングしたい

という理由から、従前はPhase 2で実施する予定だった一部のヒアリングを、ワークショップ後に実施することとした

ヒアリングの趣旨及び設問構成概要

【ヒアリングの趣旨】戦略の柱、戦略実現のための要素それぞれについて、国内外の各ステークホルダー及びエキスパートに、1) 既に把握していることの確認及び追加で深堀したい現状について訴求し、更に2) それらから出てきた仮説について実現性などを含め、ヒアリングを行い、次のフェーズの戦略構築に必要な要素をあぶりだした



例示的「戦略の柱① 普及」に関する設問例

現状・仮説を基に、各戦略の柱のヒントとなりうる設問を構築の上、深堀していく

例示的



戦略の柱① 普及

目標

- パラサイクリングをより多くの障がいを持った人に触れ競技者を増やす（＝する）だけでなく、ファンを作ること（＝見る）、競技全体としての普及を図り発展させていく

目標の達成に必要な要素

- （機会・能力）障がいの有無にかかわらず体験が可能な地域の増加、継続的にパラサイクルを体験・練習できる形の創出
- （モチベーション）パラサイクリングをやりたいという気持ちを喚起するための施策、更に見たいと思えるきっかけづくり

ヒアリングでの設問例

能力（身体的、心理的・知的）

- 参加するのに必要な最低限の身体的及び心理的・知的能力はあるか？（例：知的障がい・・・程度含め言及）
- 受け入れが難しい障がいはこれまであったか？なぜか？（能力的？用具？スタッフの対応力など）

モチベーション（内省的、自律的）

- 参加者は実際現役選手と一緒に体験し、スポーツについての魅力を直接聞く・感じる機会などは提供されているのか？
- 継続参加を促すために、体験後参加後どのタイミングで、どのような方法（手法・コンテンツなど）でフォローアップをして、継続参加に繋げているのか？

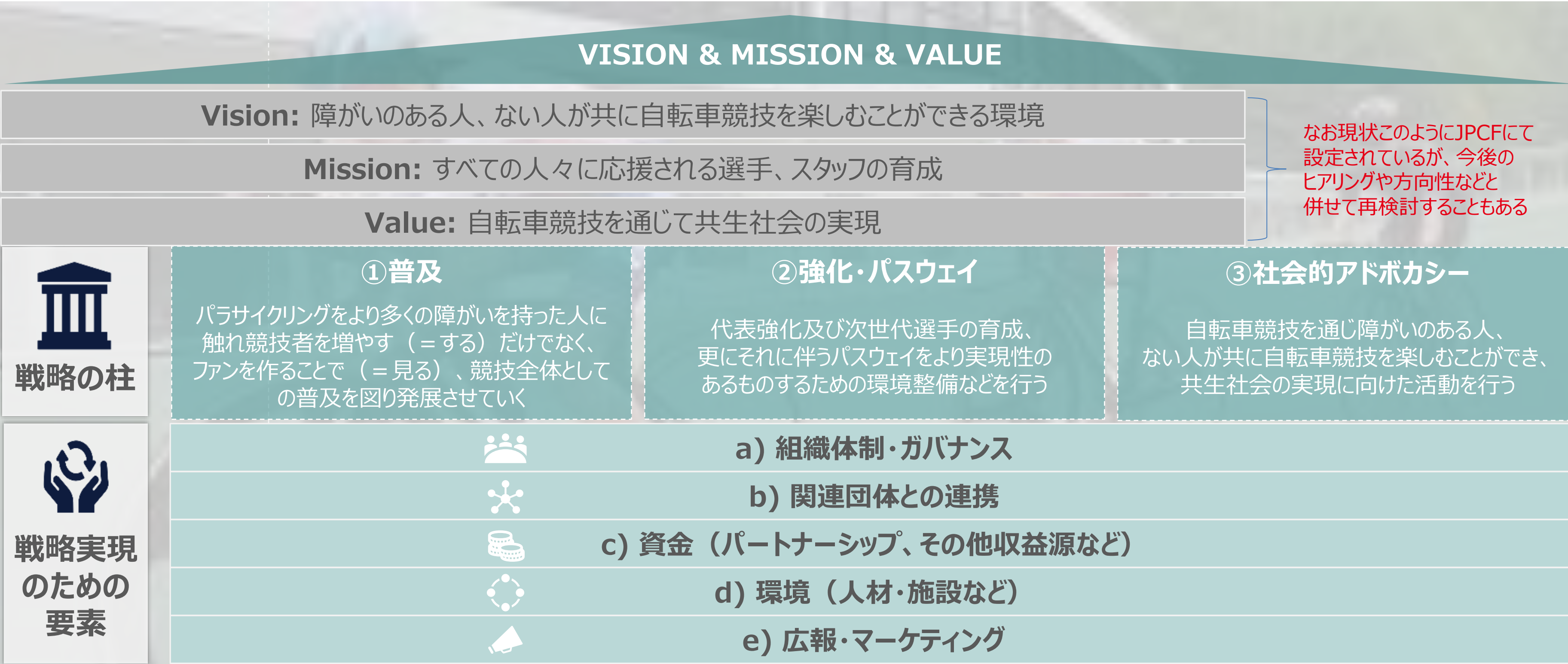
機会（物理的、社会的）

- パラサイクルに興味を持った人・持つために参加する取り組みは各地域における体験会以外は何があるか？
- 体験会以外で興味を持ってくれた人が問い合わせをしやすい窓口などは設置しているのか？
- （体験会について）
 - 特に今後特に拡大していきたいターゲット層は？（クラス別、大まかな障がい別など）
 - どのように参加者を募っているのか？どのような募集方法が最も効果的だったのか？ターゲットとする障がい特性によって募集方法などは検討・区別して行っているのか？
 - 各地域で実施するにあたり何が一番なのか？（用具、スタッフ・ボランティア、参加者募集、広報など）ボトルネックはなににか？
- 体験会后、継続して参加したい場合、受け皿は事前に確保しているのか？次のステップにつなげるための具体的な対応策は何があるか？
- 各地域で参加したいと希望があった場合、どのようなサポートを提供しているのか？

その他

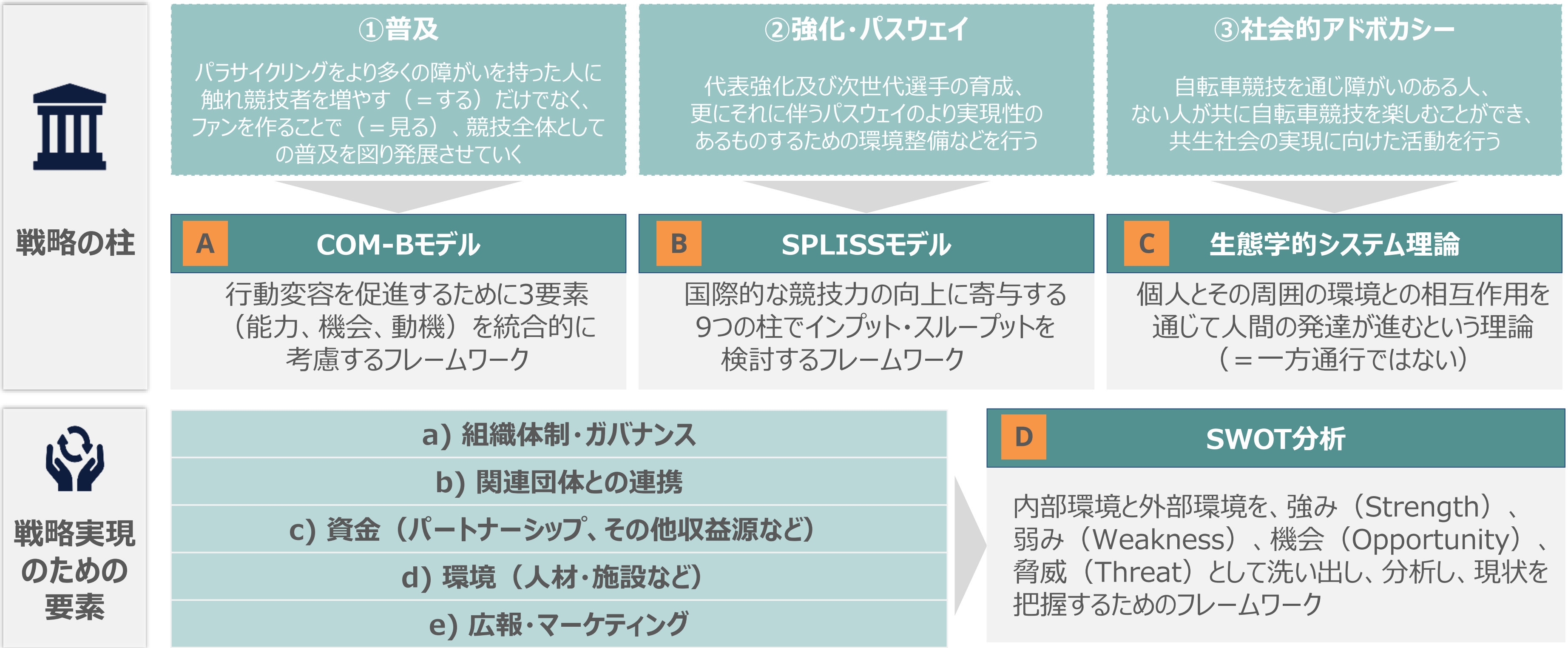
- （エキスパート、海外ステークホルダー向け）海外・各国でどのように行っていて、何が効果的・課題だったのか？

なお、はじめに戦略的な方向性を示す中長期戦略のフレームワークを下記の通り設定し、想定する戦略の柱・実現するための要素に沿った現状分析・課題の整理及び仮説構築を行った



なお現状このようにJPCFにて設定されているが、今後のヒアリングや方向性などと併せて再検討することもある

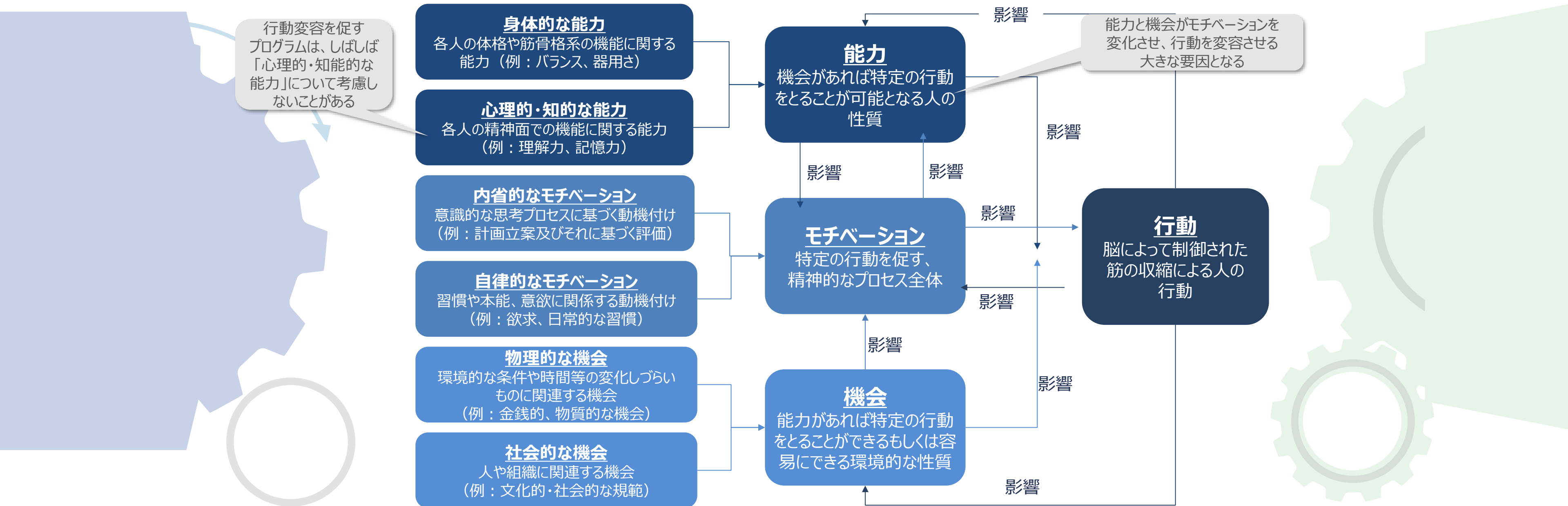
更に、それぞれの戦略の柱及び戦略実現のための要素に対して最も適したモデル・理論のレンズを通して現状把握・分析を行った



A

COM-Bモデル：パラサイクルに参加し、行動変容を促進するために必要な相互に影響する3つのメカニズムをCOM-Bモデルを活用し特定し、パラサイクルの価値を明確にする

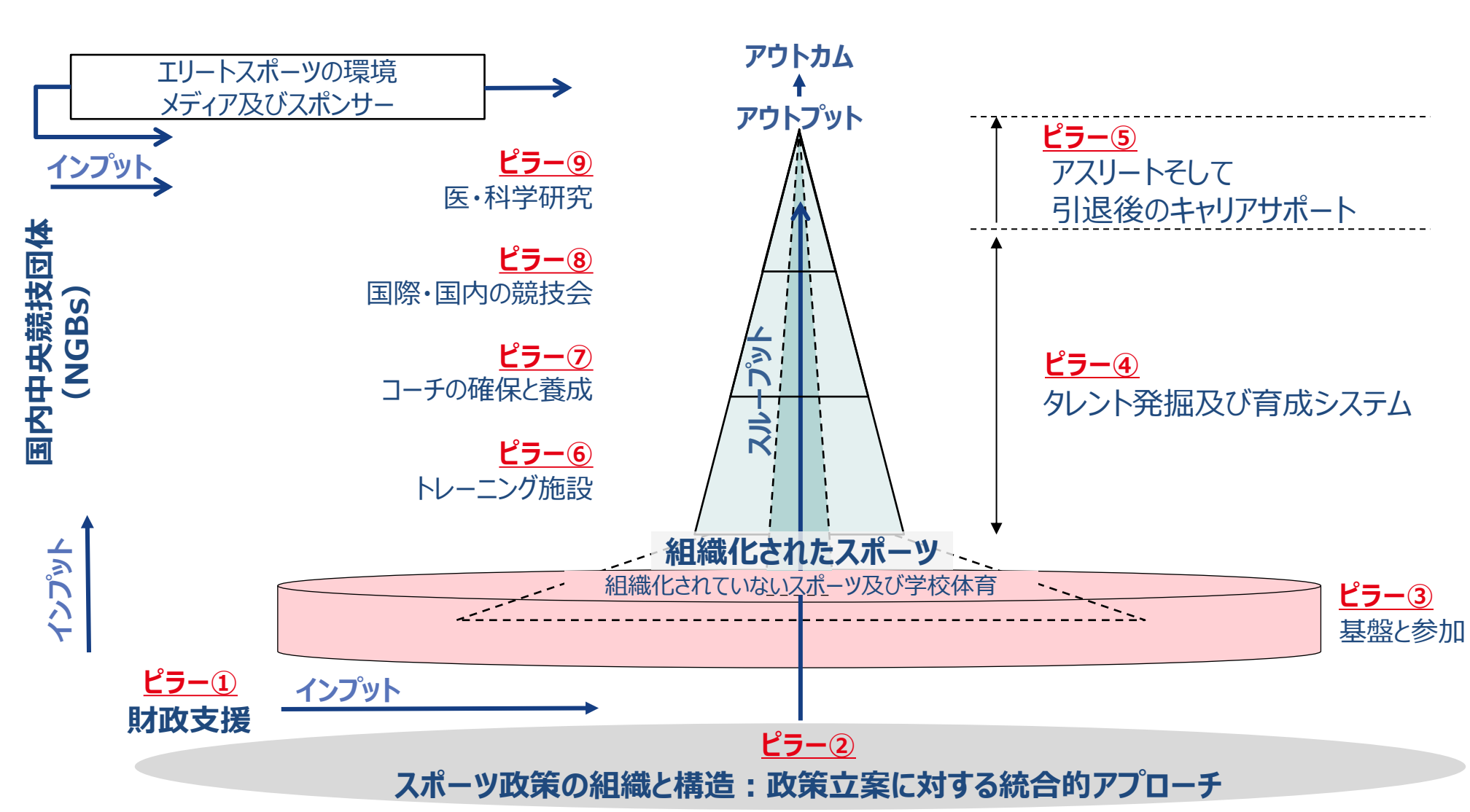
COM-Bモデルとは行動変容を促進するために3要素を統合的に考慮するフレームワーク



COM-Bモデルを活用することで、普及を推進するにあたって必要不可欠な「能力」・「モチベーション」・「機会」を分析でき、「行動」を促進するための方向性について過不足なく検討が可能

B SPLISS モデル：強化・競技力向上において重要となる各ピラーについて分析を行い、パスウェイ及び強化事業についてどこに課題があるかを検討する

SPLISS*モデルとは、インプットであるピラー①の財政支援によって、ピラー②～⑨の柱が有効的に機能し、いかに国際競技力向上という目的を達成するかを検討するためのモデル



9つの柱（ピラー）	説明
ピラー①	財政支援
ピラー②	スポーツ政策の組織体制と構成
ピラー③	基盤と参加
ピラー④	タレント発掘・育成システム
ピラー⑤	競技およびポストキャリアサポート
ピラー⑥	トレーニング施設
ピラー⑦	コーチの確保・養成
ピラー⑧	国際・国内競技大会
ピラー⑨	医・科学研究

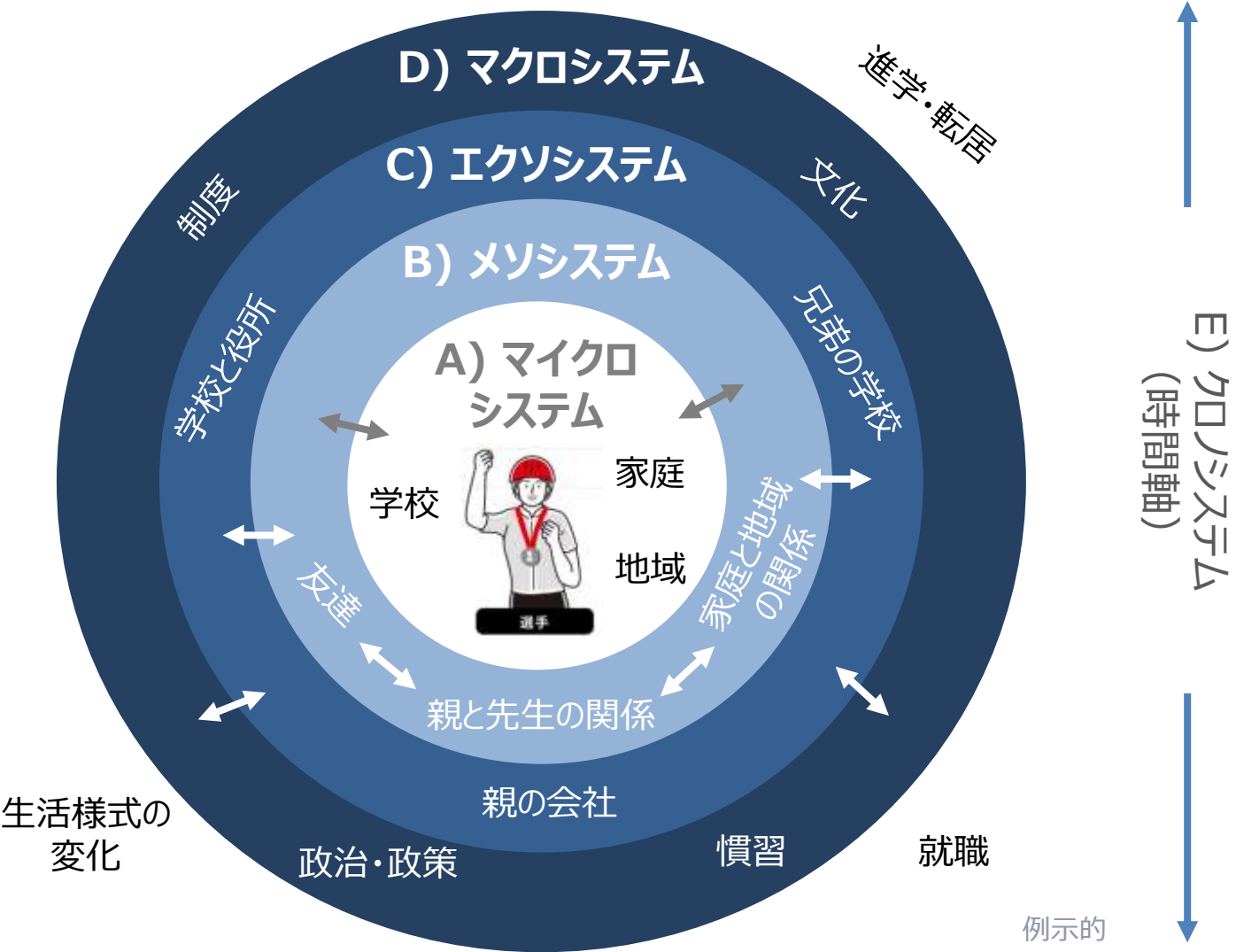
国際競技大会にて入賞した選手は、特にピラー②、④、⑧において優れた環境下にいることが研究で明らかになっている
(De Bosscher et al., 2008)

SPLISSモデルを活用し、各ピラーを網羅的に分析することで、
広く課題把握が可能となり、包括的な視点でのパスウェイ及び強化の戦略を立案することができる

C

生態学的システム理論：「生態学的システム理論」を応用し、各レイヤーでこれまでどのような活動がなされ、今後どのようなことが必要なのかについて明らかにする

生態学的システム理論とは個人とその周囲の環境との相互作用を通じて人間の発達が進むという理論。常に個人を囲む環境は双方向への影響を与えるため、個人が変わることで周囲も変わるとされている



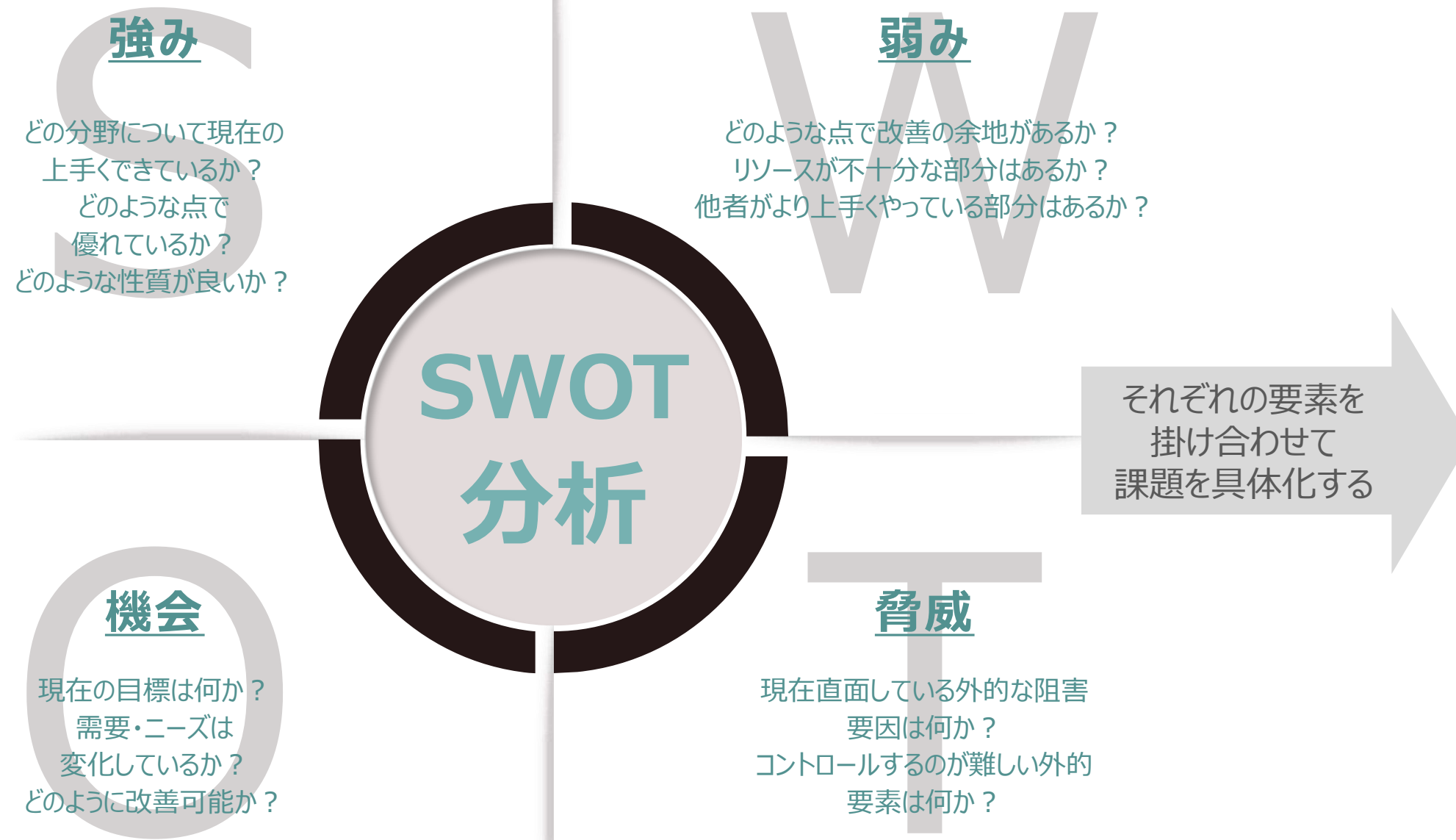
システム・レイヤー	説明	例
A) マイクロシステム	個人が直接関わる対象や場所との相互関係	家族、学校、担任の先生、地域など
B) メソシステム	個人が直接関わる複数のシステム同士の相互関係を指す	親と担任の先生の関係、学校と地域の関係、友達同士の関係、家庭と地域の関係など
C) エクソシステム	個人とは直接関連していないが、他の人を介して自分や周囲に影響を与える相互関係	兄妹の学校、親の会社、学校と役所など
D) マクロシステム	上記3つのシステムの背後にある決まりごと（慣習）や文化、制度など	文化、制度など（児童自動福祉法など）
E) クロノシステム	時間経過の中で個人に影響を及ぼす出来事や環境変化	兄妹の誕生、引っ越し、卒業・就職など

生態学的システム理論を活用することで、これまで行ってきたことがどのシステムに寄与しているのか、またどのシステムに直接寄与できていないのかが明確になるため、今後の活動を計画するにあたり役立つ

D

SWOT分析: 内部環境（強み・弱み）・外部環境（機会・脅威）をそれぞれ分析し、JPCFの置かれている状況を客観的に整理することで、抱える課題に対する対策の具体化を行うことができる

SWOT分析とは内部環境（強み・弱み）及び外部環境（機会・脅威）を分析し、経営環境について把握する分析手法



■クロスSWOT分析

内部環境と外部環境を意識しながら、プラス要因やマイナス要因に分類した4つの項目について分析するフレームワーク

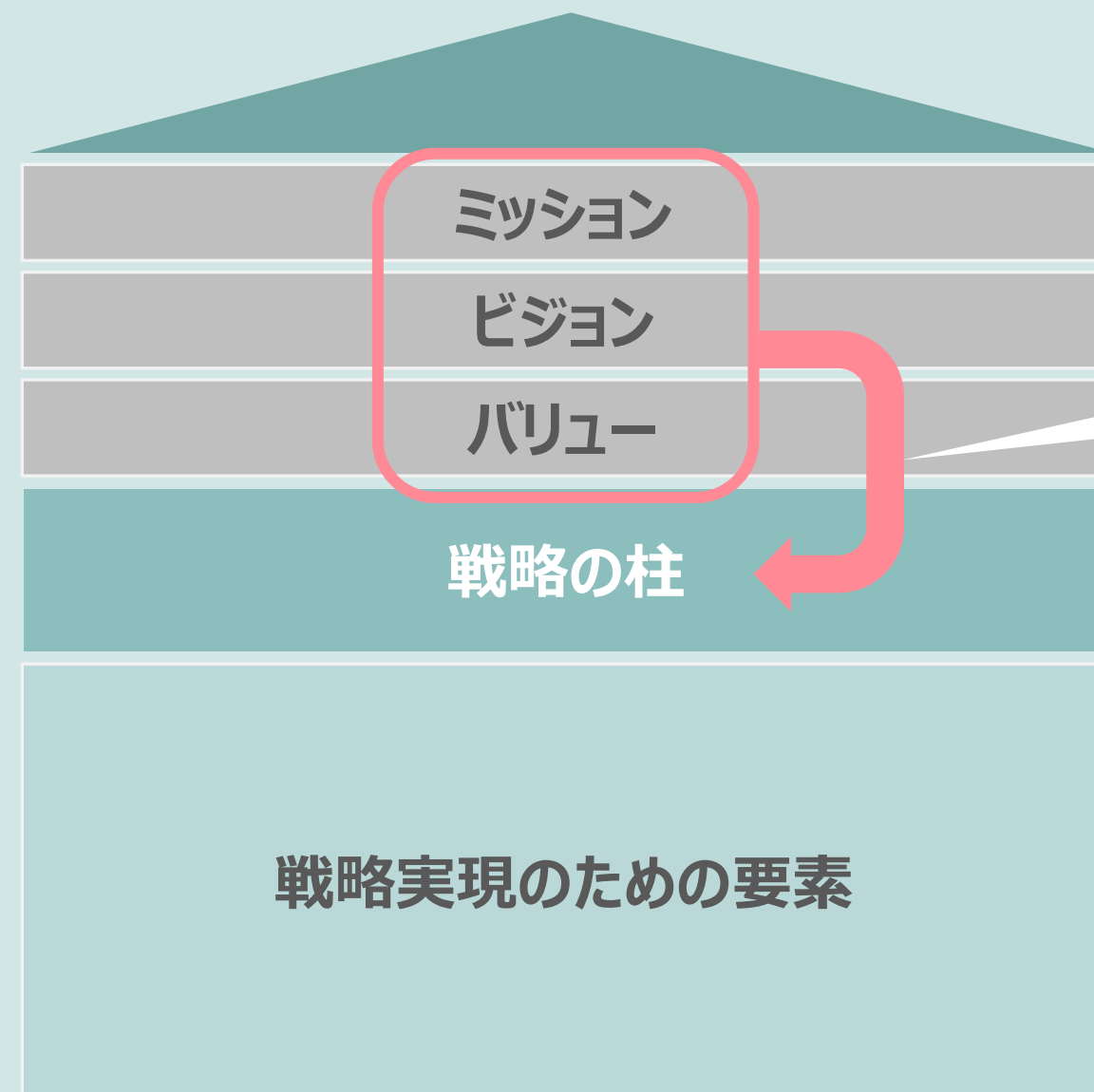
	Strengths (強み)	Weaknesses (弱み)
Opportunity (機会)	強み×機会 機会を捉えて強みを 最大限活かす	弱み×機会 弱みによって機会を 逃さない
Threats (脅威)	強み×脅威 脅威を回避するために 強みを活かす	弱み×脅威 弱みと脅威による 最悪の事態を 回避する

目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- **Mission / Vision / Valueの見直し**
- 現状把握・分析
 - 戦略の柱① 普及
 - 戦略の柱② 強化・パスウェイ
 - 戦略の柱③ 社会的アドボカシー
 - 戦略実現のための要素
 - SWOT分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

適切なミッション・ビジョン・バリュー(MVV)を設定することは、団体の戦略の方向性を決めるにあたり、組織の方針が明確となり一貫性を担保できるため必要不可欠である

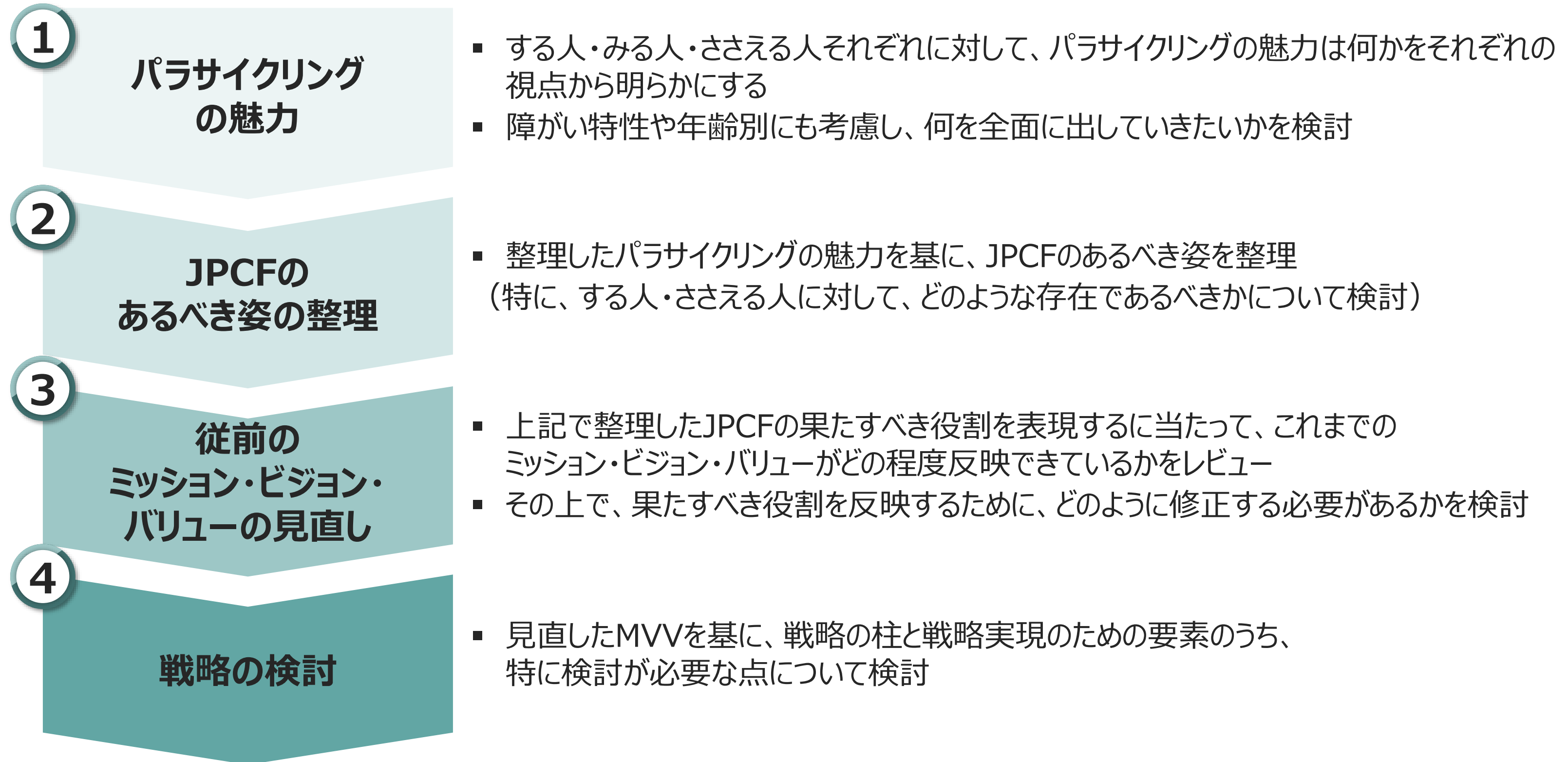
ミッション・ビジョンバリューを指針とした戦略の策定



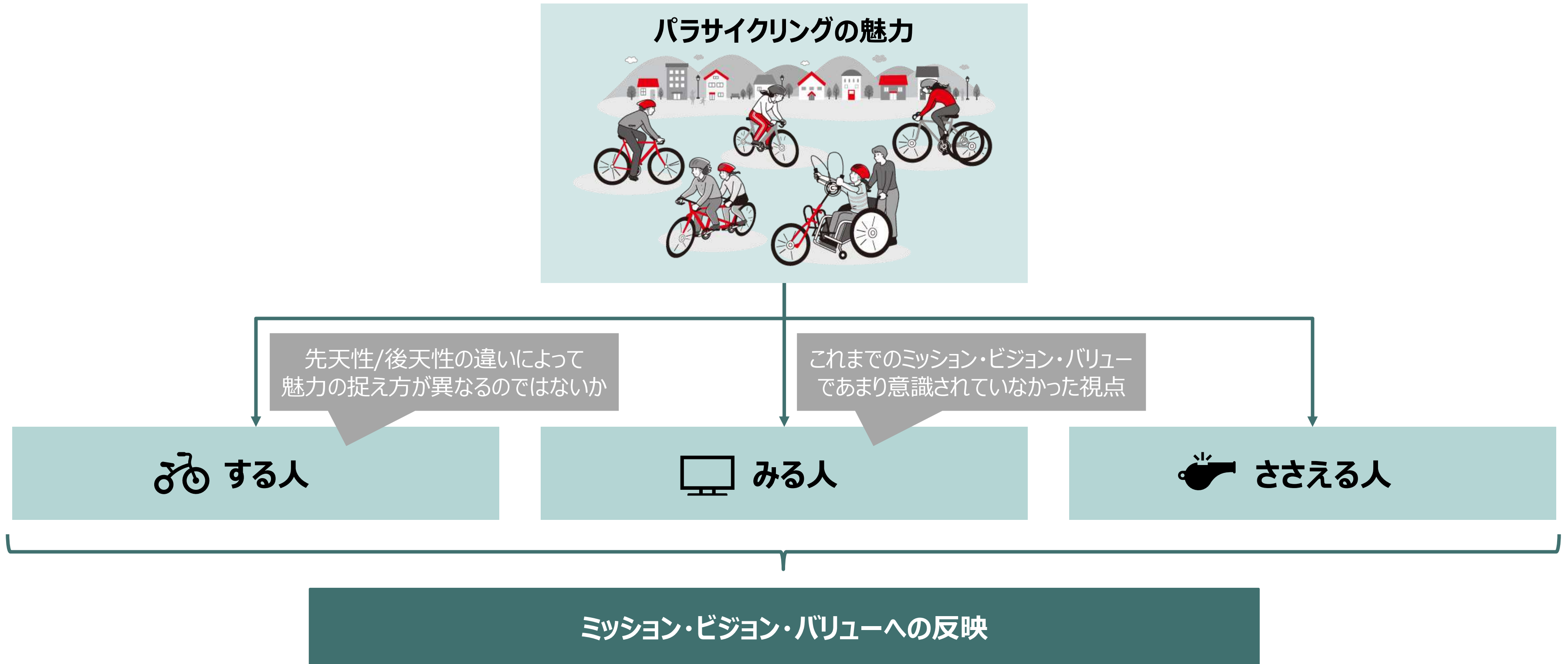
策定したミッション・ビジョン・バリューを指針として共有することで、一貫した戦略・計画の策定や、それらに基づく業務の遂行が可能となる

しかしワークショップにおいてJPCFとして
目指したい・大切にしたい点が、
現在のMission / Vision / Valueでは
表されていないことが明らかになったため、
Mission / Vision / Valueの見直しを急遽行った

戦略構築の基礎となるMVVを策定するにあたり、パラサイクリングの魅力を基に、まずJPCFが考える「あるべき姿」を整理し、それが反映されるようなMVVの見直しを行った



①【パラサイクリングの魅力の言語化】まずミッション・ビジョン・バリューに反映するために、する人・みる人・ささえる人のそれぞれの視点でのパラサイクリングの魅力を言語化した上で、整理した



①【魅力の言語化】する人:パラサイクリングを通じて、日常生活で感じられない「風」を感じ、第二の人生のスタートや生活の質の向上につながる

先天性+幼児期の後天性

風を感じる 体験ができる

- 先天性の場合は、自分の力で動ける速度域での経験しかなく、自転車に乗ることで、感じたことがない風を感じるができる
- 初めて漕ぎ出した時の顔が可能性を感じている顔

スポーツ自体が 人生における 挑戦

- 教育・家庭環境の影響から、人に助けられることに慣れており、生まれてから挑戦することがなかった人が多い
 - 特定の障がい特性のみのコミュニティが多い人とそうでない人で傾向は異なる
- そのため、スポーツをするということがそのような環境から自立する第一歩となっている

新たな風景が 見られる、 行動範囲が 広がる

- 新たな風景・場所を経験することで、五感を感じる経験ができる
- 自転車に乗れるようになることで行動範囲が大きく広がる

競技を通じた 「工夫」の意識 の向上

- 競技における工夫を通じて、生活における工夫のヒントを得ることで、QOLが向上し、第二の人生の始まりとすることが出来る

後天性

風を感じる ことが出来る

- 自転車で走ることで、風を感じ、走ることを喜びを感じる

誰でも第二の人生 を楽しむことが 出来る

- どのような人が来ても何らかの自転車に乗ることが出来る
- 自転車に乗れるようになることで、全然違う生き方を楽しめるようになる
- 加えて、新しいコミュニティができ、周りの良い影響を受けることが出来る

日常生活の クオリティ の向上

- トレーニングを積むことで、生活で出来ることが増える
- 道具を工夫することで、できないことが出来るようになり、人生における希望や工夫のきっかけを得ることが出来る

自転車に 乗ることで 生きる意味を 感じる事が できる

- 障がいを負ってしまったことで、以前は出来ていたが、今は出来ないと思っていたことが出来るようになることで、生きる意味を見つけられる
 - 「まさかまた自転車に乗れるなんて」
- 新たな目標が出来、チャレンジ出来る
 - 障がいを負うことで乗れなくなってしまった自転車にまた挑戦する経験が出来る

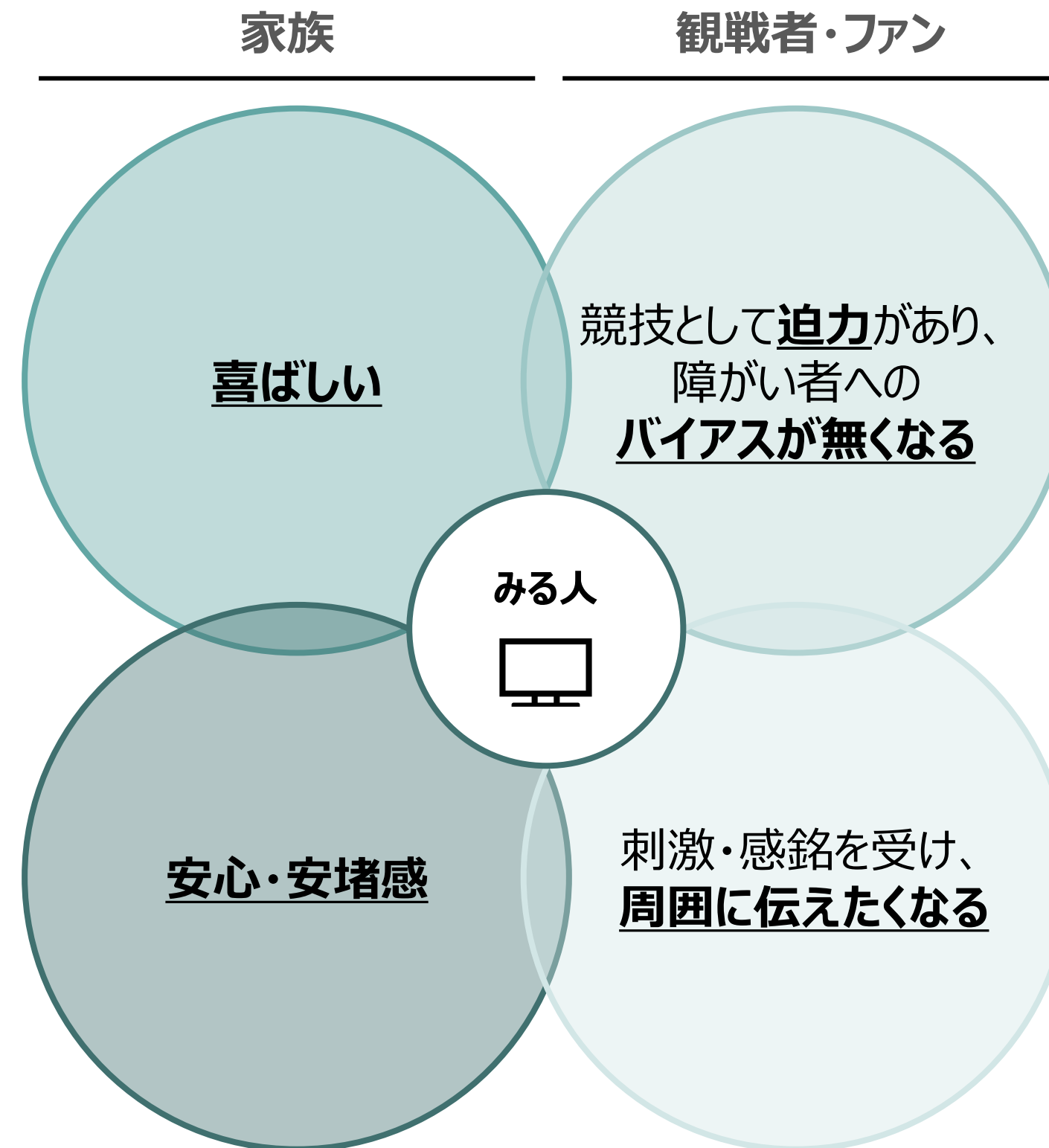
する人において重要な要素

- **風を感じられる**
 - 自分の力で普段の生活では感じられない風（＝速度）を体感することが出来る
- **第二の人生の楽しめるようになる**
 - 自転車に乗れるようになることで、行動範囲やコミュニティが広がり、これまでと異なる人生を送ることが出来る
- **日常生活の質の向上**
 - トレーニングによる体力・身体能力の向上や道具等を工夫する方法を学ぶことにより、生活で出来ることが増える

1 【魅力の言語化】みる人:競技に迫力があり、純粋に競技として楽しむ中で、障がい者へのバイアスを無くし、刺激・感銘を受けたことを周囲に伝えたいくなる

- 自転車（スポーツ）に取り組む元気で楽しそうな様子を見て喜ばしく思っている

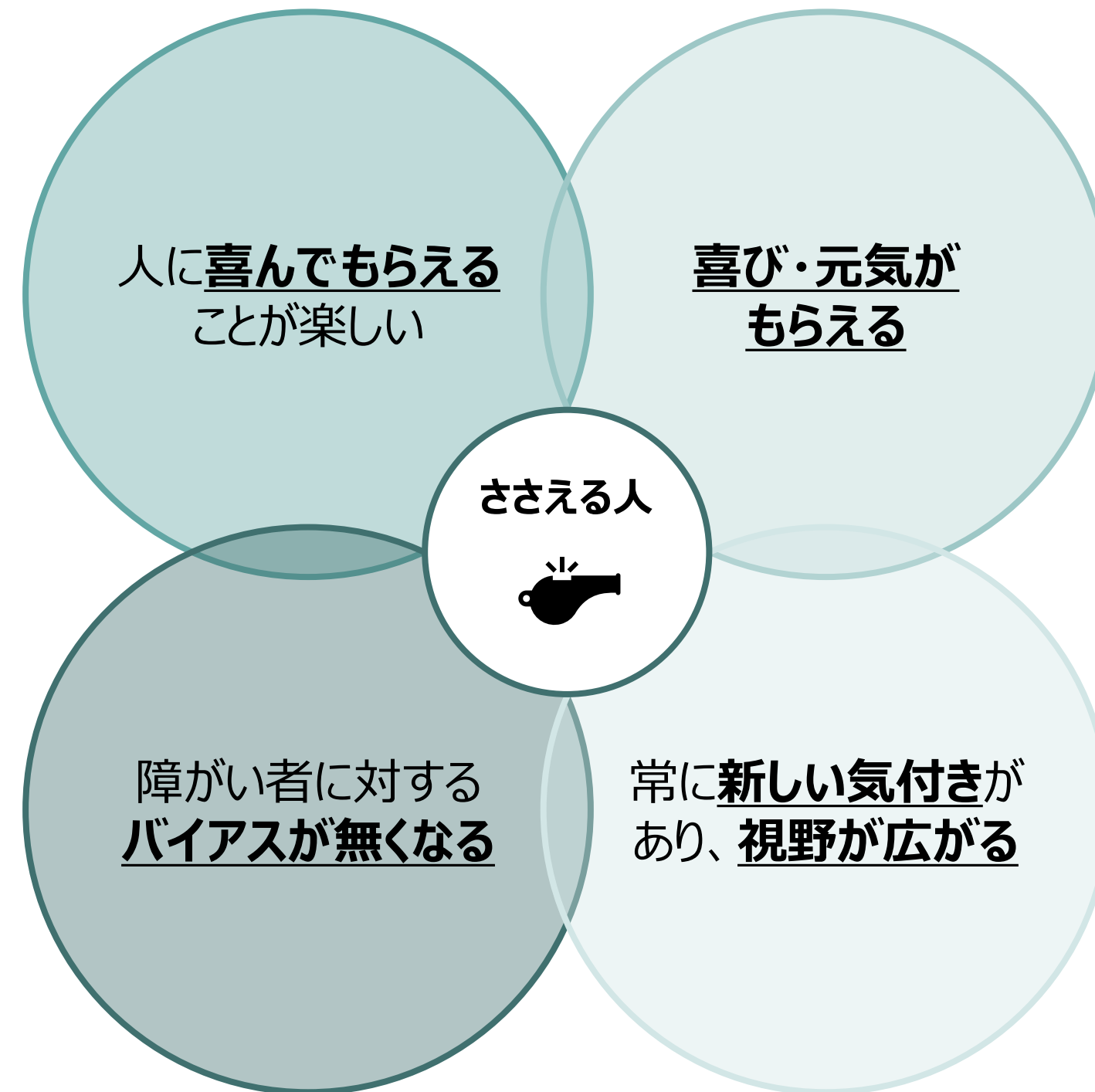
- 障がいを負ってしまったことに対しての後ろめたさがあり、スポーツ及び自転車に楽しそうに取り組んでいる様子を見て安心・安堵感がある



- 日常的な乗り物だが、レースが非常にハードで、見るスポーツとしてハラハラを楽しむことが出来る迫力があり、自転車競技に関心の有る層は競技として楽しみやすいのではないか
- 競技としてのすごさ、面白さが競技者が障害を持っていることを忘れさせてくれる
- 「障がい者は自転車に乗れない」という考え方がなくなる
- 選手の頑張っている様子に刺激を受け、自分自身も襟を正したくなる
- 加えて、その感情を周囲に伝えて共有したくなる

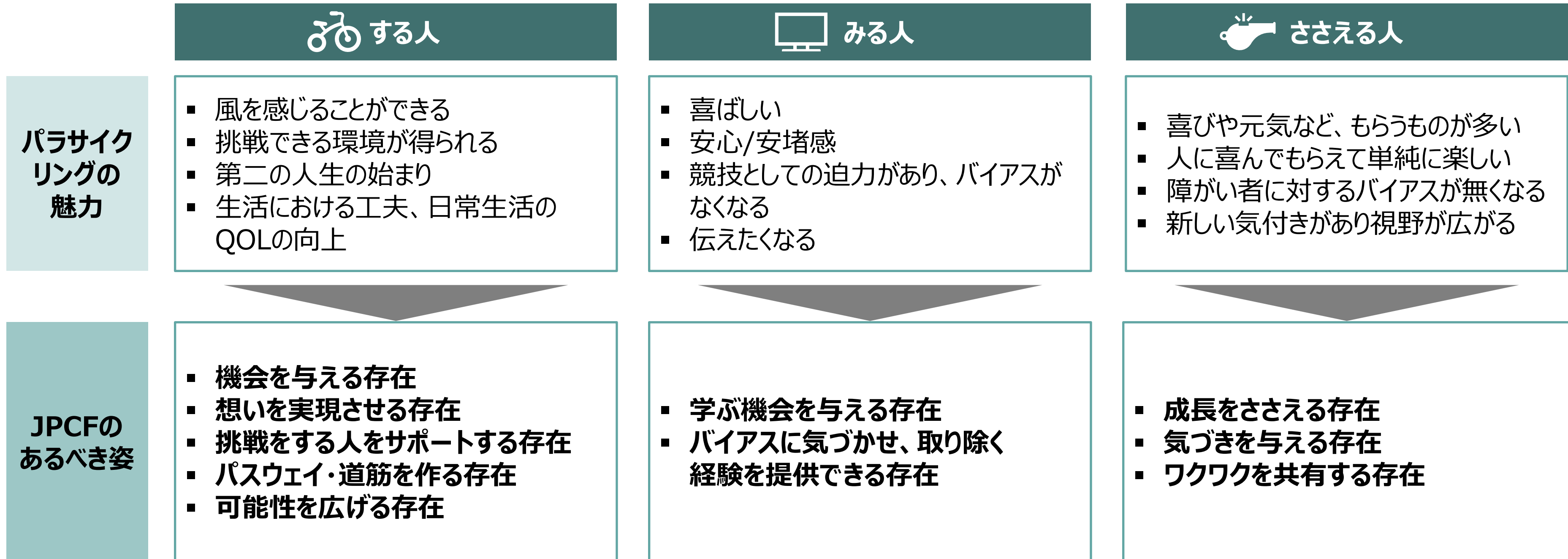
1 【魅力の言語化】ささえる人:障がい者が自転車に乗れる感動を共有し、パラスポーツ特有の新たな視野が獲得できることがパラサイクリング固有の魅力

- 単純に人に喜んでもらえる活動が出来る
- とにかく楽しい
- 自分の持っている無意識・意識的なバイアスがあることで、バイアスに気づく瞬間やバイアスがなくなる瞬間が定期的に訪れることで、新鮮な発見がある



- 日常的な乗り物だが、レースが非常にハードで、見るスポーツとしてハラハラを楽しむことが出来る迫力があり、自転車競技に関心の有る層は競技として楽しみやすいのではないかと
- 競技としてのすごさ、面白さが競技者が障がいを持っていることを忘れさせてくれる
- 「障がい者は自転車に乗れない」という考え方がなくなる
- 健常者向けの指導は、道筋を示して引っ張り上げるイメージだが、障がい者向けには選手と共に課題を捉え解決していくプロセスを共有できるので、プロセスが全く異なる
- パラサイクリングの男子選手は、健常者の自転車競技の女子選手と同等のスピードで走ることが出来るため、一緒に練習することができ、練習を通じて新たなコミュニティを作ることが双方の利益につながる

②【JPCFのあるべき姿の整理】パラサイクリングの魅力をそれぞれの主体に感じてもらうために、JPCFがどのような役割を果たすべきかを検討した



③【ミッション・ビジョン・バリューの見直し】JPCFのあるべき姿を踏まえて、戦略の指針となるミッション・ビジョン・バリューの見直しを行った

JPCFの あるべき姿	🚲 する人	🖥️ みる人	🔥 ささえる人
	<ul style="list-style-type: none"> 機会を与える存在 想いを実現させる存在 挑戦をする人をサポートする存在 パスウェイ・道筋を作る存在 可能性を広げる存在 	<ul style="list-style-type: none"> 学ぶ機会を与える存在 バイアスに気づかせ、取り除く経験を提供できる存在 	<ul style="list-style-type: none"> 成長をささえる存在 気づきを与える存在 ワクワクを共有する存在

再掲

これまでのミッション・ビジョン・バリュー		見直し後のMVV（仮）	
ミッション	すべての人々に応援される選手、スタッフの育成	➡	「 <u>する人</u> 」「 <u>みる人</u> 」「 <u>ささえる人</u> 」全ての人の挑戦をサポートし、 <u>成長を後押しする追い風</u> となる そして <u>あらゆる人とワクワクを共有</u> し、共に <u>新しい追い風</u> を生み出す
ビジョン	障がいのある人、ない人が共に自転車競技を楽しむことができる環境	➡	自転車を通じて <u>誰もが風を感じ、可能性を広げられる社会</u> を実現する
バリュー	自転車競技を通じて共生社会の実現	➡	<u>熱意を持って挑戦</u> し続ける <u>変化、失敗</u> を恐れない 互いに <u>リスペクトし、追い風を送りあう</u>

③ ワークショップで出てきた案をベースにJPCF広報担当者に正式なMission / Vision / Valueの作成を依頼し、正式な新しいMission / Vision / Valueが決定した

上記のワークショップに参加していたワーキンググループで明らかにした要素と方向性をベースに、JPCFの広報担当に新たなMVVを作成を依頼し、中長期戦略の方向性・目指すべき姿が体现された、新たなMission/Vision/Valueが完成した

MISSION

あらゆる人たちに届く追い風を、共に生み出す

する人（当事者）、みる人（観客）、ささえる人（支援者）、
すべての挑戦をサポートし、
成長を後押しする「追い風」になるとともに、
あらゆる人たちとワクワクを共有し、
共に新しい追い風を生み出す。

VISION

自転車を通じて、だれもが風を感じ、
可能性を広げられる社会を実現する

「乗れた！」という喜び。
「支えることができた！」という喜び。
そして、その瞬間を目撃できる喜びが、
だれかの可能性を広げ、世界を舞台に戦う選手を後押す。
私たちは、自転車を通じてだれもが風を感じ
可能性を広げられる社会を実現する。

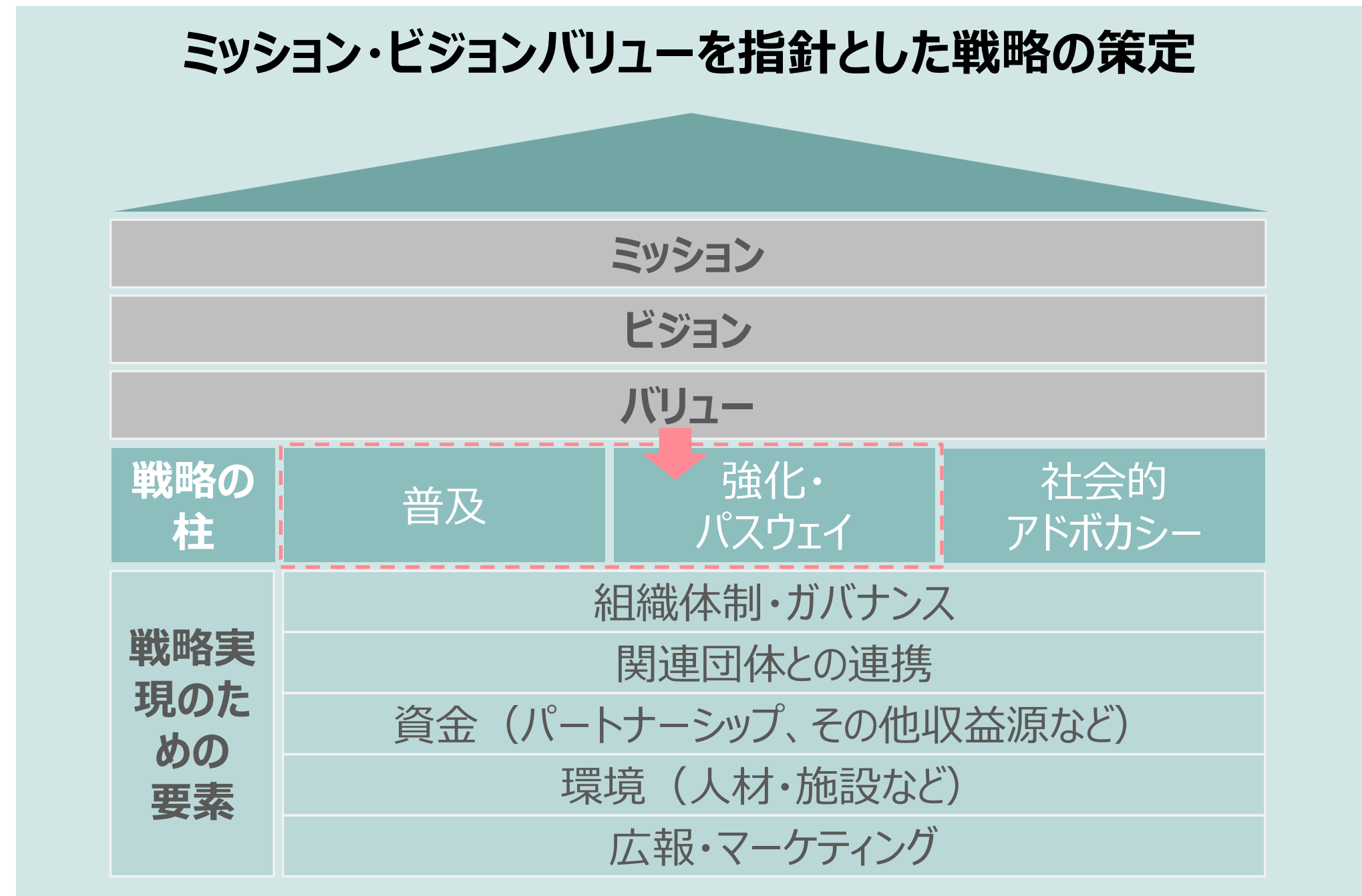
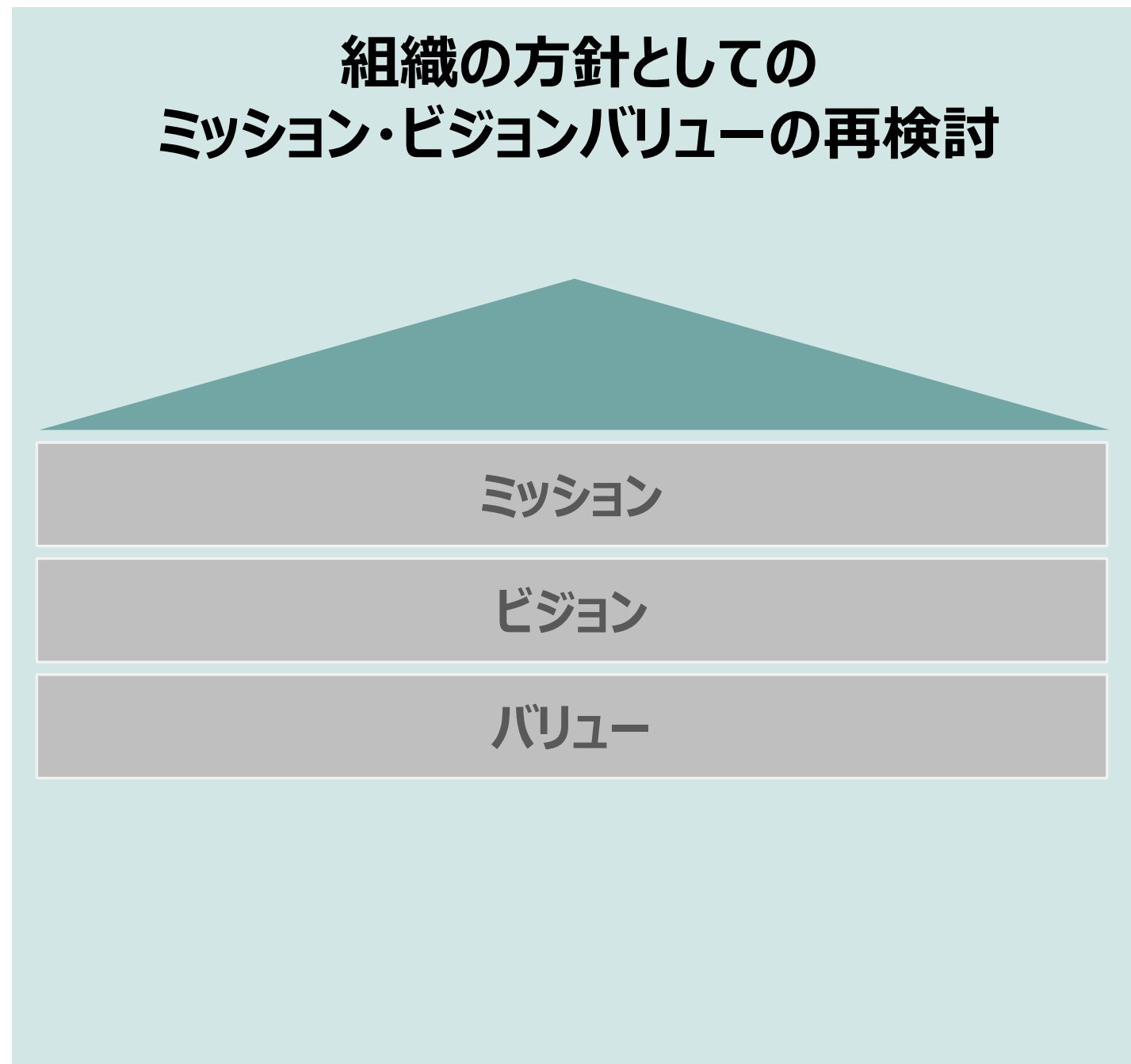
VALUE

熱意を持って挑戦し続ける
変化、失敗を恐れない
互いにリスペクトし、追い風を送りあう

※その他、これらMVVを表現するためのステートメントも併せて作成

このプロセスを中長期計画の実行を中枢で担うメンバーで実施したことで、団体の方向性の理解及び各々がすべき役割について関係者がより理解を深めるだけでなく、全員が同じ方向を向いて今後中長期計画に取り組むという意識づけができた

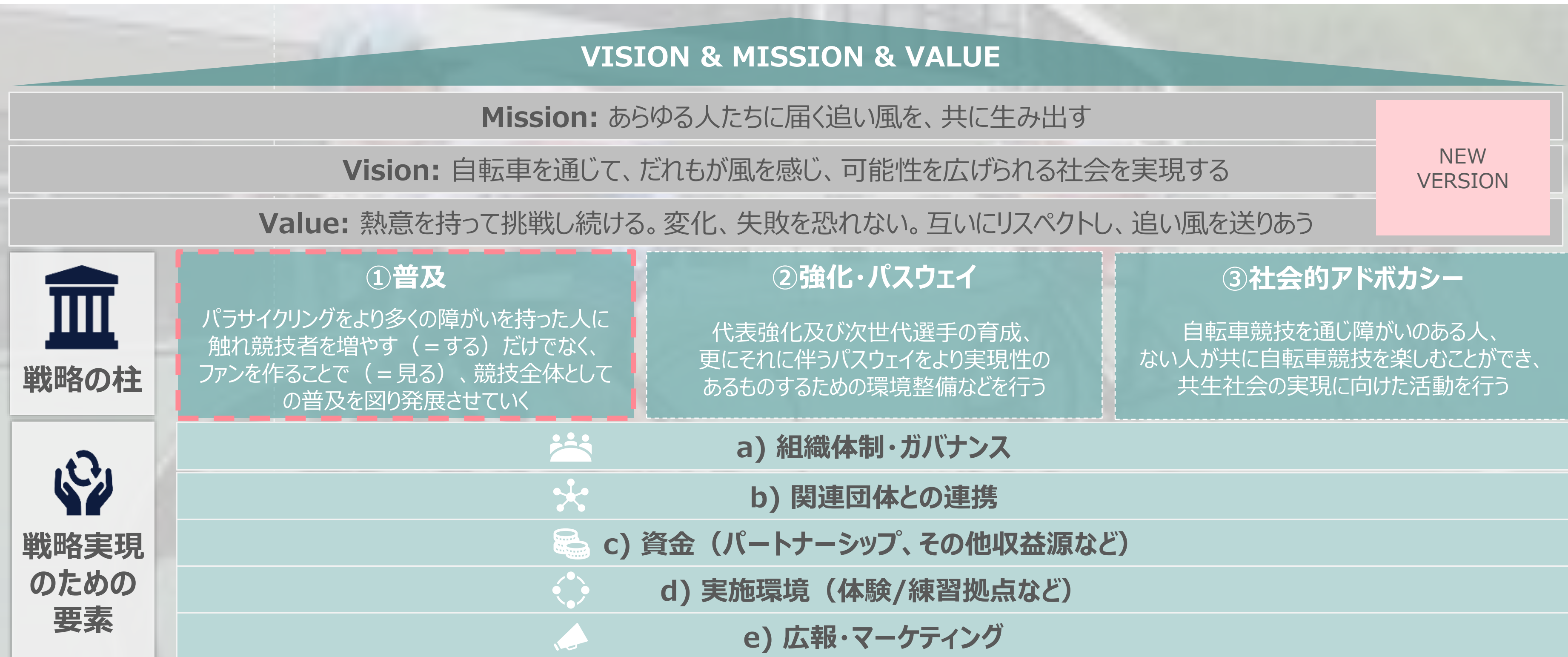
④ 再検討したミッション・ビジョン・バリューを指針とし、最終的な戦略及びロードマップ案の検討・作成を進めた



目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
 - **戦略の柱① 普及**
 - 戦略の柱② 強化・パスウェイ
 - 戦略の柱③ 社会的アドボカシー
 - 戦略実現のための要素
 - SWOT分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

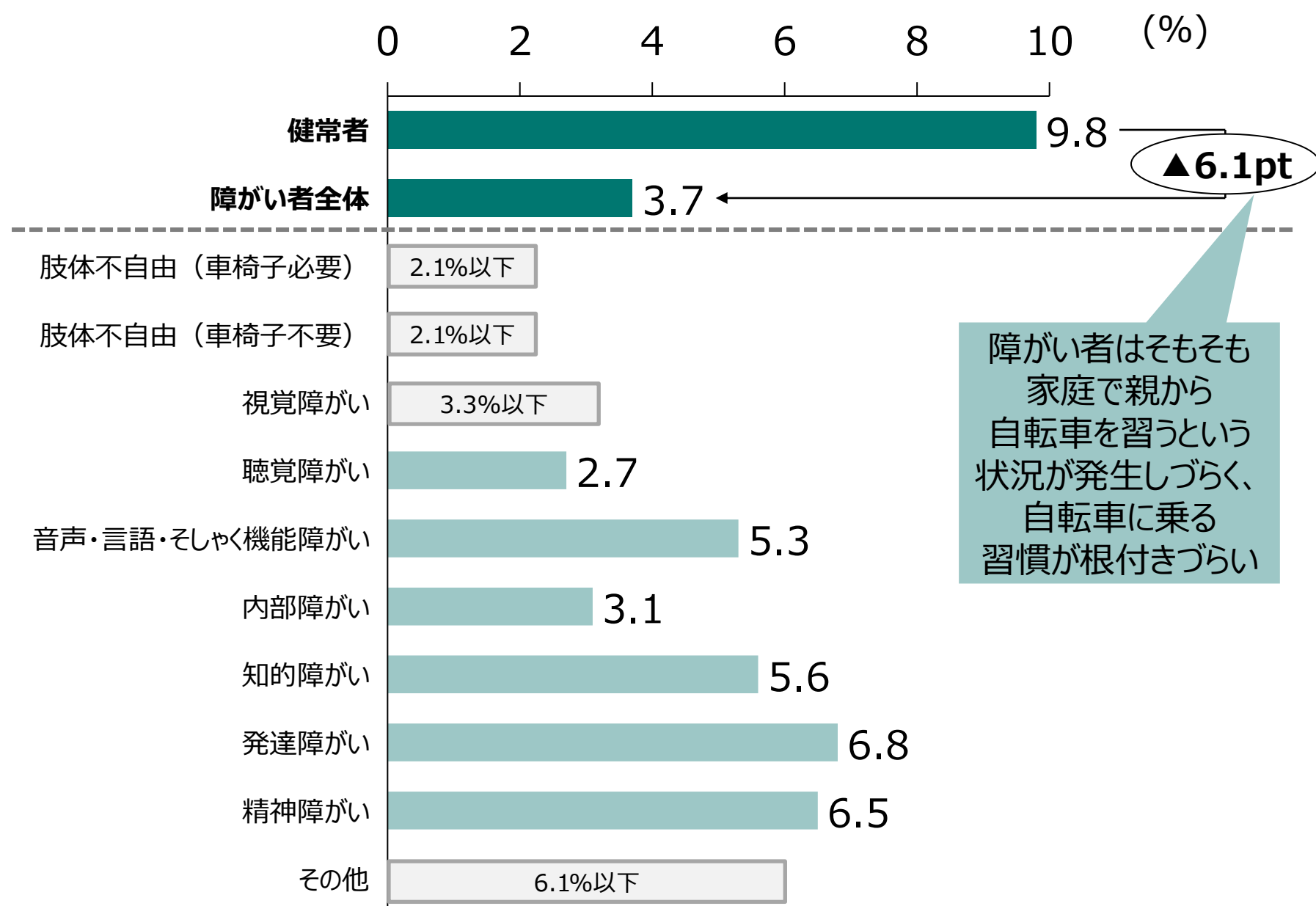
現段階の戦略的な方向性を示す中長期戦略のフレームワーク



戦略を策定するにあたり、まず現状として障がい者は健常者と比較しても日常的にエクササイズとして自転車に取り組む割合も低く、競技者登録数も2018年をピークに減少している

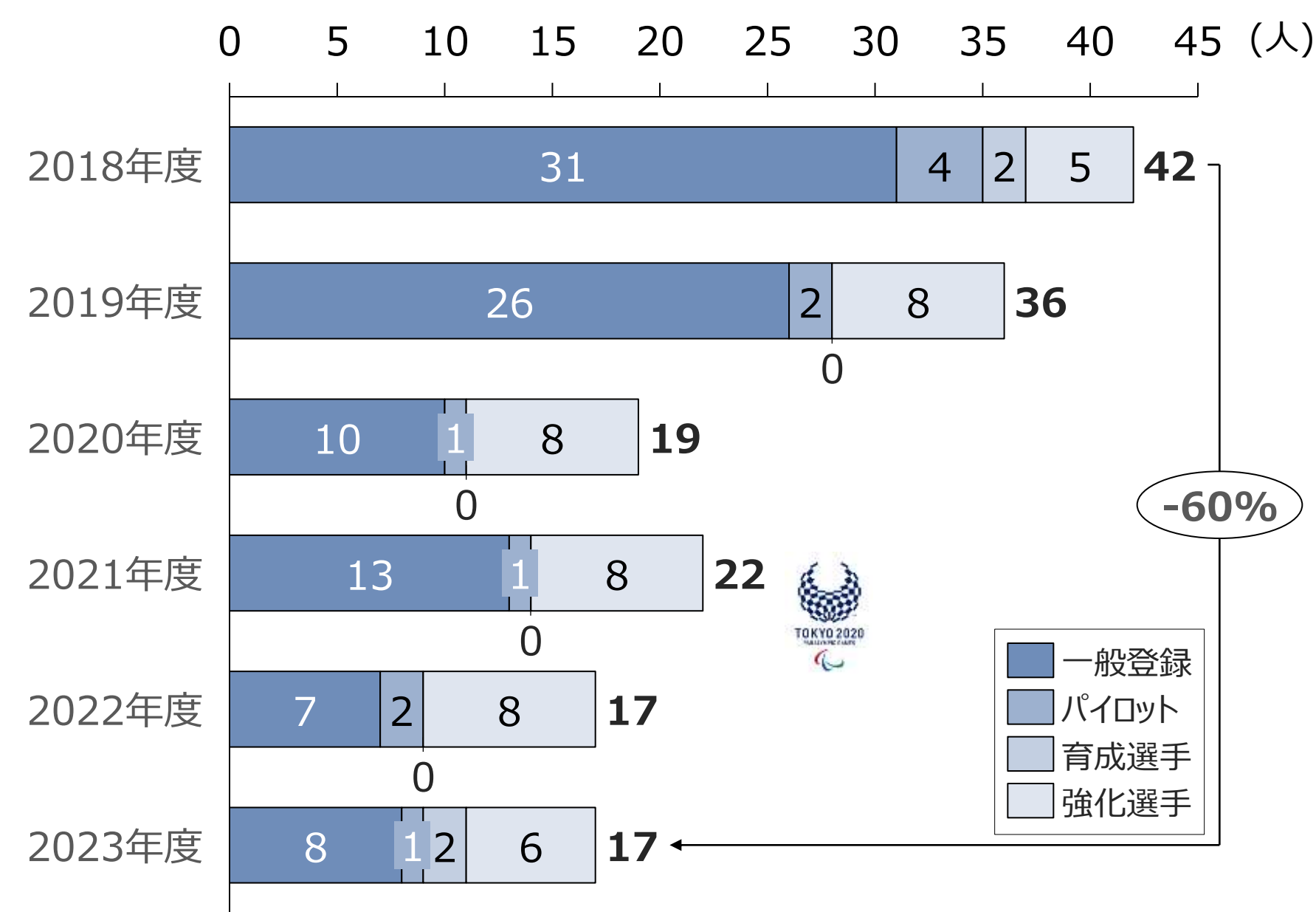
日常的にエクササイズとして自転車に取り組む割合

障がい者全体として、自転車に取り組む割合が低く、さらに、肢体不自由や視覚障がいなどのパラサイクリング選手の対象となる障がいでは更に低い



JPCF選手登録者数(2018-2023年度)

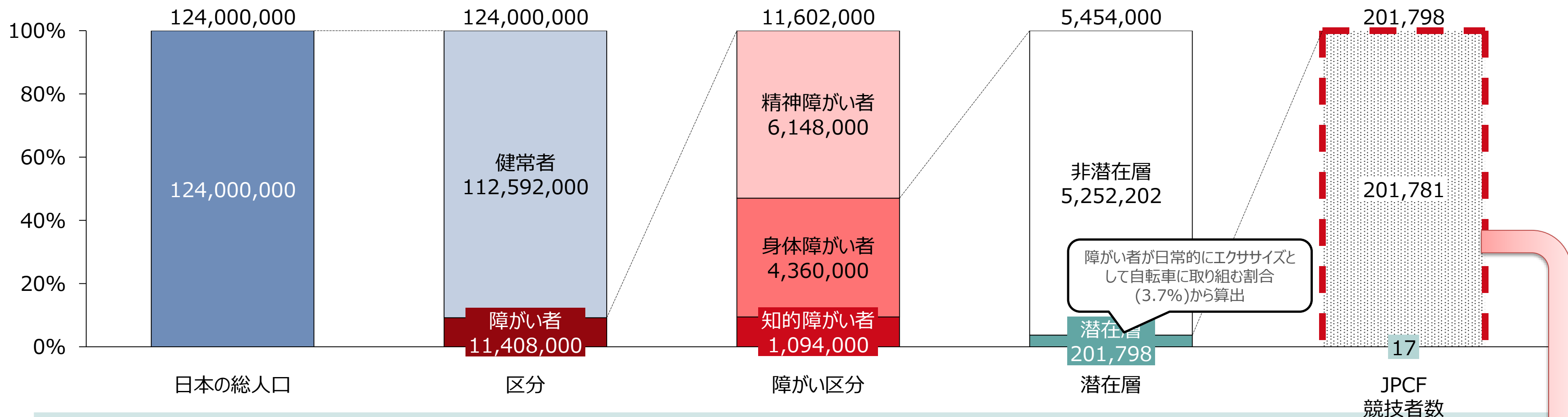
登録者数の下降傾向に加え、登録者に占める強化選手の占める割合が3分の1以上と高く、育成選手や強化選手になることが見込める次世代の育成が進んでいない



しかし根本的な一番の問題は、登録者数が少ないことより、ポテンシャル層の99%強がキャプチャーできていないことであり、課題解決のためのWHYとHOWを明らかにし戦略を構築・実行に移すことが急務

日本の総人口から見たJPCF競技者数の現状*

(2024年4月1日時点、人)



一番大きな課題はJPCFに競技者登録している人数が年々減少していることでも、2023年度時点で17人しかいないことではない

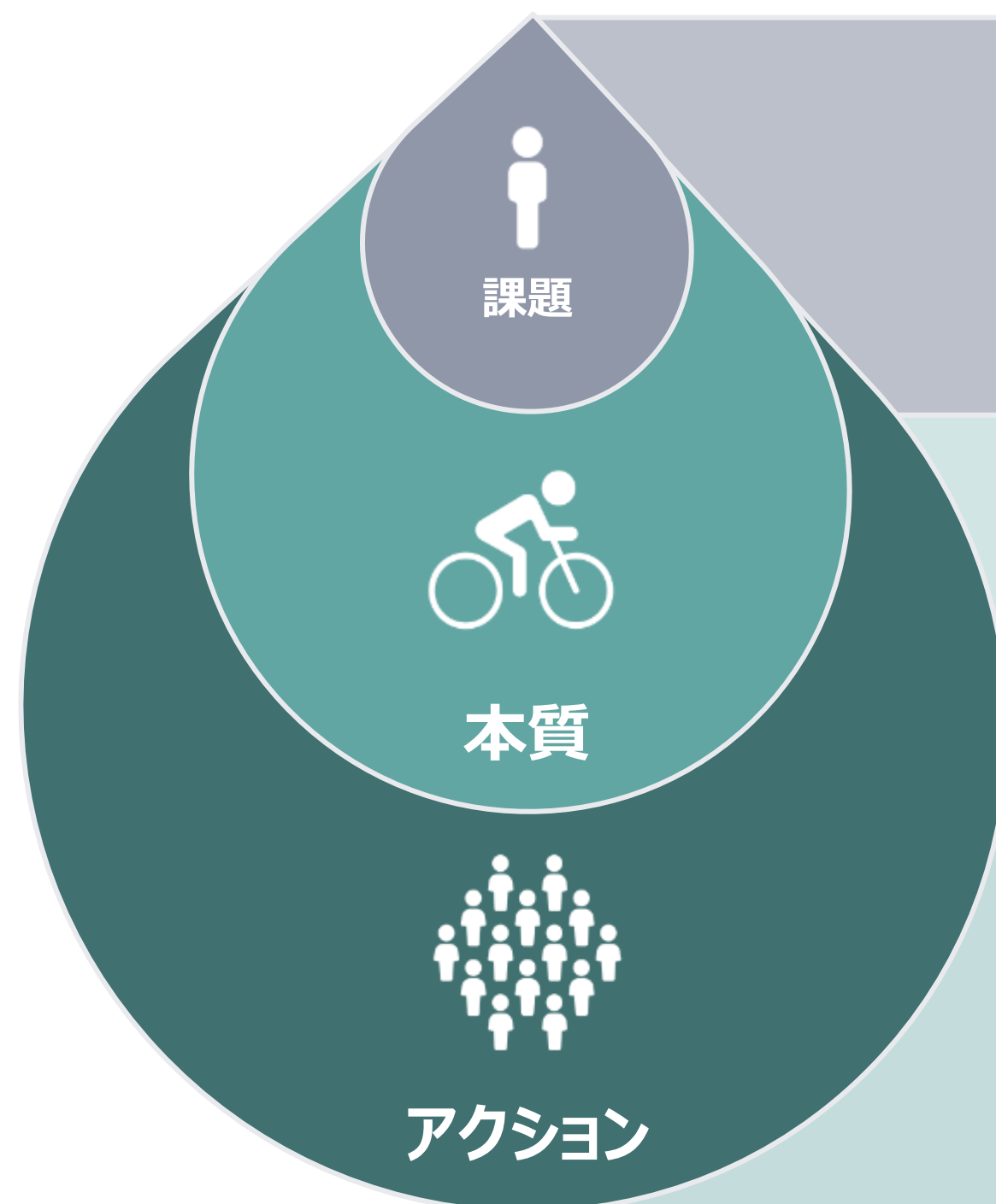
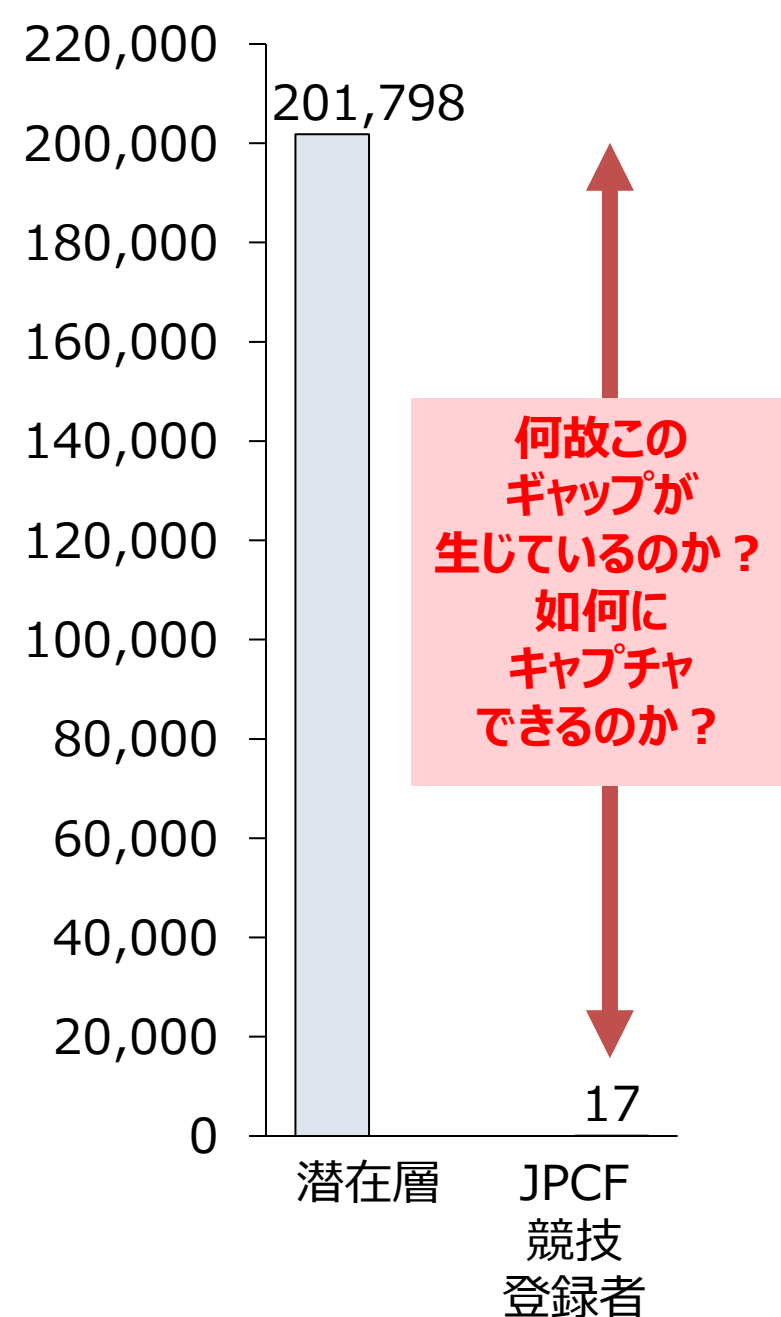
最大の課題
総人口から見たターゲットとなりうる
**ポテンシャルプールの99%以上
(約20万人) にリーチできていない**

**JPCFとして急務なのはこの潜在層に
何故リーチできておらず、どのようにリーチが
できるのかという点を明らかにし、
改善すべく戦略を構築することである**

パラサイクリングの潜在層と競技者登録者数に乖離があるが、その理由等の本質は理解しきれておらず、今後の具体的アクションを立てるためにも将来的にサーベイなどを実施し正確に把握する必要がある

パラサイクリング潜在層*とJPCF競技者数

(2024年4月1日時点、人)



- 日本の総人口とサイクリングに取り組む人口の割合から算出した潜在層は20万人いるが、2023年度は17名しか競技者登録しておらず、2018年をピークに競技者登録者数が減少している
- 日本におけるサイクリング人口という観点では、コロナ禍を経ても減少傾向にあり（2012年から2021年の10年間で人口が36%減*）、パラサイクリングの潜在人口も減少していると考えられる
- 今後競技・団体として継続するためにも競技者登録者数像が必須

- 「競技者登録」をしていないことの本質は？
 - 非競技者：何故パラサイクリングに参加していない、等？
 - 非競技登録者：何故JPCFの競技者として登録していない？

- JPCFの競技者自体を増やしていくためにも、ターゲットをより理解するためにも、将来的にはサーベイなどを実施し、正確な潜在層を把握することで、JPCFがキャプチャできていない競技者について理解を深める
- その上で取るべき具体的なアクションが見えてくる

Note: *総人口及び日常的にサイクリングに取り組む障がい者の割合から暫定的に算出

Source: Portas Analysis

現状では、拠点があるいわきを中心に体験会も含めた自転車普及のための取組は実施するも、全国での取組については機会が限定的となっている



各種イベントの様子

いわき時空散走



■ 交流拠点「ノレル？」の活用

- 福島県いわき市の拠点「ノレル？」を中心に、サイクルスポーツツーリズム事業、共生のまちづくり事業を実施

- サイクルスポーツツーリズム事業：いわき周辺での自転車を楽しむためのイベントの実施

- BIKE & CAMP（2023年度までの総来場者数1,968人）

- いわき時空散走（リサーチも含めた2023年度までの延べ参加者数152人）

- 共生のまちづくり事業：子どもや障がい者も含めた幅広い層が自転車を楽しむためのイベントを実施（体験会等、2023年度は延べ157人参加）

■ いわき以外の地域での普及のための体験会

- 特定の地域・都市（いわき市、山陽小野田市、静岡県、沖縄県、福岡県、北海道など）での普及・体験活動は、学校等の協力を得て一定程度実績はあるが、課題も存在

- 各地での体験会の定期的実施に当たり、機材の保存場所の確保や取り扱いが困難

- 全国を回る「パラサイクリングキャラバン」の実現を目指して各自治体との更なる連携の強化が必要

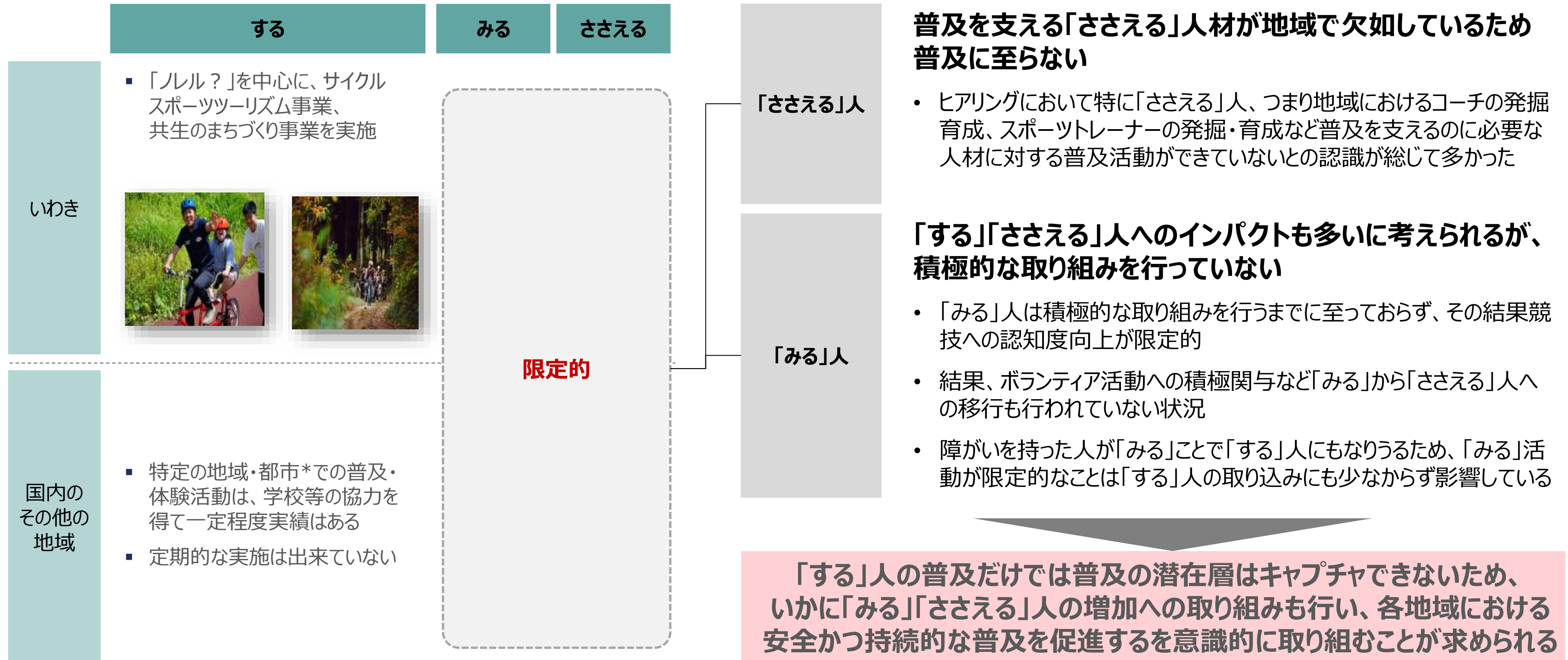
- パラサポを財源とした体験会は、JPCF内で普及選任の担当者もいないことから、継続性が困難

潜在層は全国にいるが、属人的な普及活動を限定された地域で実施しており、まだ全国レベルで普及を促進する体制が構築されていない

各種体験会（いわき）



なお、これらの取組を「する」「みる」「ささえる」の軸にて整理すると、「する」ことへの取組に集中しているが、他の軸にも取り組まないことには「する」の成長は限定的なまま



Note: *山口県山陽小野田市、静岡県、沖縄県、福岡県、北海道など

Source: Portas Analysis、JPCF提供資料、ヒアリング

障がい者は健常者と比較して、自転車に乗ることへの能力・機会・モチベーションの点でのハードルが高く、パラサイクリングに取り組む人が少ないことが要因としても挙げられると考えられる

自転車に取り組む割合が低い要因に関する仮説

能力 (Capability)

- 本人及び親が、そもそも自転車に乗ることができると思っていないため、競技として取り組む選択肢に入っていない

機会 (Opportunity)

- 特殊な機材や専門的な知識・スキルのある指導者がいないと自転車自体に安全に触れることが難しく、体験会等以外場で、競技に触れる場がない
- 体験会で触れた後、継続的に生活圏内で継続的に取り組める機会がない人が多い

モチベーション (Motivation)

- そもそも乗れると思っていない人も多く、結果、競技として取り組みたいという気持ちが弱い
- 知らない人はパラ陸上との違いが分かりづらく、同一視されがちであり、そのため「パラサイクリング」を競技として取り組みたいという感覚が限定的

能力については、競技として取り組む以前に、障がい者自身がそもそも自転車に乗れることを認知していないことが多く、そのハードルを取り除くことが急務である



COM-Bモデルによる整理・分析: 能力 “Capability”

現状の課題

解決の方向性

能力

身体的な能力

各人の体格や筋骨系の機能に関する能力
(例: バランス、器用さ)

心理的・知的な能力

各人の精神面での機能に関する能力
(例: 理解力、記憶力)

- 各拠点における体験会の実施により、初心者向けに、パラサイクルに慣れってもらう取組を実施している一方、**単発の取組が中心**で、日常的に身体的能力の向上を促し、「自転車に乗れる」と思える状態を作れる形とできていない
- 他のパラスポーツに取り組んでいる選手や障がいを負ってしまった元アスリートなども、手や足に障がいを負うと自転車に乗れないと思ってしまうことも多く、**競技への理解の不足が、競技能力がないという思い込みにつながっている**

- 体験会に来る層に対しては、体験を通じてある程度サポート可能だが、心理的・知的能力に特化した普及活動は実施されていないものの、その点での**課題は相対的に少ない**
- しかし体験会以降も競技を継続的に行うことが**心理的・知的な能力の向上にもつながるということを知らない人も多い**ことから、能力を伸ばしていきたいと考える人自体が限定的である

- 現在いわきで行っている体験会や自転車を活用した交流イベント等を他の地域でも実施できるよう、**理事やスポンサーと連携して各地に拠点を設ける**（練習場、宿泊等を含む）
- 競技自体への認知、理解、正しいイメージを醸成するために、**SNSなどを活用し、広く世間に向けて競技の理解を促進し、アスリート候補にも本人及び周囲に情報を届ける状態を作る**

- 競技に参加することが心理的・知的な能力の向上にもつながることを、**体験会などにおけるメッセージの1つとして盛り込む**ことで理解を促進させる

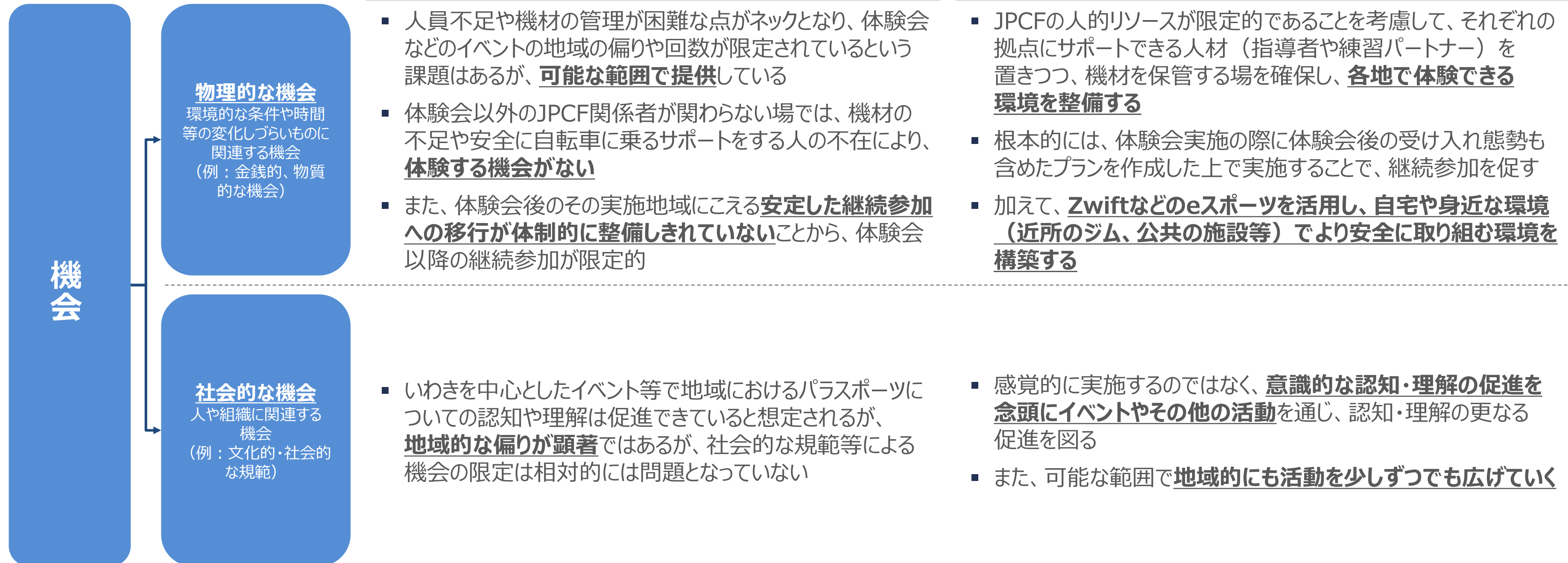
機会については、体験会などの物理的機会は、地域的には偏りはあるが提供されている一方で、持続性・日常への移行が課題となっている



COM-Bモデルによる整理・分析: 機会 “Opportunity”

現状の課題

解決の方向性



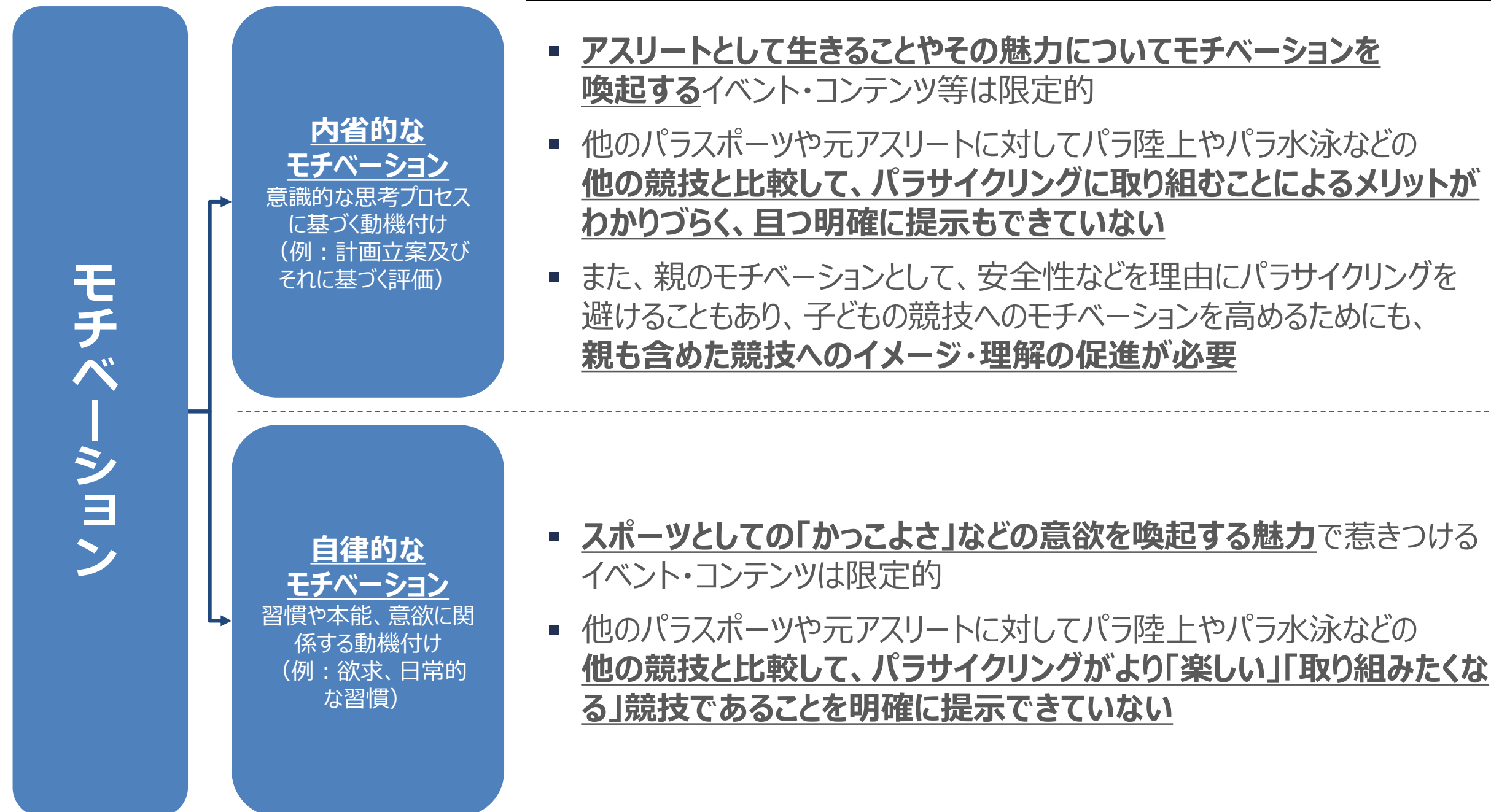
モチベーションについては、体験会などの物理的機会は、地域的には偏りはあるが提供されている一方で、持続的に関与していきたいと思う持続性が課題



COM-Bモデルによる整理・分析: モチベーション “Motivation”

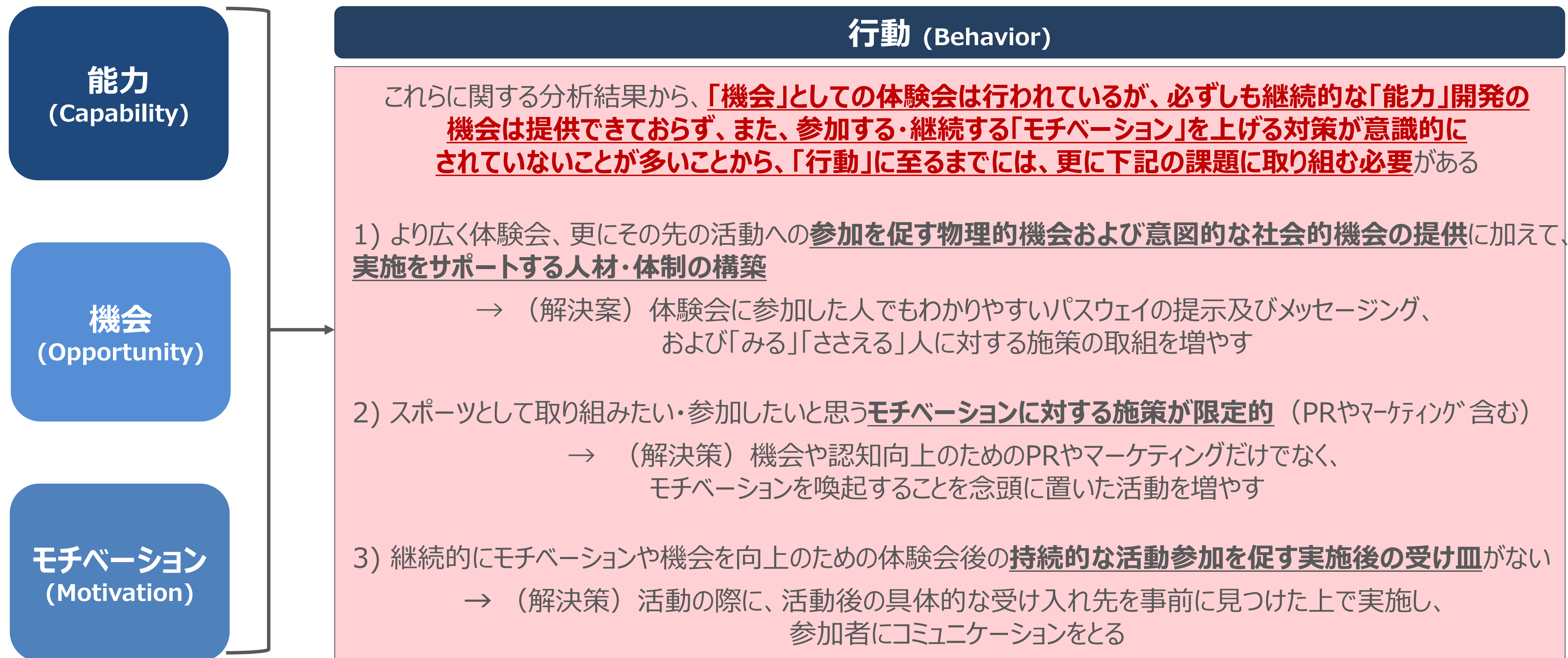
現状の課題

解決の方向性



- 障がいを持つ子どもや親、様々な競技のアスリートなどをターゲットに、広く、内省的・自律的なモチベーションを喚起するための競技としての魅力や競技についての理解を促進するための広報を展開する
- また、パラ陸上等他競技とのパイを奪い合うという状況も否めないことから、他競技と比較してどのような価値があるのかなどより客観的に考えた上でモチベーション喚起するメッセージングを行う

【COM-Bモデルによる分析】「能力」「機会」「モチベーション」に対する解決策をそれぞれ行うだけでなく、行う際に「行動」に繋がる活動を意識することでアクションへと繋がる



まとめ：根本的な一番の問題は、JPCFの競技登録者数が少ないことより、潜在層の99%強がキャプチャーできていないことであり、課題解決のためのWHYとHOWを明らかにし戦略を構築・実行に移すことが急務



WHAT

WHY & HOW

現在の活動から見た課題

- 全国規模ではなく、特定の地域に限定
- 単発なものも多く、継続性がない
- 属人的に実施されている
- 人材だけでなく機材などの移動も考慮すると活動を広げるのが難しい
- 主に「する」人に特化しており「ささえる」「みる」人への活動は限定的

- 「する」人を増やすためにも、「ささえる」「みる」についてもアプローチすることで、各地域で体験会後などに継続的に取り組める場所の提供を行っていく
- そのためにも既に関係性がある団体を中心に、各自治体との更なる連携の強化・連携の方向性の明確化が必要

COM-Bモデルから見た課題

- 能力：障がい者が自転車に乗れることを認知していないことが多い
- 機会：体験会などの物理的機会は地域的に偏りがあるものの提供されているが、持続性と日常への移行が課題
- モチベーション：体験会は提供されている一方で、持続的な関与が課題

- 障がい者に対し、自転車ができることを認知・理解してもらう必要がある（＝社会的アドボケート）
- 持続的な機会の提供を行うために、自治体との連携及び「ささえる」人の増加を急務で行う
- また、体験会を実施していない地域でも体験できるような施策として仮想空間を使った施策なども検討
- モチベーション向上策として価値を含む積極的な発信を行う

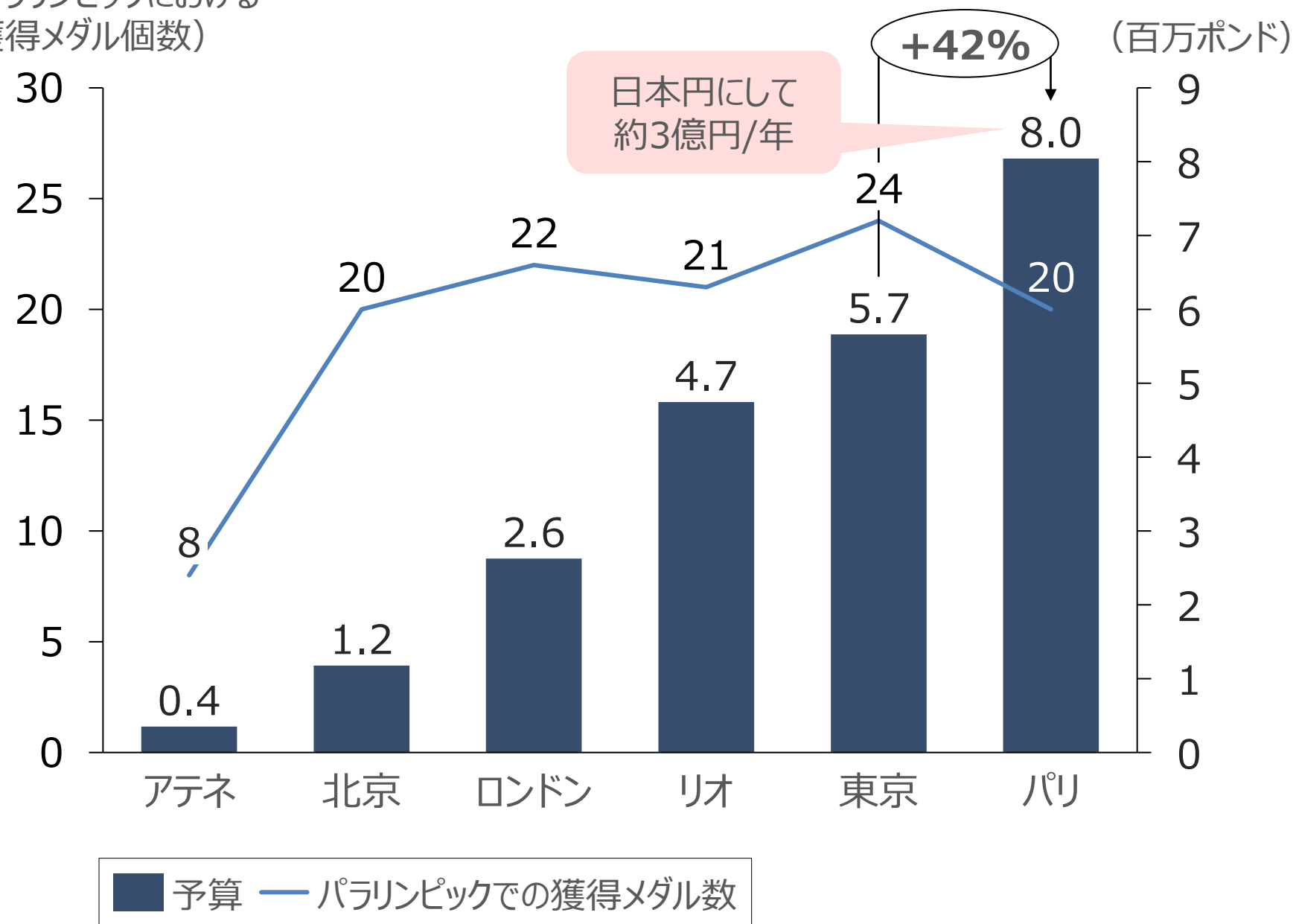
【海外事例】過去のパラホスト国だった英国では競技の強化予算向上による安定的な確保以外にも普及活動も各地のクラブを通じて実施し、安定的な次世代育成にも力を入れている



英国のパラサイクリング強化予算×メダル獲得数

(アテネ2004大会-パリ2024大会、個数・百ポンド)

(パラリンピックにおける
獲得メダル個数)



英国におけるパラサイクリング普及に向けた取組

(“Limitless Disability and Para-Cycling Programme”)

- 2023年より、パラサイクリング向けの認証制度を開始し、1年間で60のクラブを認証し、それらのクラブを通して1,500人以上の障がい者向けにパラサイクリング体験を提供
 - 参加者の95%がパラサイクリングについてより親近感を感じ、参加しやすいと感じるようになった
 - また、体験プログラムが、参加者の約8割が身体的な健康に寄与したと考えており、約7割が精神的な健康に寄与したと考えている
- ゆくゆくは選手のリクルートとして活用したいと考えており、2028年のロサンゼルスパラリンピックに5名の選手を輩出することを目標としている
 - その目的に達成に向けて、初心者向けの大会も14回実施済み

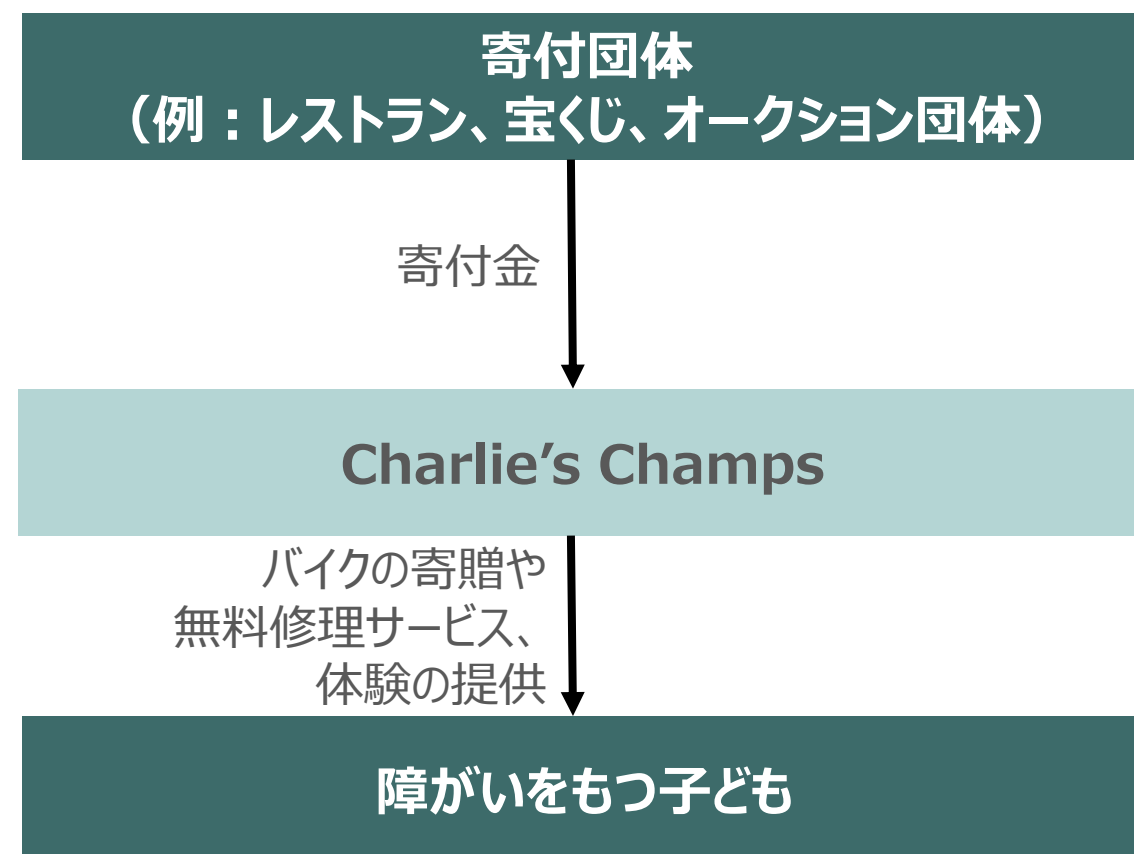


【海外事例】また、米国では、自ら体験会を主導する形以外で、寄贈やシェアサービスを活用した障がい者向けの自転車への接点を創出している



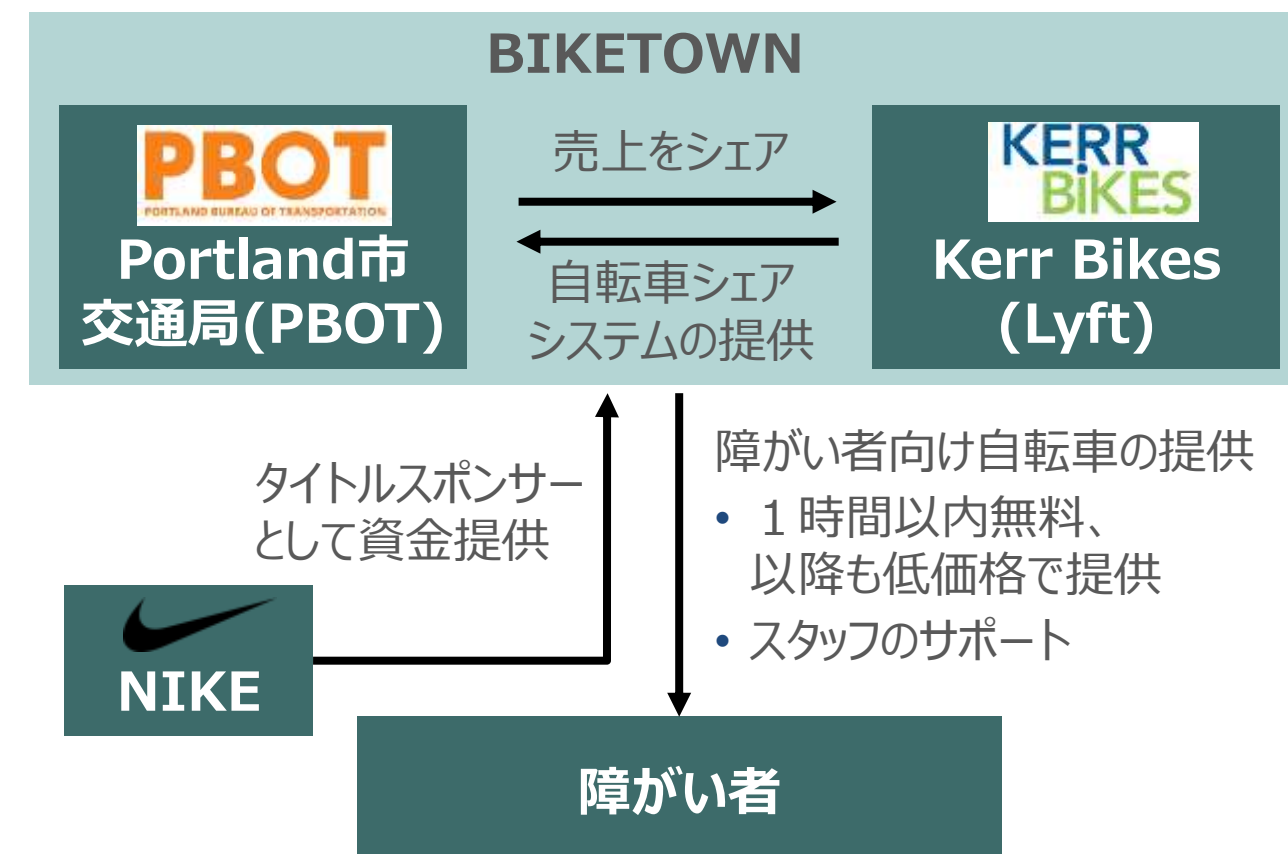
子どもへの寄贈を通じた取組 (NPO団体Charlie's Champs、アメリカ)

- 障がいを持つ子どもたちに体を動かすことの楽しさを広めることを目的としたNPO団体
- 個人や企業から寄付金やボランティアを集め、障がいを持つ子どもたちに障がい者向け自転車の寄贈や体験を提供している
- 2018年に立ち上げられ、これまでにタンデムやトライシクル、ハンドサイクルなどの障がい者向け自転車を**40台以上**寄贈してきた



自転車シェアサービスを活用した取組 (BIKETOWN、アメリカ)

- ポートランド市の「全ての人にサイクリングを」というビジョンの一環として、**障がいを持つ人々に安全で楽しめるサイクリング体験**を提供するという目的で導入された
- ポートランド市の交通局とLyft (自転車レンタルシェア最大手)の共同プロジェクト
- グループでの利用など、**レクリエーションとしての自転車レンタル**を想定している
- 2023年11月の時点で貸し出し可能な障がい者向け自転車が30台を超え、同年1月から10月までの10か月間で**438回利用**された



【海外事例まとめ】障がい者が自転車に取り組むに当たって、競技自体の認知・関心の喚起、競技への参加の促進、継続のためのサポートに対するそれぞれのアプローチが必要であり一つではカバーできない

競技の認知・関心の喚起

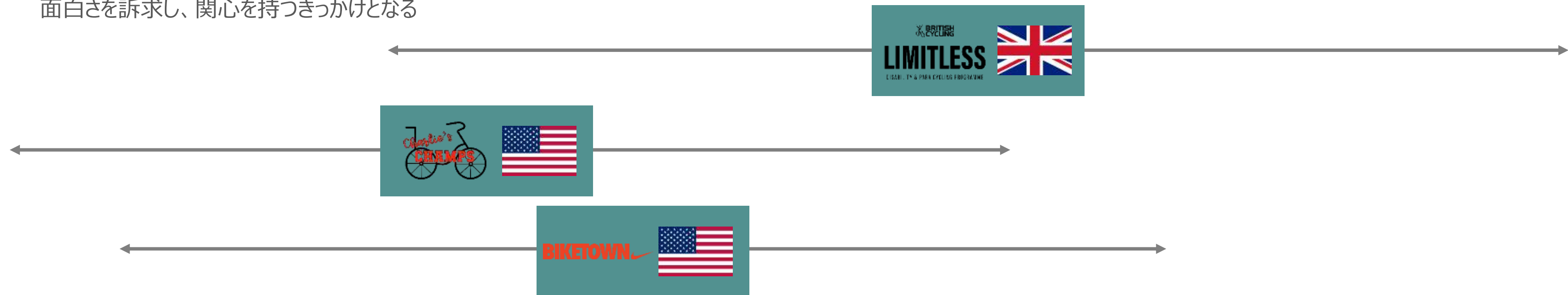
- 多くの障がい者が取り組むことができる競技としてパラサイクリングが存在していることを周知
- 加えて、パラサイクリングの競技としての楽しさ・面白さを訴求し、関心を持つきっかけとなる

参加の促進

- 関心を持った障がい者が競技に取り組むことができる環境を提供し、関心を最大限、競技への参加につなげる

競技継続のためのサポート

- 競技に継続的に取り組み、競技者としての成長を目指す

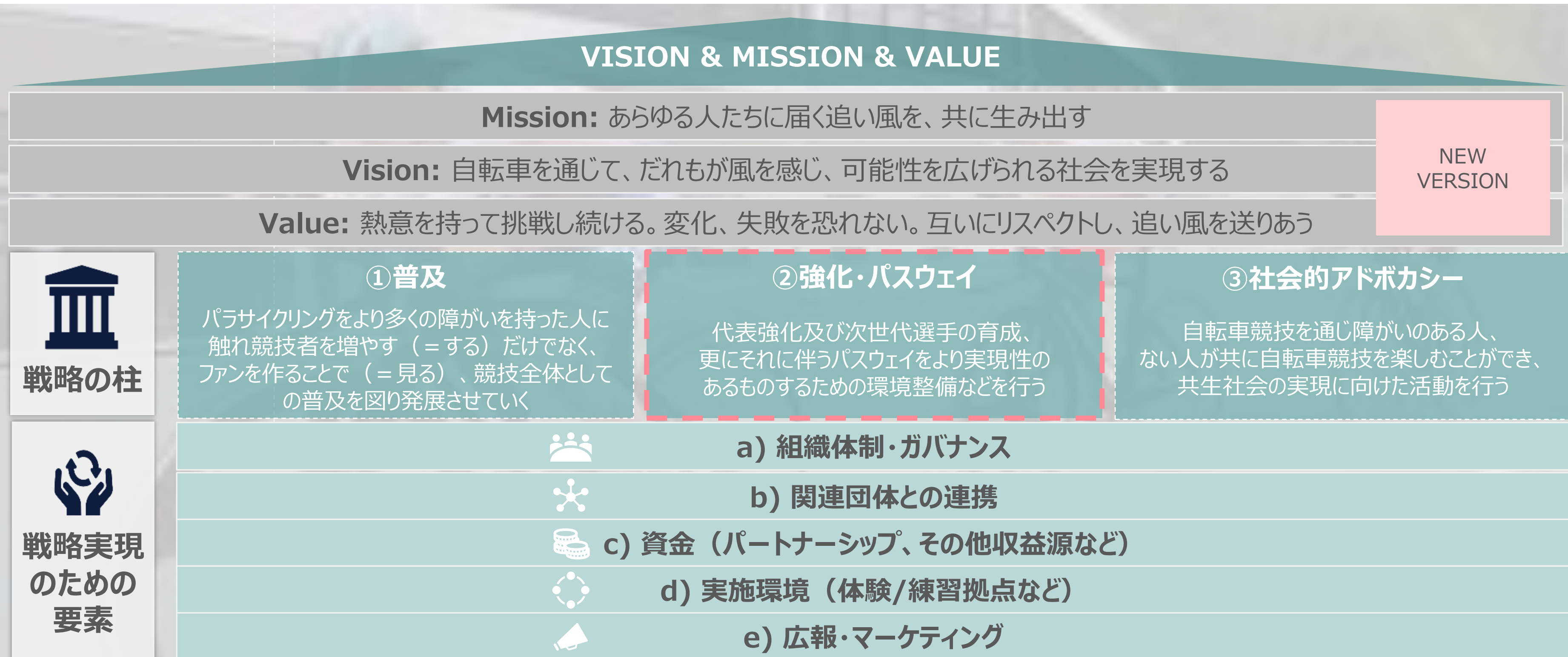


日本においても、活動を行う上で特に、何がどのように寄与するのか明確にしながら、独自の取組だけでなく、自治体など様々な主体とパートナーシップを結びながら促進していくことが望ましい

目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
 - 戦略の柱① 普及
 - **戦略の柱② 強化・パスウェイ**
 - 戦略の柱③ 社会的アドボカシー
 - 戦略実現のための要素
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

現段階の戦略的な方向性を示す中長期戦略のフレームワーク



アスリート育成パスウェイマップは、HPSCとの取組の中で2023年に策定されており、今後、具体的な取り組みに落とし込む予定とされている



Athlete Development Pathway アスリート育成パスウェイ 種目名：パラサイクリング										
FTSM 段階	F Foundation			T Training				E Elite		
	F1	F2	F3	T1	T2	T3	T4	E1	E2	E3
FTSM 段階のイメージ										
アスリートがどんな経験を積むか	自転車を含む様々なスポーツに親しむ	競技用自転車に乗る機会を探し、積極的に経験を積む	自転車競技に特化したトレーニングを始める	国内クラス分けを受け、全日本選手権に出場する	競技適性を把握するために、競技団体の実施する合宿に参加する	国際大会出場を目指し、専門的なトレーニングが継続できる環境を作る	ナショナルチーム強化指定選手に選出され、国際クラス分けを受ける	ワールドカップ、世界選手権に出場する	ワールドカップ、世界選手権で入賞する	パラリンピック競技大会や世界選手権でメダルを獲得する
どんなアスリートを目指するか	スポーツに日常的に親しんでいる	競技用自転車に乗り、楽しむことができる	自主的にトレーニングに訪れ、競技を楽しむことができる	競技を楽しみながら、競うことへの好奇心がある	目標をもって競技に取り組むことができる	自分で現状や課題を把握し、競技力向上に真摯に取り組む	ナショナルチームの一員としての自覚を持ち、チームメイトと切磋琢磨して高めあうことができる	日本代表としての自覚を持つ	日本代表としてより高い目標を持ち、競技レベルの向上に努める	日本代表としての自覚を持ち、チームを引っ張ることができる
どんな人から支えられているか	保護者・友人・学校教員	保護者・友人・地域クラブ・学校教員	保護者・友人・地域クラブ	地域クラブのコーチ・保護者	JPCFスタッフ・JCF・地域クラブコーチ・所属クラブのコーチ・所属企業	JPCF強化スタッフ・JCF・JPC所属企業・NTCスタッフ	JPCF強化スタッフ・JCF・JPC所属企業・NTCスタッフ	JPCF強化スタッフ・JCF・JPC所属企業・スポンサー・NTCスタッフ・ファン	JPCF強化スタッフ・JCF・JPC所属企業・スポンサー・NTCスタッフ・ファン	JPCF・JCF・JPC所属企業・スポンサー・個人スポンサー・ファン

現状及び今後の予定

- 強化スタッフによるアスリートパスウェイマップの作成とデザイン化（2023年度・2024年度）
- 強化選手のこれまでの競技生活をそれぞれ言語化・可視化して分析する（2024年度）

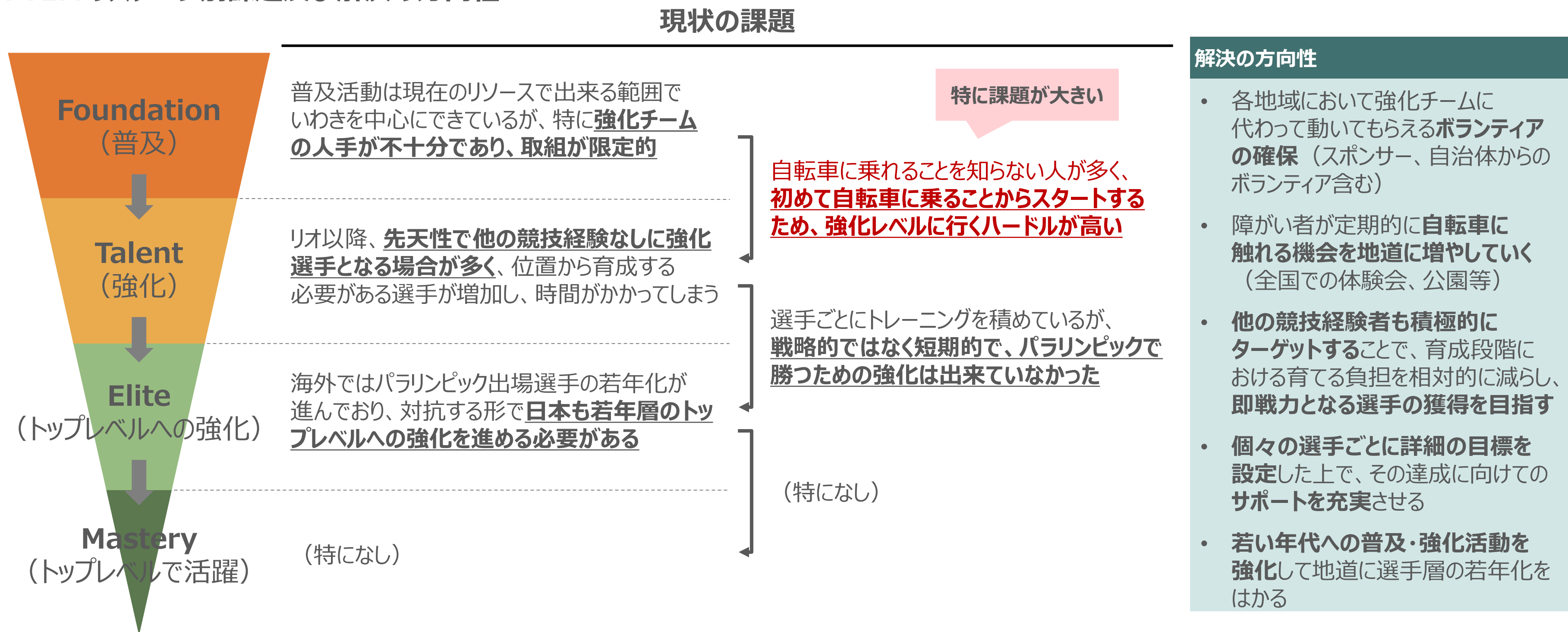
現状に関する見解

- 実際の選手の生活やパスウェイを反映し、それぞれのステップに必要なサポートを含めた言語化が重要

しかしヒアリングの結果、パスウェイの中でも、普及と強化に移行する間に大きく隔たりがあるなど、FTEMをベースにしたパスウェイは課題も多い



FTEMのステージ別課題及び解決の方向性



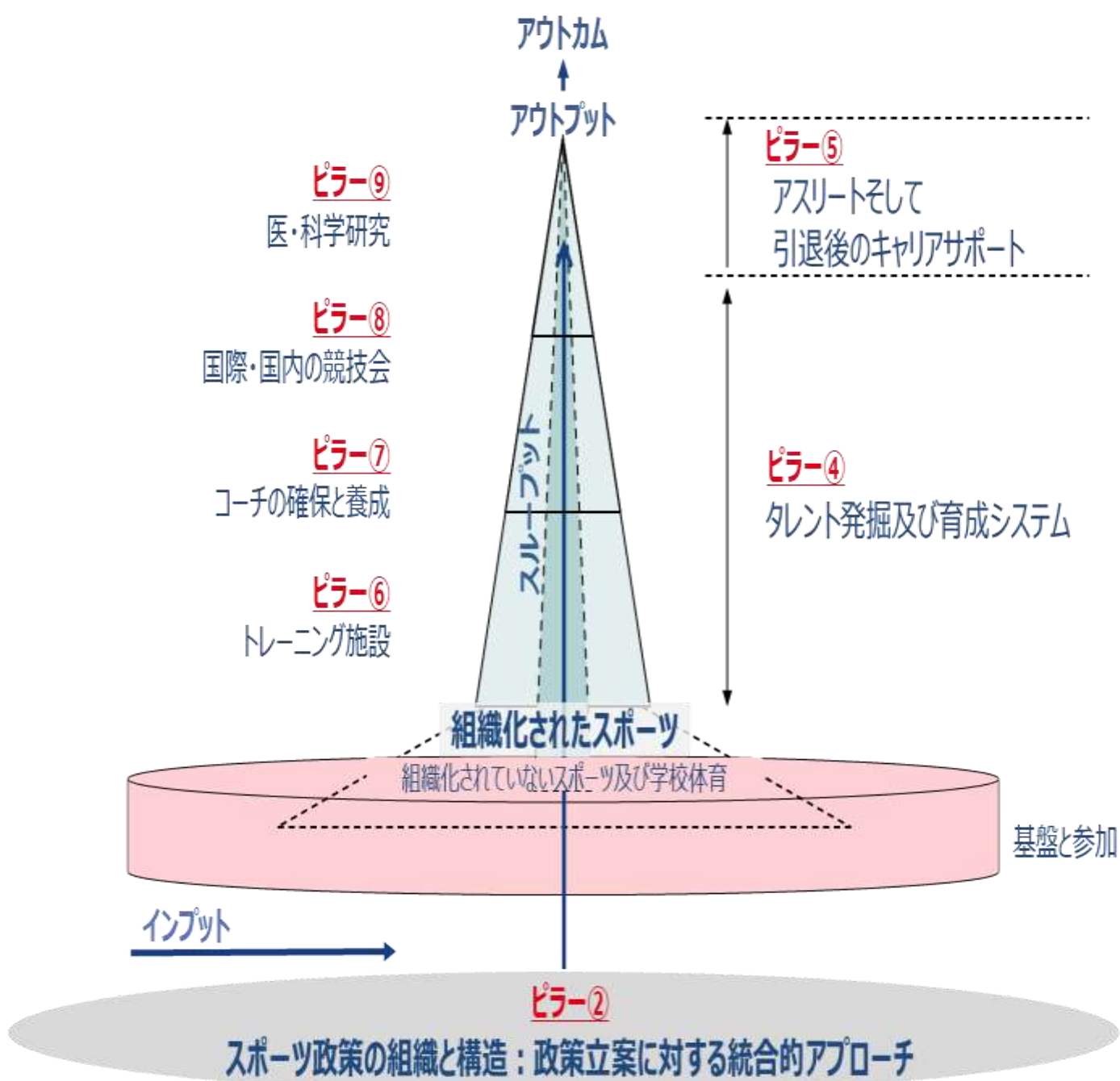
また、現在のJPCFの強化パスウェイでは、強化・競技力向上におい多くの課題があり、特に基盤と参加や発掘育成システム、医・科学研究の点で課題が多く、対策が急務である



SPLISSモデルによる整理・分析（※Phase 2のヒアリングにて更なる深堀をする）

課題少

多



9つの柱 (ピラー)	分析・課題	暫定評価
①財政支援	十分な人的リソースの確保のためには更なる財政支援が必要な状況かつ、財源の多様化、財源確保のための業務効率アイデア・効率化が必要	
②スポーツ政策の組織体制と構成	事務局・理事会におけるガバナンス面での課題は現状見られないが、今後の組織拡大に伴って会議体含めて体制を変更していく必要がある	
③基盤と参加	いわき市やその他の自治体で体験会等は実施しているが、競技者人口及び継続的な参加が促せておらず、裾野を拡大していく必要がある	
④タレント発掘・育成システム	タレント発掘は属人的（義肢装具士やコーチ）に行われており、また、育成システムについても強化選手になるまでの道筋が描けていない状況	
⑤競技およびポストキャリアサポート	就職先の紹介や、練習環境の紹介等、キャリアサポートはこれまで手厚く実施しているが、人数の拡大を見据えて手法を検討する必要がある	
⑥トレーニング施設	合宿用の施設は全国に点在しており、日常的なトレーニング環境は各々の拠点で連携先と協力する必要がある、競技を広めていく観点で拡大が必要	
⑦コーチの確保・養成	強化チームのスタッフについては紹介で確保しており、広くアプローチできておらず、養成の面では技術・知識・手法の点での底上げが必要だが取り組めていない	
⑧国際・国内競技大会	国際的な競技大会に派遣できる人数にも限りがあり、国内で実戦経験が積める大会は全日本選手権のみと限定的で、国内での実戦機会の拡大が重要	
⑨医・科学研究	現時点では、専門的な知識のある人材と連携できておらず、実施できていない	



タレントの発掘・強化のそれぞれについて掘り下げてみると、特に人的リソース についての量・質における課題が多い



ハンドサイクル以外	<div> <div>タレント発掘</div> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 強化選手候補の発掘については、義肢装具士経由など属人的であり、安定して行えていない Jスターは体験までのスピード感がなく、タレントの発掘に生かせる見込みがない <ul style="list-style-type: none"> Jスターで来る人は知的障がい者が多く、現時点でのJPCFの主たるターゲット層ではない プログラムの建付け上、来てもらった人にその場で自転車に乗ってもらうことができない また、個別の連絡先の交換も禁止されているため、次のステップに繋がらず、インパクトはかなり限定的
	<div> <div>タレント強化 (環境・体制・手法)</div> </div>	<div>する</div> <ul style="list-style-type: none"> 強化環境についてこれまでは選手個別の状況に対応していたが、強化体制の変更に伴い、以前実施していたが現在実施できていない点も多々存在する <ul style="list-style-type: none"> 選手・スタッフともに所属や仕事の関係から拠点に留まって実施する集中的な強化活動ではなく、定期的な合宿にて実施 選手の強化においては、就職先を紹介したり、練習場所である大学との連携をしたりという形での選手個々に対する地道な対応が必要だが、強化体制の変更に伴い、以前のように実施できていない <ul style="list-style-type: none"> 強化選手手前の選手については、自身の拠点近くでともに練習してくれるパートナーが必要で、各拠点ごとに地元の大学や実業団との連携が必須だが、なかなか着手するだけのマンパワーがない 強化選手レベルでも、クラス別に競技レベルの差が大きく、個別対応が必須 国際的な競技大会に派遣できる人数にも限りがあり、国内で実戦経験が積める大会は全日本選手権のみと限定的で、国内での実戦機会の拡大が重要
		<div>やらない</div> <ul style="list-style-type: none"> 強化スタッフのリクルーティング・育成が満足にできておらず、十分機能している状況ではない <ul style="list-style-type: none"> スタッフのリクルーティングは現状では100%紹介ベース コーチ・メカニック・トレーナーそれぞれについて、技術・経験・知識不足等の課題がある JCFの海外コーチの下につけて経験を積む形も取れたらよいが、つけられておらず、知識の移転が進んでいない 競技の分析など医科学技術の活用が必要だが、専門的な人的リソース不足により活用できていない



更に、ハンドサイクルにおいては、国内の競技レベルが高くないことも挙げられるが、
なによりタレント発掘における課題が多く、発掘のための環境づくりが先決である

ハンドサイクル

タレント発掘



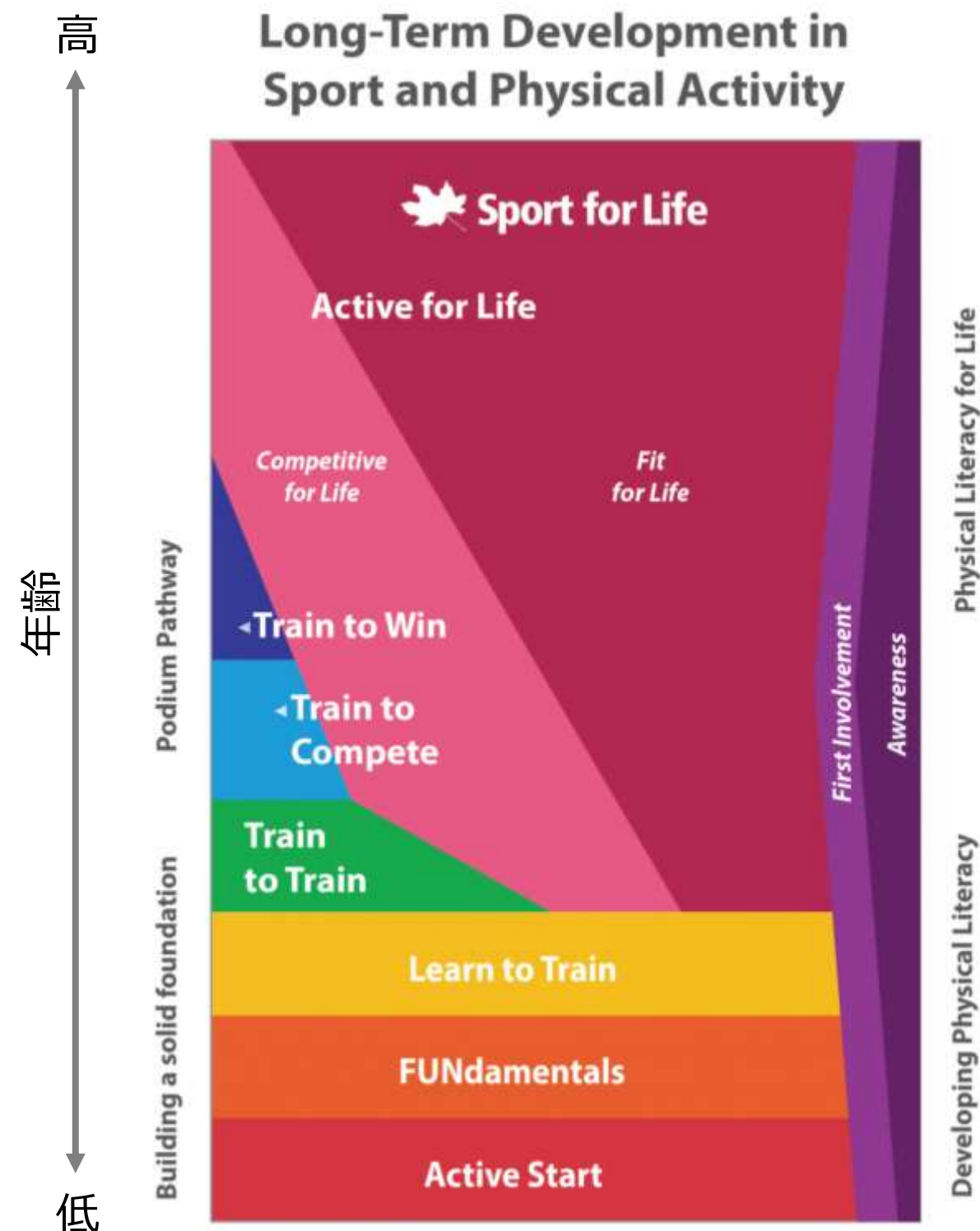
- 現時点でハンドバイク競技をスタートする人は、陸上からの競技転向が多い
- 競技の参加を妨げる障壁としては、競技の知名度が低いことや、機材が非常に高価なこと、拠点や練習場所が限定的などが挙げられる
 - まず、競技がマイナーで認知度が低いため、選択肢に上がってこない
 - 機材が約200万円ととても高いため、個人でスポンサーが取れない選手にはハードルが高い
 - 少なくとも競技を始めて1年くらいまでは、車通りが少なく上りが少ない初心者向けの場所を探す必要があり、乗る場所が限られる
- 障壁の一つである拠点の問題を解決するために、各地に普及のための拠点を設けるべく動いているもしくは、検討をしている段階
- 先天性向けには、現在全国で車椅子屋がパラサイクリングの体験会やクラブ活動を行っており、それらと連携する形での普及や、各種学校などでの地道な競技認知拡大活動を行い、若い選手候補に来てもらうもしくは他のパラ競技を経験した後にパラサイクリングに転向する流れを作りたい
- 後天性向けには、病院向けのアプローチも有効だと思うが、リハビリ病院自体の数も減っている状況なので、看護師やPT/OT向けに競技認知拡大・普及を行うことで間接的に認知を拡大できる可能性がある

タレント強化



- 様々な人が様々な種目で活躍する姿を見せるべきという観点では、ハンドバイクもパラリンピックで活躍する選手がいることが望ましいが、現時点では世界のトップ層との競技レベルの乖離が大きく、パラリンピックでメダルを狙うのは難しい（各クラスの人数が少ないので入賞は可能）
- 一方で、直近ではタイの選手が台頭してきており、同様にアジア人である日本人も同程度までパフォーマンスを上げることは可能に見えるが、そのためには、ヨーロッパで数年転戦する経験を積ませるなどの大幅な強化が必要

【海外事例】カナダではスポーツ参加を生涯スポーツと捉えたパスウェイのフレームワークを策定し、各NFにおいて競技・アスリート特性に応じた個別のパスウェイの策定を進めた



LTAD (Long Term Athlete Development) の概要

- 子どもから大人にかけての個人のスポーツ及び身体活動に関する体験を、能力を基準とした複数の段階に分けてパスウェイとして整理し、個人の人生を通じた身体活動への参加を可能とする身体・精神的な能力の形成を目指す
- 特徴として、生涯にわたるスポーツへの参加を目指したものであり、エリートのみではなく、それ以外の一般的なスポーツへの参加について網羅している点、それぞれの段階は相互に行き来可能な点がある
- 年齢が低い段階で、スポーツ・身体活動へのモチベーションや自身、身体面での能力や知識や理解を含むフィジカル・リテラシーを身に着けることが、生涯にわたってスポーツを継続するベースとなるため重要であるとされる
- 2005年にSport for Lifeによってフレームワークが提示され、各競技団体がこのフレームワークをベースに個々の競技やアスリート/障がい特性などを考慮したNF別のパスウェイの策定を行った

【海外事例】Cycling Canadaでは、全体のLTADを策定しただけでなく、障がい特性も考慮したパラサイクリングに特化したLTADも制定し、これに沿ったプログラム運用を行っている



競技人口の基礎となるため、現時点では特に重要

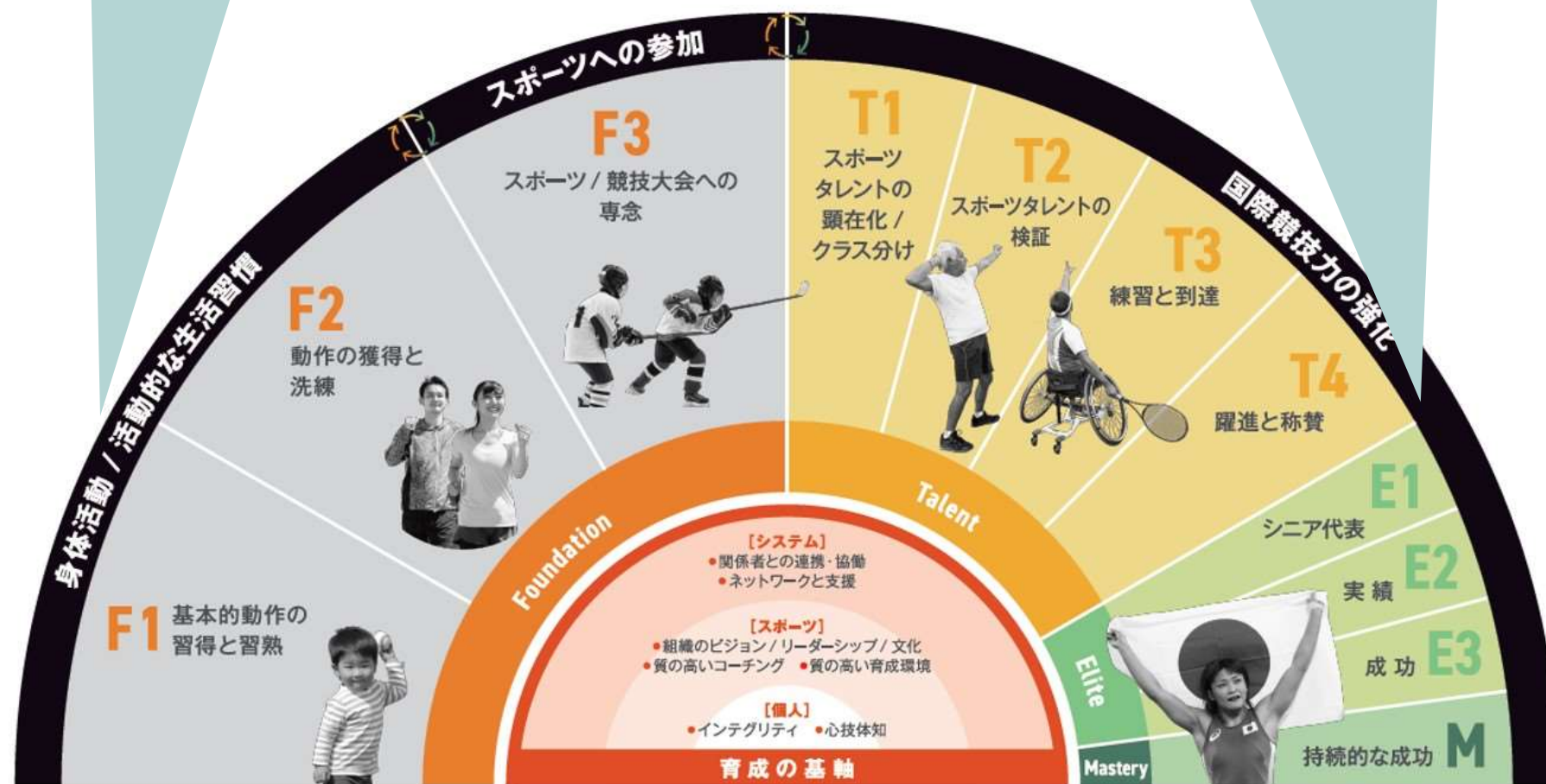
		競技の認知及び出会い			エリートレベルでのトレーニングの実施			生涯スポーツの実施
		Active Start	FUNdamentals	Learn to Train	Train to Train	Train to Compete	Train to Win	Active for life
障がい者自転車競技における適用	概要	<ul style="list-style-type: none"> 運動機能の発達段階にあるすべての子どもを対象 多様かつフリーにスポーツが楽しめる環境で運動能力を育てる 	<ul style="list-style-type: none"> 運動の能力を発達させ、基礎的な動きを自律的にできることを目指す 複数のスポーツを、楽しさを重視して実施できる環境 	<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な動きを習得した子どもに対して、競技に必要なスキルを身に着ける 複数のスポーツを、スキルを重視した競争を中心に実施できる環境 	<ul style="list-style-type: none"> アスリートを目指し、身体能力やメンタルも含めたスピーディーな成長を促す 単一のスポーツにフォーカスし、練習・競争環境をレベルに合わせて整える 	<ul style="list-style-type: none"> 国を代表するアスリートを目指し、国際大会で活躍する 単一のスポーツにフォーカスし、フルタイムもしくはそれに近い形で練習できる環境を整える 	<ul style="list-style-type: none"> メダルの獲得やトップリーグでの活躍を目指す 世界におけるトップを目指し、各個人に合わせた練習環境を準備する 	<ul style="list-style-type: none"> アクティブな生活を維持するために、競技として、もしくは趣味としてスポーツを楽しむ 各個人ごとの目標を設定し、目標に向けた練習を実施する
	主な目標	<ul style="list-style-type: none"> スポーツとしての認知 複数のスポーツを紹介する 	<ul style="list-style-type: none"> 競争ではなく、どのような成長段階が存在するか示しつつ、他のスポーツも経験 	<ul style="list-style-type: none"> 大会に参加し、目標となる他の選手のパフォーマンスを観察 地域のクリニックへの参加 	<ul style="list-style-type: none"> 地域レベルの大会や選手権に参加し、近隣国の国際大会にも参加 	<ul style="list-style-type: none"> 地域もしくは全国レベルの大会や選手権に参加 	<ul style="list-style-type: none"> パラリンピックを含む国際大会を中心に参加 	<ul style="list-style-type: none"> (未定義)
	接触の程度	<ul style="list-style-type: none"> スポーツについての知識を身に着ける程度 	<ul style="list-style-type: none"> 1年あたり100時間程度 0～1年間の経験 	<ul style="list-style-type: none"> 1年あたり200時間程度 0～2年間の経験 	<ul style="list-style-type: none"> 1年あたり100～400時間程度 1～3年間の経験 	<ul style="list-style-type: none"> 1年あたり350～700時間程度 3～5年間の経験 	<ul style="list-style-type: none"> 1年あたり650～900時間程度 5年間以上の経験 	<ul style="list-style-type: none"> (未定義)
	支える人・組織	<ul style="list-style-type: none"> 家族、友達、リハビリセンター 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の障がい者スポーツ団体、リハビリセンター 	<ul style="list-style-type: none"> 障がい者スポーツ団体内の自転車クラブ、障がい者スポーツクラブ 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の自転車クラブ、障がい者スポーツクラブ、障がい者スポーツ団体 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の自転車クラブ、障がい者スポーツクラブ、障がい者スポーツ団体、パラリンピック委員会 	<ul style="list-style-type: none"> IPC、UCI、国際障がい者スポーツ機構、国際視覚障がい者スポーツ連盟、国内パラリンピック委員会 	<ul style="list-style-type: none"> (未定義)

パラサイクリングは、成人になってから自転車に乗り始める人も多く、身体リテラシーの獲得及び生涯スポーツとしての役割を果たす意味でも、LTADモデルがより適合している可能性がある

日本版FTEM

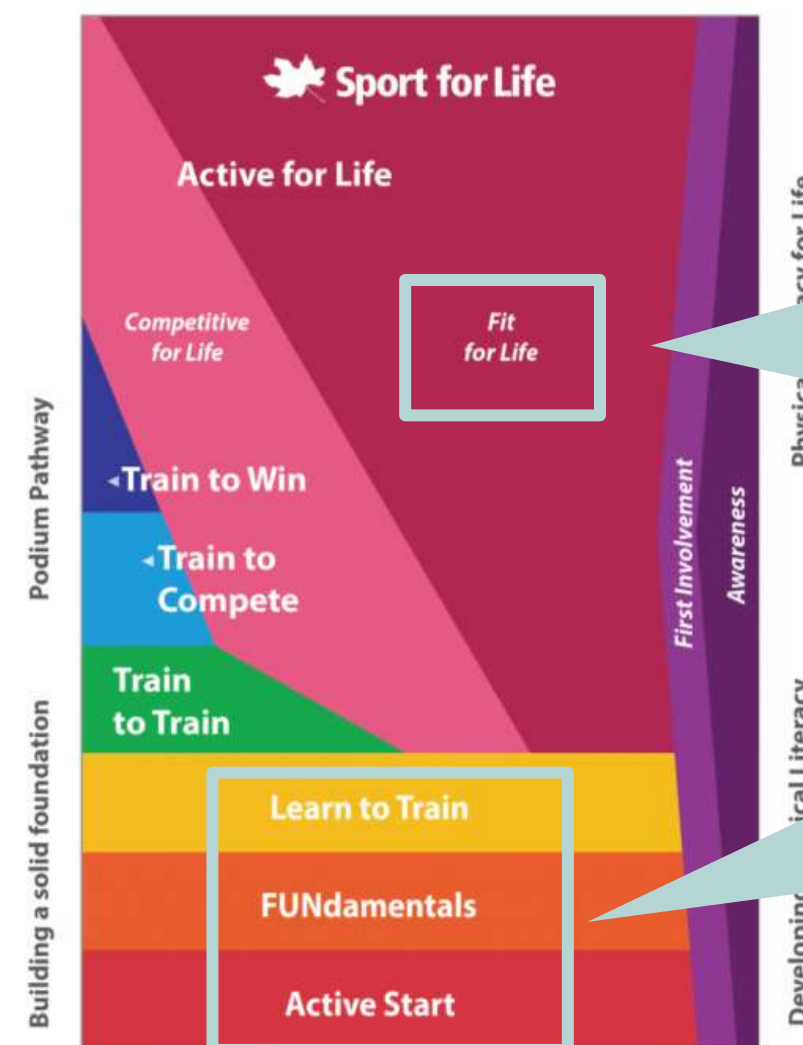
特定の競技における技術の習得にフォーカス

競技としての成功が主眼となっており、生涯スポーツも含めたパスウェイとはなっていない



LTAD

Long-Term Development in Sport and Physical Activity



あらゆる段階から、生涯スポーツとしての競技への意向が想定されており、特にQOLの向上などの日常生活に活かせる身体能力及びスキルが身に着く競技であるパラサイクリングにおいては重要な観点となる

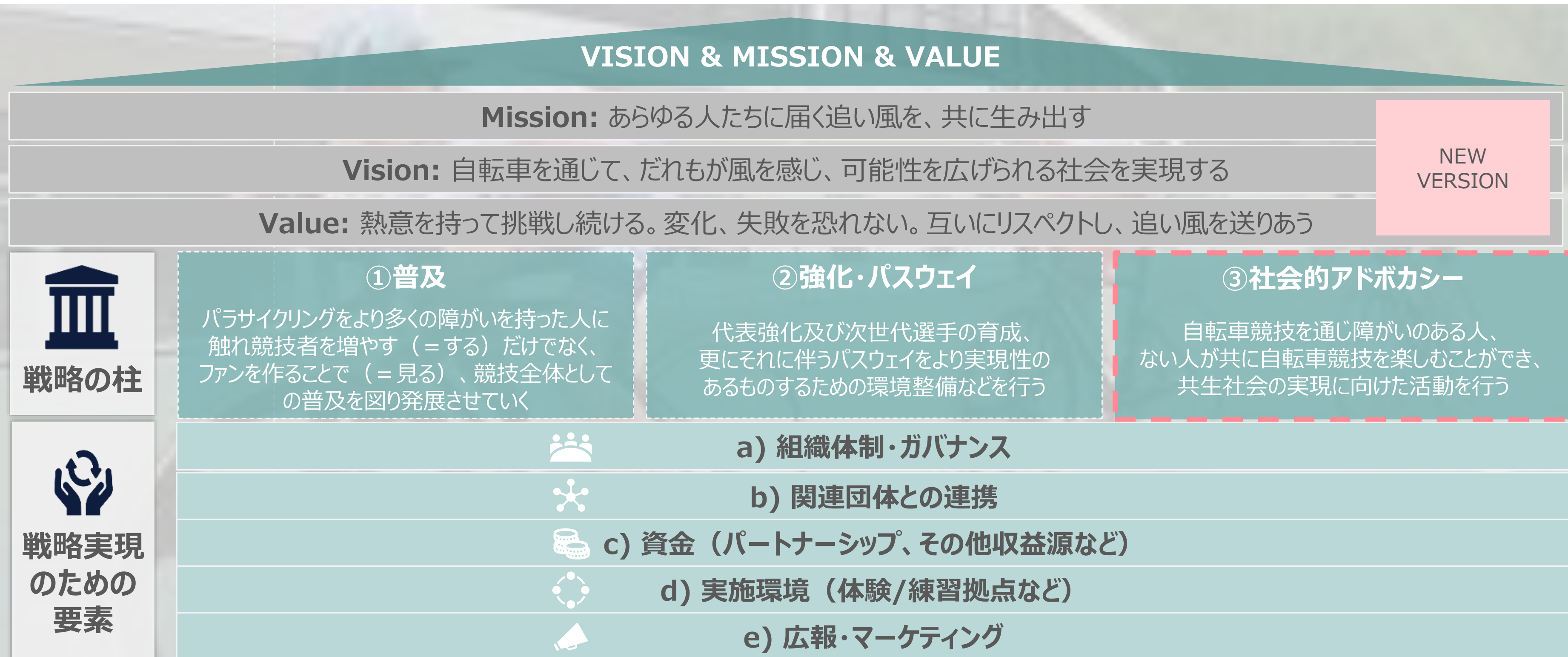
複数の競技経験を通じた普遍的な身体リテラシーの向上を主眼として、特定の競技への専門化のタイミングを遅らせることを想定しており、障がい者としての身体リテラシーの獲得の観点で重要

HPSCはFTEM導入前このLTADモデルを活用していたが、競技特性や普及の点から諸々を鑑みると、FTEMよりも世界的にもまだ活用されているLTADモデルなどの導入を再度検討してもいいと考える

目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
 - 戦略の柱① 普及
 - 戦略の柱② 強化・パスウェイ
 - **戦略の柱③ 社会的アドボカシー**
 - 戦略実現のための要素
 - SWOT分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

現段階の戦略的な方向性を示す中長期戦略のフレームワーク

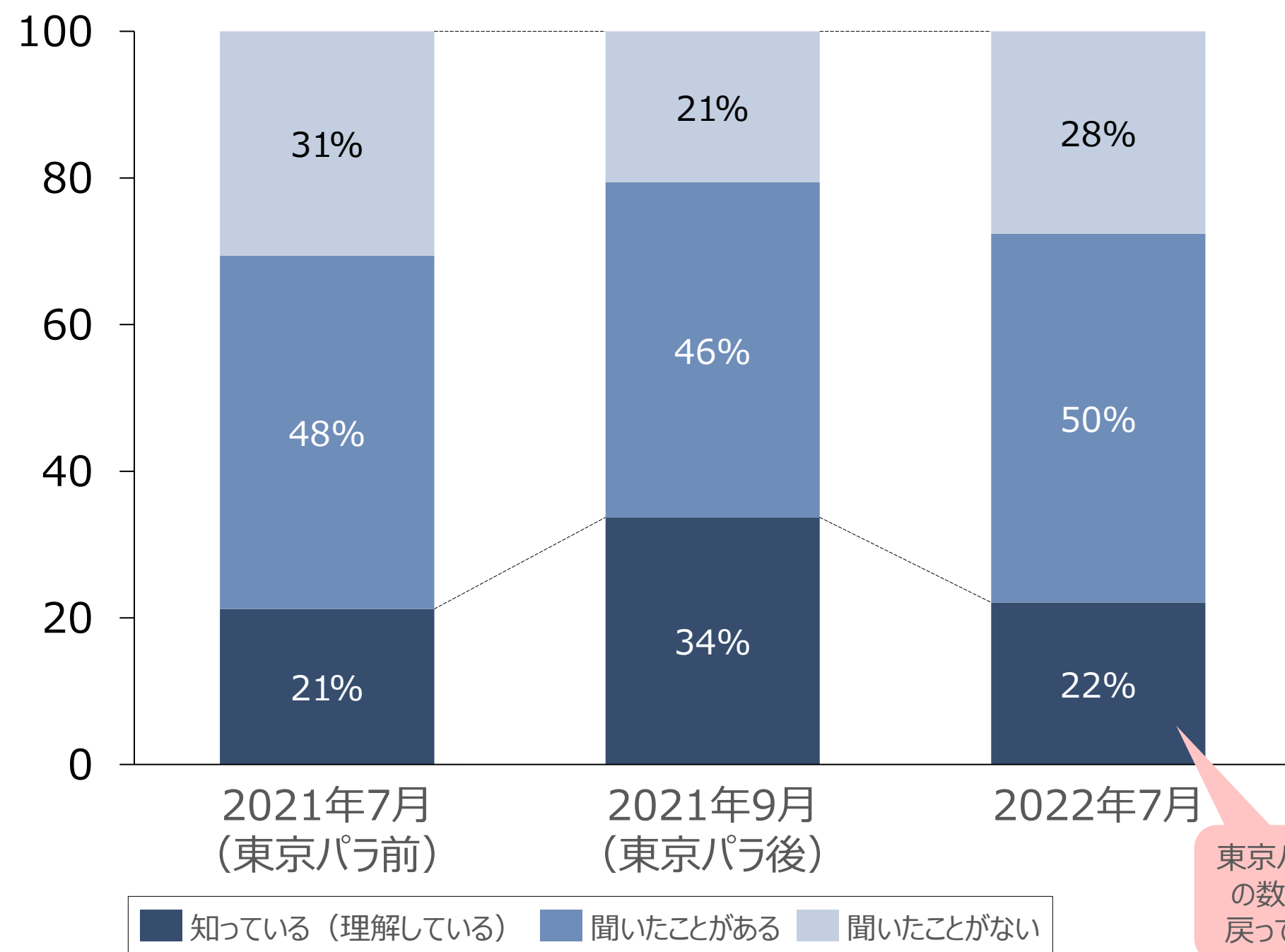


パラスポーツの認知度や障がい者のイメージは、東京パラ開催時に改善したように見えたが、現時点では大会前の水準に戻っており、真の意味での変化には継続的な接点が必要不可欠である



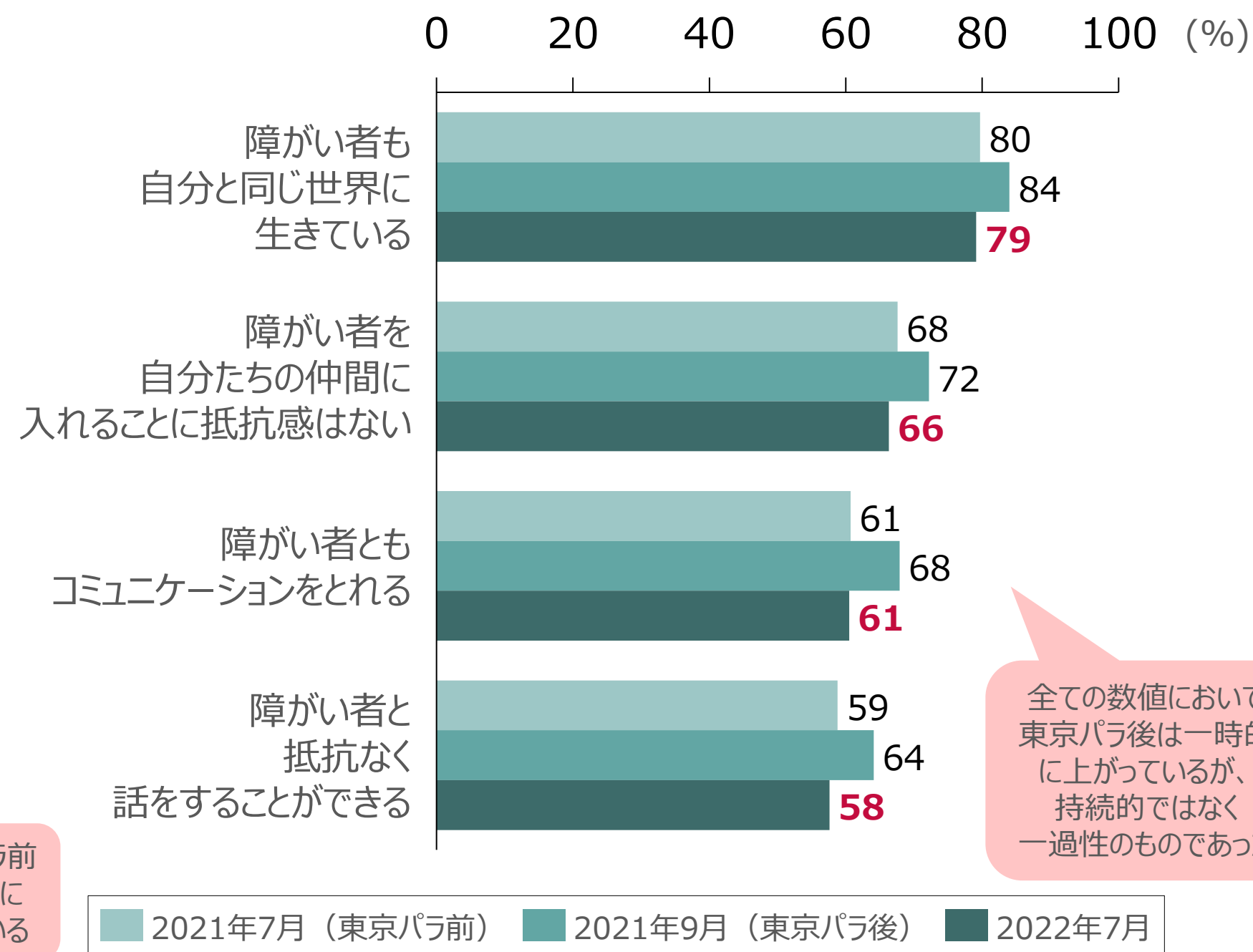
パラスポーツ認知度の推移

(2021-2022年、%)



障がい者についての考え方の推移

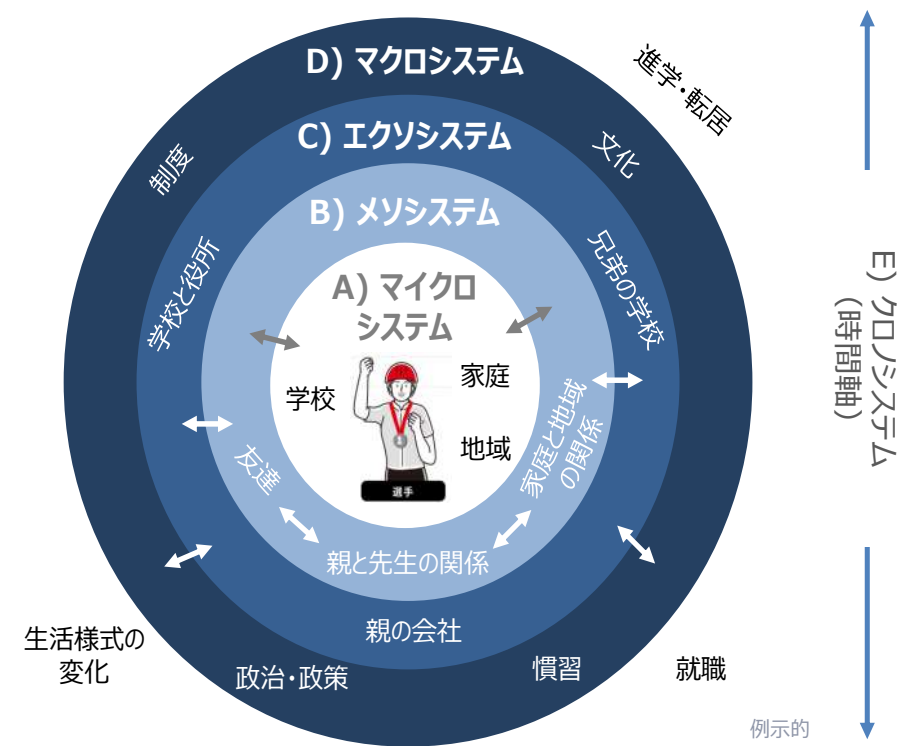
(2021-2022年、「そう思う」+「どちらかと言えばそう思う」を抜粋)



パラサイクリングの社会的アドボカシー活動は、現時点では、個人が直接かかわる範囲での活動にのみ集中しており、幅広いリーチに対する活動をの改善の余地がある



障がい者を中心とした生態学的システム理論による社会的アドボカシーの取組分析



取組多



少

システム	レイヤーの説明	レイヤー内の主体例	現時点でのJPCFの取組および可能性	取組状況
A) マイクロシステム	個人が直接関わる対象や場所との相互関係	家族、学校、担任の先生、地域など	<ul style="list-style-type: none"> 大会後の職場等での報告会、講演会の実施 大会時の写真展実施 学校での体験会・交流会の実施（合宿時） 	
B) メソシステム	個人が直接関わる複数のシステム同士の相互関係を指す	親と担任の先生の関係、学校と地域の関係、友達同士の関係、家庭と地域の関係など	<ul style="list-style-type: none"> 会社・学校・地域単位での応援ツアー BIKE & CAMPなどの家族や友人同士で地域との関わりを持てるイベント 	
C) エクソシステム	個人とは直接関連していないが、他の人を介して自分や周囲に影響を与える相互関係	兄妹の学校、親の会社、学校と役所など	<ul style="list-style-type: none"> 各種動画の制作・配信による広く社会全般に向けたアプローチ SNSでの発信 	
D) マクロシステム	上記3つのシステムの背後にある決まりごと（慣習）や文化、制度など	文化、制度など（児童福祉法など）	<ul style="list-style-type: none"> バリアフリー・ユニバーサルデザインの推進を促進するためのアクション 	
E) クロノシステム	時間経過の中で個人に影響を及ぼす出来事や環境変化	兄妹の誕生、引っ越し、卒業・就職など	（該当なし）	-

現在、いわき市を中心に、パラサイクリングの普及に加えて、自転車を活用したレジャーや運動機会の創出などの形で社会との接点を定期的に創り出している



いわき市を中心としたイベント



- 拠点であるいわき市及び交流拠点「ノレル？」を中心に、普及啓発事業に加えて、共生のまちづくり支援事業、サイクルスポーツ・ツーリズム推進事業を実施し、パラサイクリング及びサイクリングの認知・理解や共生社会への理解を拡大を通じたアドボカシー活動を実施しているが、どこまで行動変容に繋がっているかは明確ではない
 - **普及啓発事業を通じた競技認知の拡大**：いわき平競輪場での体験会以外にも、各所と連携し、東京や静岡等での体験会を実施。加えて、自転車系YouTuberと連携した動画コンテンツの配信等を実施
 - **共生のまちづくり支援事業通じた競技認知・理解の拡大**：自転車を通じた運動機会を分け隔てなく創出するために、いわき市内の特別支援学校を訪問しパラサイクリング体験会を実施したり、視覚障がい者支援団体や、ダウン症協会の皆様と協同し、タンDEM自転車を活用したイベントを実施する等の活動を実施
 - **サイクルスポーツ・ツーリズム推進事業を通じた共生社会への理解の拡大**：自転車を通じて街や自然を楽しむイベントとして、自転車とキャンプを掛け合わせて楽しむ「BIKE & CAMP」や、「時空を超えた地域の物語を紡ぎながら自転車で走っていきたい」をコンセプトにいわき市内のサイクリングコースを紹介・案内する「いわき時空散走」などのイベントを大々的に実施

広報活動



- 現在、広報活動の見直しを進めており、その一環としての2024年6月よりメールマガジンやYouTubeの公式アカウントによるパラサイクリングの競技の魅力についての発信をスタートし、アドボカシー活動を強化
 - これまであまり発信されてこなかった、選手のインタビューやトレーニング風景を自ら発信

広報・イベント以外のアドボカシー

- （現時点では上記以外のアドボカシー活動として大きな取り組みができていない）

【海外事例】海外に目を向けると、パラサイクリングという文脈を活かして、マイクロシステム・メソシステムを対象に、普及とともにアドボカシー活動を実施している事例も多く、参考にできる



マイクロシステム

パラアスリートの雇用の促進 (Building Employer Confidence、オーストラリア)



- パラリンピック・オーストラリアはオーストラリア社会サービス省の財政的なサポートを受け、パラアスリートが日常的に働いている環境でより理解や尊重が得られるようにプログラムを開始した
- プログラムを通じて、雇用主はよりインクルーシブな職場を作り、パラアスリートへの意義のある雇用を生み出すために重要となるツールや情報を得ることができる
 - 雇用キャリア調査票：アスリートのこれまでのバックグラウンドを整理し、どのようなスキル・性質が業務に生かせるかを提示
 - 準備度チェックツール：現時点でどの程度受け入れの準備ができていて、追加で何を準備する必要があるかを提示
 - スキルマッチング：どのようなスキルが業務に生かせるかをアスリート自身が検討するためのガイド
 - 入社前ガイド：入社して仕事を始める前に必要となる事柄のチェックリスト
 - マネージャー向けトレーニング：マネージャーがインクルーシブな職場環境を作るための、包括的な研修用パッケージ

メソシステム

学校での体験会を通じた周知 (Ride Your Trike NZ、ニュージーランド)



- 17歳の少年Liamが脳性麻痺である自身の経験を基に、似た境遇の人たちに自由に動ける「足」を提供するためのサービスとして、三輪車のレンタルをスタート
- 加えて、学校での三輪車体験を通じて、障がい者・健常者問わず、三輪車の良さを体験するための学校での体験会を実施
- さらに、三輪車での歩道の走行で問題となりやすい、自動車等の歩道にかかる駐車禁止を求めるキャンペーンを実施する等、運転環境の向上に向けた社会的な運動にも取り組む



【海外事例】ヨーロッパのパラ選手権などでは、TikTokを活用して、より広いターゲットに訴求するために「障がい」ではなく、あくまでもアスリートと競技性にフォーカスした動画を展開した



エクソシステム

TikTokを活用したPR (European Para Championships、ヨーロッパ)



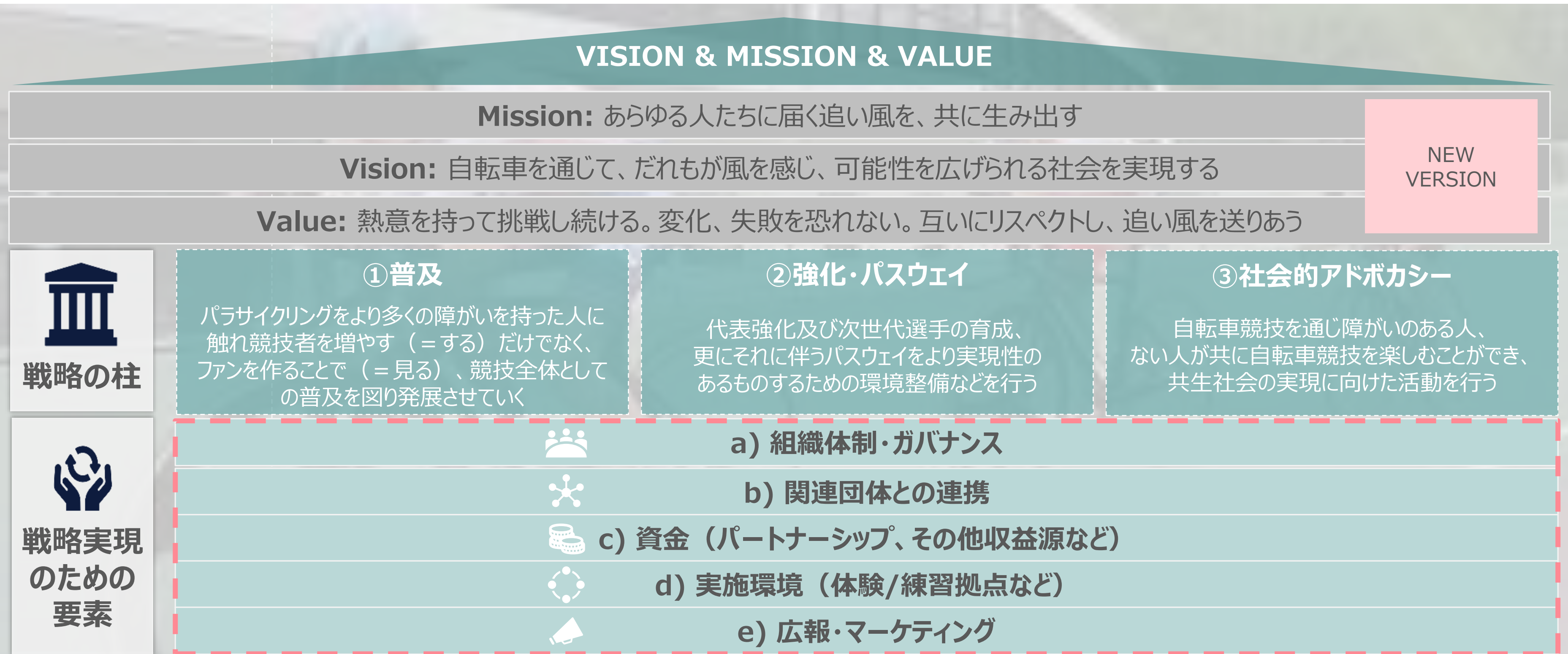
- European Para Championshipsが大会の告知として、パラサイクリングを含めた複数の競技のPR動画を大会のオフィシャルパートナーであるTikTokを活用して展開
- なお、TikTokなどの縦型ショート動画のプラットフォームは通常のYouTube動画よりもアクセス数、エンゲージメント率が期待できる
 - パリンピック公式チャンネルの登録者はYouTubeでは88万人なのに対し、TikTokは440万人と、同じ組織でもYouTubeとTikTokでフォロワー数に大きな差がある
 - TikTokの調査によると、エンゲージメント率が横型動画が13%なのに対し縦型動画は34%と、縦型の方が大幅にエンゲージメントが高い¹
- ここでは文字が大きく表示され、目立つという縦動画の特性を生かした大会の情報を文字でわかりやすく伝えることを意図した動画を配信
- 素早いカメラワークとドローンなどを活用したユニークなアングル、アップテンポな音楽を駆使し、大会及び競技のエキサイティングな雰囲気を表現
 - また、パラサイクリングの躍動感や卓越したアスリートとして選手をフィーチャーするなど、「障がい」ではなく、競技性とアスリートにフォーカスしたコンテンツでエキサイティングな雰囲気を表現した



目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
 - 戦略の柱① 普及
 - 戦略の柱② 強化・パスウェイ
 - 戦略の柱③ 社会的アドボカシー
- **戦略実現のための要素**
 - SWOT分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix

現段階の戦略的な方向性を示す中長期戦略のフレームワーク



【実現のための要素】人材不足による課題もある一方で、関連団体の連携など人材不足に紐づかない課題も存在

JPCF

戦略実現
のための
要素



実現のための要素	課題概要
a) 組織体制・ガバナンス 	<ul style="list-style-type: none">事務局を限定的な人数で回していることから、特に普及や追加の助成金関連業務など手がかかる事に更に割く工数がなく、結果的に更なる取り組みの展開を妨げている強化において、活動の質を維持・改善するためのサポート人材の採用・育成方法の改善が必要また、ガバナンスにおいては、人材、財務の健全性確保計画やコンプライアンス関連の対応が必要
b) 関連団体との連携 	<ul style="list-style-type: none">特に、競技関連組織と連携した効率的な普及・強化の取組、運営の効率化及び普及施策・アドボカシーのリーチの拡大が望める
c) 資金（パートナーシップ、 その他収益源など） 	<ul style="list-style-type: none">収益減に占める助成金の割合が高く、用途の柔軟性や安定的・持続的な金銭確保の面で課題がある助成金については、申請及び報告の業務が煩雑で、これ以上工数を割くことが現状難しい現在、パートナーシップのメリットを適切に伝えられておらず、改善による企業との関係性構築強化の余地がある
d) 実施環境 （体験/練習拠点など） 	<ul style="list-style-type: none">強化選手向けの拠点はある一方、強化選手以外の選手向け、特にトラック競技において競技環境を整備する必要がある普及については、既存の拠点を活用した合宿時の活動は行えている一方で、継続した活動はできておらず、日常的な活動促進につながる環境の整備が急務
e) 広報・マーケティング 	<ul style="list-style-type: none">（Phase2のヒアリングにて詳細について特定）

【a）組織体制】事務局は人材不足により、追加での助成金関連業務に取り組めていない状況で、外部も含めた人材の増強及び経営体制の確立が急務となっている



業務におけるカバー範囲

現時点版

現時点での組織体制

		経営判断	普及	強化	広報	各種事務	
理事会	理事長（岡）	✓	△	—	—	—	• 現在、経営判断の迅速さが組織としての強みとなっており、今後の組織拡大を見据えて、現在の形を維持できるかも含め検討したい
	専務理事（松本）	✓	△	—	—	—	
	理事（下岡）	✓	△	—	—	—	
	監事（石飛・増田）	✓	△	—	—	✓	
事務局	事務局長（寺澤）	✓	✓	△	✓	✓✓	• 特に、普及活動及び助成金関連の事務（申請・報告）に割く人的リソースが不足しており、外部リソースの活用も含めた調達が課題 <ul style="list-style-type: none">人的リソースの不足により、実施したい助成金関連の事務や普及活動ができていない状況 • また、マーケティングなどに関する取り組みを行う上で、JPCやパラサポなど連携を念頭におくと、一部機能を東京に置くことも今後検討してもよい
	強化事務（柴）	—	—	✓	—	✓	
	広報・渉外（大西）	—	—	—	✓	✓	
強化チーム	ハイパフォーマンスディレクター（権丈）	✓	—	✓	—	✓✓	• 強化人材においては、活動の質を維持・改善していくに当たっての採用・育成による人材の質の担保が課題
	ヘッドコーチ（沼部）	—	—	✓	—	—	
	強化育成マネジメント（荒賀）	—	—	✓	—	—	
	その他スタッフ（メカニック、コーチ等）	—	—	✓	—	—	

【a) ガバナンス】網羅的に遵守しているが、人材、財務の健全性確保計画やコンプライアンス委員会の開催・研修の実施等の対応の強化の必要性ある

JPCF



ガバナンスコードの原則	現状・課題	暫定評価
1. 組織運営等に関する基本計画の策定・公表	基本計画は策定・公表済み。人材、財務の健全性確保計画については策定・公表予定	
2. 適切な組織運営のための役員等の体制の整備	概ね適正な組織運営体制が整っている。役員候補委員会の設置については2024年3月を予定	拡大時の体制要検討
3. 組織運営等に必要な規程の整備	適切に規定が整備されており、専門家に問い合わせできる体制も確保できている	
4. コンプライアンス委員会の設置	現在定期開催できていないが今後は開催予定。弁護士を中心にJCFとも連携して有識者を配置	
5. コンプライアンス強化のための教育の実施	教育はJPC/JCF主催の研修にて実施（独自のものも2024年3月に開催予定）	
6. 法務、会計等の体制の構築	弁護士、税理事と顧問契約し、適切な監事のもと専門的なサポート体制を敷いている	
7. 適切な情報開示	財務情報、選手選考基準、ガバナンスコードの遵守状況について適切に情報開示している	
8. 利益相反の適切な管理	利益相反ポリシー及び規定を策定し、それらを基に理事会にて議論を行い契約を締結	
9. 通報制度の構築	通報窓口については設置・周知済み。運用体制はJCFとも連携	
10. 懲罰制度の構築	懲罰規定で詳細を定め、周知済み。中立性・専門性を担保するためのコンプライアンス委員会も規程	
11. 選手、指導者等との間の紛争の迅速・適正な解決	自動応諾条項を設定し、スポーツ仲裁の利用が可能なことを選手に通知済み	
12. 危機管理・不祥事対応体制の構築	詳細の危機管理マニュアル、調査体制についてはそれぞれ設置予定	
13. 地方組織のガバナンス確保・コンプライアンス強化等	地方組織は設置しておらず、対象外	

また、海外のパイプ役も担っているJPCFは日本のガバナンス基準の遵守に加えて、
少なくとも意識及び努力として海外（UCIなど）が定めるガバナンスに関する条項に関しても意識し、取り組む姿勢が求められる

【b)関連団体との連携】特に、競技関連組織と連携した効率的な普及・強化の取組、運営の効率化及び普及施策・アドボカシーのリーチの拡大が望める

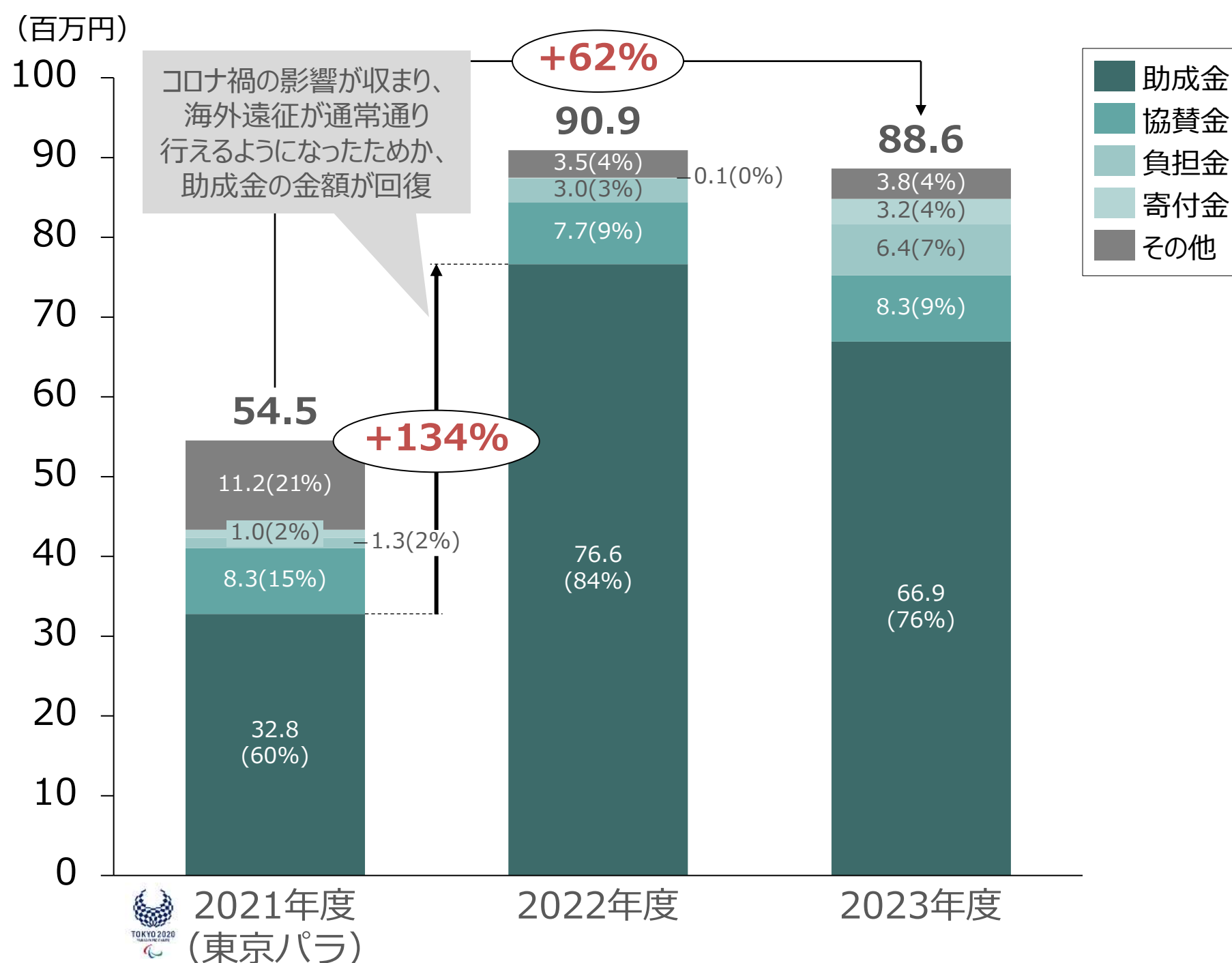


		戦略の柱ごとの課題		
関連団体		①普及	②強化・パスウェイ	③社会的アドボカシー
助成金・事業	スポーツ庁	特にJPSAと普及の観点での事業展開が出来ていない	各団体と、選手強化・パスウェイの充実の観点での連携が不十分	各団体を通じた、他のパラ競技連盟と統合的に活動が実施できていない
	JSC			
	JPSA			
	パラサポ			
	JKA			
競技・運営	JCF	普及の拠点となり得る自転車関連施設との連携、JCFやJPCとの連携による普及活動の強化の余地あり	国内で開催される大会へのパラサイクリング選手の参加ができておらず、実戦機会が不十分。JCFとの連動についても連携強化が必要	自転車競技全般、もしくは国際的なアドボカシー活動と連動ができていない
	UCI-Para			
	JPC			
地域	各自治体	連携先の自治体・団体を増加・関係性の深化による更なる普及拠点拡大の余地あり	連携先の自治体の増加による現地での練習拠点がの拡大の余地あり	連携団体のリーチを活用することでのアドボカシー活動の拡大が望める
	いわきFC			
	その他団体			

【c)資金】全体として助成金への依存度の高さ、業務量がネックとなり助成金の申請が不十分な点、安定的且つ持続的なパートナー収入増加のための関係性構築が急務



収益源の推移（除収益事業、経常収益、百万円）



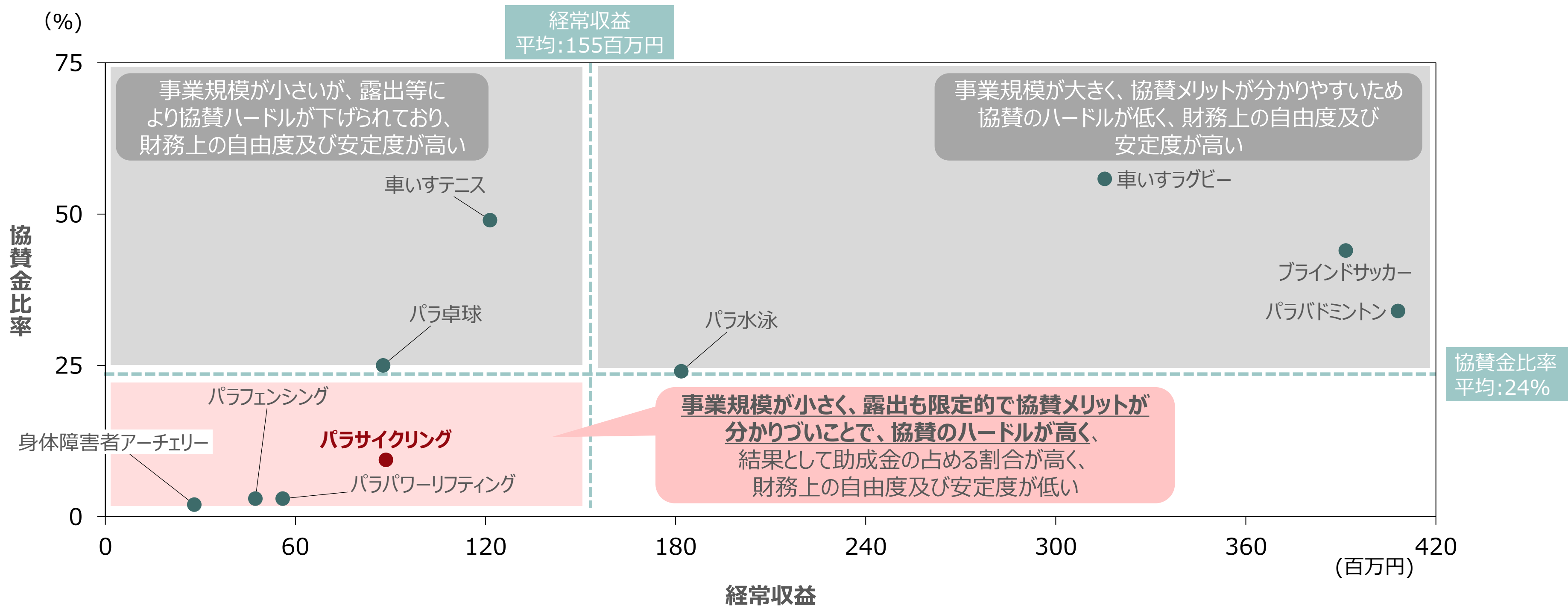
資金面での課題

- 収益源全体としての**助成金への依存度が高い**（約80%程度）ことにより、**資金の使用用途における柔軟性が低く**、かつ方針変更等により資金が不安定となる可能性も高い
- JKAなど、更なる補助金申請の余地はある一方で、他業務で手が回っておらず、**助成金申請及び事業報告業務がネック**となっている
- 現時点ではパートナーシップ（スポンサーシップ）のメリットが明確に提示しきれておらず、**今後安定的且つ持続的なスポンサー収入を得ることで自由度の高い資金を確保するためにも、パートナー企業にメリットが明確に提示できる形での関係性の強化が急務**となる
- メリットの提示をするにあたり、パッケージの内容や規模など**時代に即したパッケージの見直しを定期的に行っていく必要がある**が、現在はそこまで取り組めていない

【c)資金】なお、事業規模が同程度の団体においても協賛金の割合が高いパラ競技団体は存在しており、これらの活動を参考に協賛金の割合を高める必要がある



パラ競技団体の経常収益に対する協賛金比率の比較*(2023年度)



Note: *パラリンピック採用競技の国内統括団体のうち、「決算報告書内で明確に協賛金が区分されているもの」「パラ競技単体での決算となっているもの」を抽出（パラフェンシング及び身体障害者アーチェリーについては2022年度の実績）

Source: Portas Analysis、各団体決算報告書

【d)実施環境（体験/練習拠点など）】強化・強化以外の選手双方共に日常的な安全な練習環境の整備及び体験会後の新規選手獲得のための受け皿の構築が急務



現状

実施環境		現状		課題
練習拠点	トラック	<ul style="list-style-type: none"> 合宿で使用している伊豆ベロドローム及び日本サイクルスポーツセンターを通常練習のメインの練習場として使用 そのため、静岡・伊豆にアクセスがよい選手のみが活用できる状態 	<ul style="list-style-type: none"> 対象選手の拠点における競技場及びコーチ・練習パートナーが必要 地域によっては競輪場を使用 	<ul style="list-style-type: none"> 強化選手向けの練習拠点はある程度整備されている一方で、強化選手になる手前の選手向けには、日常的な練習を行うためにそれぞれの本拠地の近くに競技場及びコーチ・練習パートナーを用意する必要がある
	ロード	<ul style="list-style-type: none"> 季節に合わせて、沖縄及び御嶽濁河高地を中心にトレーニングを実施 通常練習は個別に実施しているが、安全面での課題もある 	<ul style="list-style-type: none"> 対象選手の拠点近くでの練習環境が必要だが、トラック競技と比較すると練習できる環境は多い しかし、安全面の確保や、クラスによっては練習パートナーの確保が課題 	
普及拠点		<p>日常的な練習拠点及びパートナー・コーチの確保が属人的に行われていることから、安全性を担保した上での、継続的な練習環境が個人によってばらつきがある</p> <ul style="list-style-type: none"> 合宿拠点にて合宿をするタイミングで普及活動も実施しているが、人的・用具リソース的にも地域的を限定して実施せざる負えず、また、興味を持った人が継続的に取り組める受け皿が限定的なため、継続的な関与に繋がりにくい 		<ul style="list-style-type: none"> 現在、いわき以外の練習拠点での普及活動は一過性であり、強化選手以外の練習拠点の整備と併せて、継続的に参加ができる拠点(含人材)との連携が必要

【e)広報・マーケティング】現在進めている見直しについてヒアリングの上、現状の方向性が戦略全体の方向性との一貫性が担保できているか評価する必要がある



現在実施されている広報・マーケティング活動

メールマガジン（追い風通信）



note



YouTube（追い風チャンネル）



その他（各地域の媒体・SNSなどでの発信）



- パリパラリンピックを前の、2024年6月よりメールマガジン及び、連動する形でYouTube及びnoteのチャンネルを開設し、積極的な広報・マーケティング活動を開始
 - 月1回のメールマガジンを送付し、コンテンツの概要を記した上で、他のメディア（YouTubeやnote）に誘導するための動線を引く
 - メールマガジンに記載している内容以外にもそれぞれのメディアで、特性に合わせたコンテンツ（インタビュー・トレーニング動画やパラサイクリング体験記）を発信
- YouTubeではアスリートのストーリーを伝えるだけでなく、競技の魅力なども発信する動画というフォーマットを活かした包括的な内容となっている
 - 長編動画及びShorts両方を活用し、人を引き付けるなど、発信方法にも工夫がなされている
- 更に、パリパラリンピックの壮行会や表敬訪問などについても地域のメディアや市長などが積極的に発信するなど、アールドメディアによる発信もできている
- 今後更に広報・マーケティングを活用し活動の推進を図るためにも、現在の方向性と戦略の方向性が一貫しているか評価する必要がある

戦略的に活動を進めるにあたり、体験会等のイベントの目的・ターゲットを明確化や、他団体・自治体との連携強化を行うことで普及をはじめとした多くの施策の拡大の機会に繋がると考えている

現状/課題

全般

- 現状では、目的が曖昧な状態で体験会・練習会を実施している場合も多い
- 目的別に適切な対象者のプールにアクセスできる形を構築する必要がある
- JKAもしくは各競輪場の選手会と連携することで、場所の確保は可能

障がい者向けの自転車の普及

- 自転車公園などでの自転車の設置を行うだけで体験の機会とできているかが現状では不明
 - ー タンデムを既に設置している自転車のレンタルポートなどで、どのようにレンタルされているかの情報をもらうことは可
- 県車連が競輪場を活用して実施しているサイクリングクラブに障がい者も混ざることが出来ると理想的
- 山陽小野田市のような形で、自治体との連携強化を通じてJスターなども含めた体験会を実施できる形を作りたい
 - ー スポーツコミッションがあるところが実施しやすい
 - ー 予算を確保してもらって、実施はJPCF等に丸投げというパターンが多い

強化を目指した体験・練習会

- 現在の体験会は発掘も兼ねている一方で、シンプルな体験会となっており、競技者の発掘につなげられておらず、継続を促す程度にとどまっている
 - ー 愛媛・福岡の県車連が特に発掘のための体験会を積極的に実施

今後連携を深めていくことができるである現時点で活用できる拠点について整理し、各拠点における機会を精査したところ、全体的にうまく連携・活用ができていない

- これまで、強化環境もしくは普及活動実施という観点から各地との連携を進めてきた
- 強化拠点の普及への活用等も含めて、改めて現在の拠点の**目的を整理し、活動の幅の拡張について検討**

各拠点の現時点での活用目的					
凡例 ✓：既に活用		普及		強化	背景
		自転車の普及	発掘		
北海道	-	(現在は拠点なし)			現時点では拠点・拠点候補がない
東北	いわき	✓	✓		事務局があり、自治体及び周辺団体との連携で、体験会以外にも様々な普及活動を実施
関東	土浦 (ハンド)		✓	✓	起伏の少ないハンドサイクルのトレーニングに適したコースがあり、普及拠点としても活用可能
中部	伊豆 (トラック)		✓	✓	ベロドロームでの合宿等を定期的に実施。強化を目指したアスリートの発掘に活用可能
	岐阜 (高地)			✓	高地トレーニングの実施に利用。アクセス、環境の観点から普及には適していない
近畿	-	(現在は拠点なし)			現時点では拠点・拠点候補がない
中国・四国	山陽 小野田	✓	✓		稼働が低かったオートレース場を活用して、普及活動を実施。オートレース場の稼働は復調しているが、自治体の予算は確保されており、稼働状況に応じて活用可能
	鳥取	(現在は調整中)			理事長との関係性により、現地におけるツーリズムの促進を主眼に提携を進めている
九州・沖縄	沖縄 (ロード)			✓	自治体との関係性は薄く、かつ直近のリゾート開発の影響で練習環境を変更する可能性あり

そのため、拠点の活用の方針について検討し、現在の空白地帯や活用が十分に出来ていない拠点を中心に連携を進めることで、様々な課題の解決策を見出すことができる可能性がある

各拠点の現時点での活用目的及び今後の活用目的

凡例	普及		強化	背景
	自転車の普及	発掘		
✓：既に活用 (✓)：今後活用可能				
北海道	-	(現在は拠点なし)		現時点では拠点・拠点候補がない
東北	いわき	✓	✓	事務局があり、自治体及び周辺団体との連携で、体験会以外にも様々な普及活動を実施
関東	土浦 (ハンド)	(✓)	✓	起伏の少ないハンドサイクルのトレーニングに適したコースがあり、普及拠点としても活用可能
中部	伊豆 (トラック)		✓	ベロドロームでの合宿等を定期的に実施。強化を目指したアスリートの発掘に活用可能
	岐阜 (高地)		✓	高地トレーニングの実施に利用。アクセス、環境の観点から普及には適していない
近畿	-	(現在は拠点なし)		現時点では拠点・拠点候補がない
中国・四国	山陽 小野田	✓	✓	稼働が低かったオートレース場を活用して、普及活動を実施。オートレース場の稼働は復調しているが、自治体の予算は確保されており、稼働状況に応じて活用可能
	鳥取	(✓)	(✓)	理事長との関係性により、現地におけるツーリズムの促進を主眼に提携を進めている
九州・沖縄	沖縄 (ロード)		✓	自治体との関係性は薄く、かつ直近のリゾート開発の影響で練習環境を変更する可能性あり

課題・機会

- a
現在、北海道及び近畿地方には拠点がなく、普及の観点では空白地帯となっており、**自治体・競輪場等の各団体との連携による拠点確保**が必要
- b
ハンドサイクルの練習環境がある土浦において、**地元の自転車屋等の協力によるハンドサイクルの普及活動**を定期的実施できる可能性がある
- c
山陽小野田においては、**普及イベント用の予算が確保**されており、積極的に活用することで、普及活動の拡大が見込める
- d
鳥取においては、ハンドサイクルを中心に**強化だけではなく、普及拠点とするべく自治体との予算も含めた調整が必要**
- e
自治体との関係性は薄く、使用地域が使えなくなる可能性もあり、**新たにロードの練習拠点と九州地域の普及も含めた拠点を探索する**必要がある

他にもJCFとの連携の方向性、資金におけるスポンサーシップの方向性や、スペシャルオリンピックスなどの知的障がい者団体との連携についての検討がなされた

関連団体との連携

- 現場レベルでは、JCF側の強化チームと連携しており、更に連携を強化することで、強化における人材・知見の共有や通じた質の向上が見込める

資金

- 現在のスポンサーは権丈さんの個人の活動についているスポンサーという意味合いが強く、JPCFという競技団体としてスポンサーとの関係を構築し、持続的な支援を得られる形を構築したい
- そのためには、スポンサー向けにメッセージを伝達し、適宜スポンサー対応を行える体制を構築する必要がある

知的障がい者団体との連携

- スポンサー向けのメリットがあるため、知的障がい者の競技も扱った方が良いという見解はあるが、他に取り組むべき・優先順位の高い課題が多く、検討を劣後している状況
 - ー 現時点では、最低限の対応として国際大会の際のメカニックは強化費から派遣している
- 体験機会の提供やアドボカシー活動については連携できる可能性が高く、今後の連携を視野にできることから実施
 - ー 以前、千葉競輪場で知的障がい者と共に体験会をやっていたが、子ども及び親の制御が難しく断念した経緯があるため、方法については要検討

戦略を検討するにあたり、アスリート視点でのパラサイクリングの魅力や、普及・強化・社会的アドボカシーに関する取組などについても中長期戦略に反映するために、登録選手に向けたアンケートを実施

項目	詳細
実施期間	2024年11月29日～12月8日
対象者	JPCFに登録している強化・育成及び一般選手 （強化選手：5名、育成選手：3名、一般選手：9名が回答）
設問数	47問
本来アスリートへの対面でのヒアリングを実施する予定だったが、合宿の日程変更などから実施が難しくなったため、急遽アンケートという形で実施した	

設問内容（抜粋）		
大項目	小項目例	設問例
基本情報	<ul style="list-style-type: none">取り組んでいる種目選手分類障がい分類自転車との接点 等	<ul style="list-style-type: none">ご自身の障がいは、以下のどの選択肢に当てはまりますか？（選択肢より複数選択）障がいを持った状態で自転車に初めて乗ったのは何歳ごろの時ですか？（数字で記述）
普及	<ul style="list-style-type: none">パラサイクリングを知った経路、体験した場所（周囲の障がい者）がパラサイクリングを知る経路・興味を持つコンテンツ 等	<ul style="list-style-type: none">パラサイクリングを初めて知った際に、どのような点に興味を持ちましたか？または、パラサイクリングに興味を持ちませんでしたか？（自由記述）後天性の障がい者がパラサイクリングを初めて知る経路として、どのような経路が最も多いと思いますか？（選択肢より複数選択）
強化	<ul style="list-style-type: none">他のパラスポーツからの転向の有無練習場所・パートナー・コーチの確保状況欲しい技術的なサポート	<ul style="list-style-type: none">以前、アスリートとして他のパラスポーツに取り組んでいたところから、パラサイクリングに転向しましたか？（選択肢より選択）合宿以外の日常的な練習場所はどのように確保していますか？（複数回答可）
社会的アドボカシー（広報）	<ul style="list-style-type: none">JPCF主催のイベントへの参加状況及び参加意向望ましい広報の手法 等	<ul style="list-style-type: none">以下のJPCFが実施している活動について、これまでの参加状況を教えてください。（選択肢より選択）
パラサイクリングの魅力	<ul style="list-style-type: none">パラサイクリングの魅力	<ul style="list-style-type: none">ご自身が感じる競技者として考えるパラサイクリングの魅力を教えてください。（自由記述）

【選手アンケート】：サマリー① 選手アンケートでは生の声が多く聞くことができ、具体的に来年度の施策を検討する際には参照すべき点も多い

1 選手の特徴

- 年代が概ね若い
- 障がいを追ってから自転車に乗るまでの年数が短い
- また、体験として自転車に乗ってすぐに競技として始めた選手が多い

2 スポーツ経験（障がいを負う前の経験）

- 自転車に取り組んでいたアスリートも多い
- その他、陸上、水泳に取り組んでいたアスリートが多く見受けられる

3 他競技からの転向者

- パラ陸上、車いすバスケットボール、障がい者スキーなどの経験者が多い
- 特にパラ陸上の転向者が多かった

4 認知のきっかけ

- インターネット・SNS：競技の紹介や動画が効果的
- 家族・友人経由：重要な認知経路

5 継続参加するためには

- 連盟主催の体験会や練習会：継続参加の重要な機会
- 機材の確保：大きな課題
- 練習場所と相談相手：環境要因が重要

6 サポートの希望

- 栄養サポート：希望が多い
- トレーニングサポート：次いで希望が多い

示唆

1. 若い選手の育成とサポート

- **早期の競技開始**：障がいを追ってから自転車に乗るまでの年数が短い選手が多いことから、早期の競技開始が重要
- **若年層へのアプローチ**：若い選手が多いことから、若年層に対するアプローチやサポートが重要

2. 他競技からの転向者の活用

- **転向者のサポート**：パラ陸上など他競技からの転向者が多いことから、転向者に対するサポート体制の強化が必要

3. 認知と参加の促進

- **インターネット・SNSの活用**：認知のきっかけとしてウェブ・SNSが重要なため、これらの媒体を活用した情報発信が効果的
- **体験会や練習会の重要性**：継続参加のために連盟主催の体験会や練習会などの提供が重要

4. 環境整備とサポート

- **機材の確保**：機材の確保が大きな課題であることから、機材の提供や支援の検討が必要
- **練習環境の整備**：練習場所や相談相手の確保が重要であることから、練習環境の整備が必要

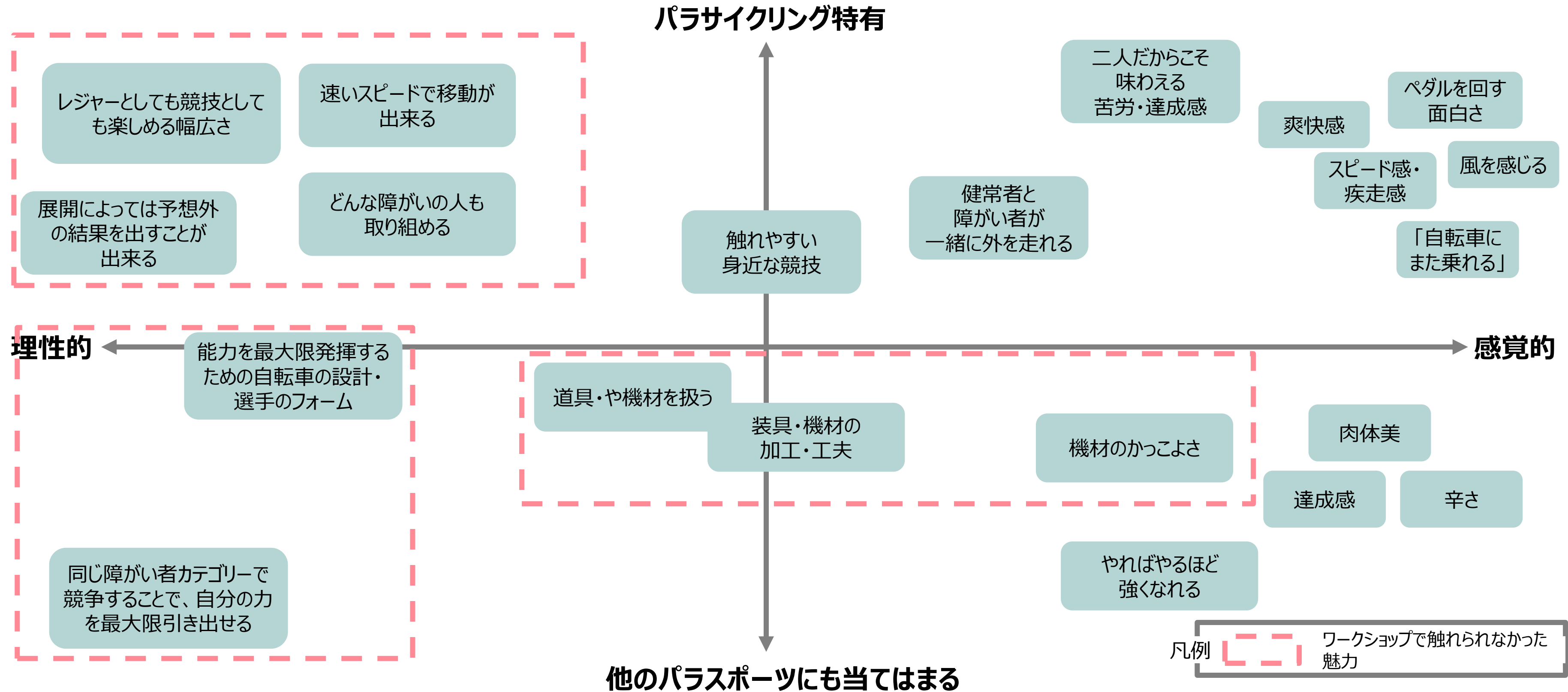
5. 総合的なサポート体制

- **栄養・トレーニングサポート**：栄養サポートやトレーニングサポートの希望が多いことから、総合的なサポート体制の構築が必要
- **資金的支援**：個人での練習や雇用が多いことから、資金的な支援についての検討も重要

6. 競技の魅力と交流の促進

- **競技の魅力の伝達**：競技としての魅力を伝えることが重要であることから、魅力的なコンテンツの提供が求められる
- **交流の機会の提供**：一般の人や世界の人との交流の機会を作るための機会を増やす

【選手アンケート】：サマリー② 選手が考えるパラサイクリングの魅力にはワークショップで触れられなかった点も多くあったため、これらの内容は広報・マーケティングとシェアしながら参考にしていく



目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
- **SWOT分析**
- 中長期計画立案
- Next Steps
- Appendix



SWOT分析 – Strength（強み）

【戦略の柱】

① 普及

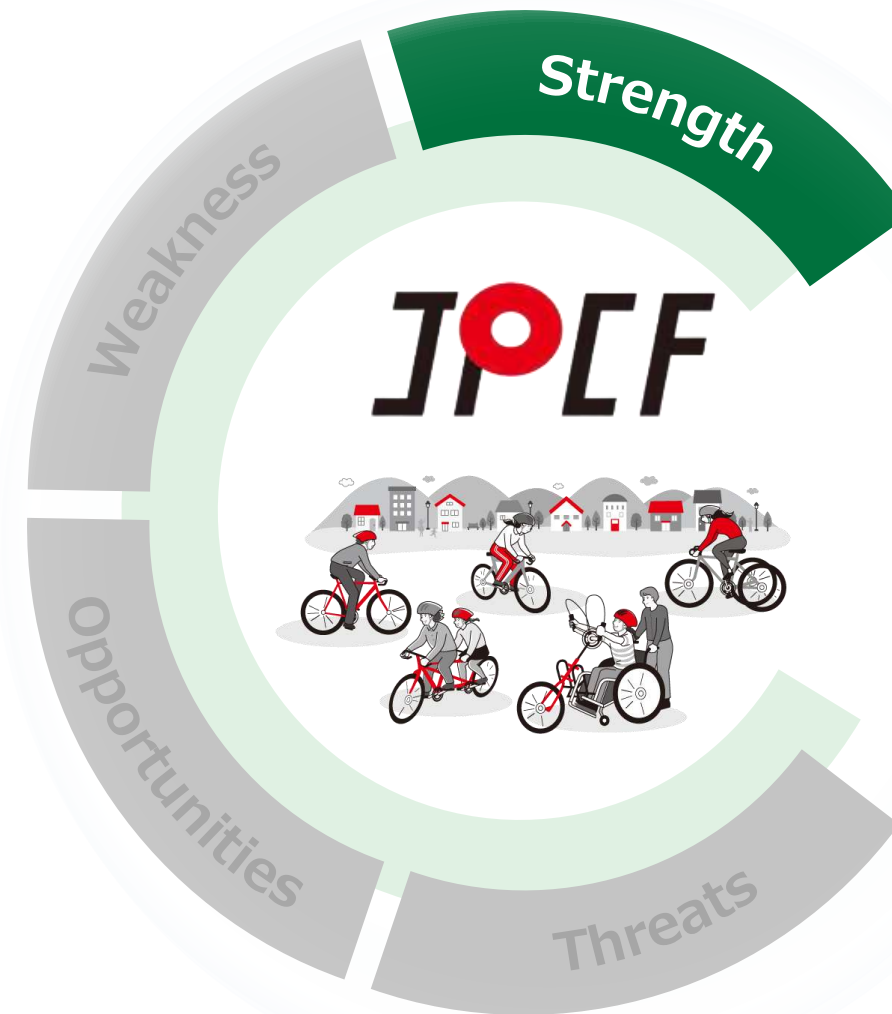
- ・ 潜在層が約20万人と多く、今後のポテンシャルがある
- ・ 特性的に他競技の転向者も受け入れ大いに可能
- ・ 福島など地域によっては普及に力を入れているエリアあり

② 強化・パスウェイ

- ・ 就職先の紹介など属人的である者の、キャリアサポートなどは手厚く行っている
- ・ 財政的にはJKAなど各種団体などからある程度潤沢に資金は確保できている

③ 社会的アドボカシー

- ・ 選手個人が周囲に対して様々な発信を続けており、小さいかもしれないが多少のインパクトはあると考えられる



【戦略実現のための要素】

・ 組織体制・ガバナンス

- ・ 理事会・事務局距離が近く、共に意思決定が早く、迅速な運営が可能
- ・ 適材適所かつ柔軟な人材の活用ができる、外部人材の登用に対してオープンな環境がある

・ 関連団体との連携

- ・ これまでメダルをコンスタントにとれる状況にあることから、JPCとの関係性が良好
- ・ 地元の自治体や各種外部団体との関係性が構築できており、各種イベント等をいわき市中心に実施

・ 実施環境（体験・練習拠点など）

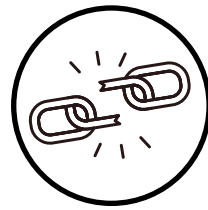
- ・ 提携先の自治体を含めた強化に活用できる拠点については充実且つ良好な関係性を築けている

・ 資金（パートナーシップ・その他収益源など）

- ・ 審判員も含めた協力を申出るパートナー企業も存在している
- ・ リソース不足のため活用はしていないが、JKAの助成金など他に活用できる収益源のオプションがある

・ 広報マーケティング

- ・ 外部人材を交えて、広報の見直しを実施し、客観的な視点も取り入れたメディア運用が可能



SWOT分析 – Weakness（弱み）

【戦略の柱】

① 普及

- ・ 潜在層をとらえていない
- ・ 何故潜在層を捉えられていないのか理解が至っていない
- ・ 地域的偏りが大きい（全国化していない）
- ・ 体験会以降の持続的参加の仕掛けがない
- ・ ささえる人の欠如・育成システムがない

② 強化・パスウェイ

- ・ 普及から強化に移行する間に大きな隔たりがあるがサポート体制も特にならない
- ・ 競技者のタレント発掘が道筋が描けていない
- ・ 医科学連携のサポートができていない
- ・ 機材が高く、選手負担も多く、障壁になっている可能性がある

③ 社会的アドボカシー

- ・ 東京パラ2020以降の認知度自体が落ちてきている
- ・ 障がい者への理解も東京大会前の水準まで落ちてきている
- ・ 選手個人にアドボカシー活動を一任している状態であるため、本来もっと大きなインパクトが残せるような関係者に対してリーチができていない



【戦略実現のための要素】

・ 組織体制・ガバナンス

- ・ 人材が不足していることで、事業活動に制限が生じている
- ・ 選手を支えるスタッフが限定的且つ次世代の育成が進んでおらず、将来的に課題を抱えている

・ 関連団体との連携

- ・ JCF/JPC/JPSA等の国内の関連団体との効果的・効率的な運営を実施する上での関係性が構築できていない

・ 実施環境（体験・練習拠点など）

- ・ 拠点以外の練習・普及拠点が少なく、選手候補が自身の拠点で触れる/練習するのが難しい

・ 資金（パートナーシップ・その他収益源など）

- ・ パートナー企業向けにパートナーシップのメリットを明確に示せておらず、収益が不安定となりやすい状況
- ・ 人材の不足が補助金申請のネックとなっている

・ 広報マーケティング

- ・ 連盟としての方向性を定めた上での広報にはできておらず、まだ戦略性や一貫性は見直し中
（現在の広報コンセプトの「追い風」も広報活動のみで使用しており、他の活動と連動していない）



SWOT分析- Opportunities (機会)

【戦略の柱】

① 普及

- ・ 潜在層が約20万人と多い
- ・ 自治体との連携強化により、機会の創出が望める
- ・ パラサイクリングの魅力を伝えることで新たな層にアプローチも可能

② 強化・パスウェイ

- ・ 栄養などを含む医科学連携を行うことで、トップ選手含めより良い強化体制を敷くことができる
- ・ 国内の大会に他団体と協力の上出場機会を設けることで、より経験を積むことができる

③ 社会的アドボカシー

- ・ SNSの発信を2024年度よりより活発に行っており、これらを活用し、選手個人ではリーチできない人に対し訴求することが可能となる



【戦略実現のための要素】

・ 組織体制・ガバナンス

- ・ 現在の小規模な事務局・組織運営から今後選手数拡大に伴う組織拡大に向け、現時点でガバナンスを強化して運営することで、将来的な組織拡大の礎を作ることができる

・ 関連団体との連携

- ・ 現在連携がさほど取れていないJCF等との連携を強化することで、JPCFの課題である普及や強化の観点での課題解決及び更なる発展の可能性はある

・ 実施環境（体験・練習拠点など）

- ・ 財源とそれを最適な形で回すために必要な工数を併せて検討することで、JPCFの現状及び今後の組織体制に合わせた収益源の設計が可能

・ 資金（パートナーシップ・その他収益源など）

- ・ 現在連携している各地の施設との関係性をさらに活かし、各地での普及等の活動の更なる展開の可能
- ・ JCFと様々な連動を行えば、環境の整備も更に推進できる可能性がある

・ 広報マーケティング

- ・ パリパラリンピックに向けて、更には結果次第ではパラリンピック後も一定期間は露出が高まる可能性が高い
- ・ パリパラリンピックをきっかけに興味を持ってくれた人を継続的にエンゲージさせることで、サポーターを増やすことは可能



SWOT分析- Threats（脅威）

【戦略の柱】

① 普及

- ・ 属人的に行われており、持続性がない
- ・ 長期的プランなく実施されており、意欲ある人を取り逃す可能性あり
- ・ 機会以上に能力開発などの提供をしなければ参加へのモチベーションを上げることができない

② 強化・パスウェイ

- ・ 属人的に行われていることも多く（就職先の紹介など）、持続的ではない
- ・ サポートスタッフも属人的であり、ベストな体制が構築できているとは言い難い

③ 社会的アドボカシー

- ・ 興味関心が東京パラ2020以外薄れてきている可能性あり
- ・ 社会的アドボカシーが何なのか、発信者のその理解も含め行わなければインパクトの最大化は望めない



【戦略実現のための要素】

・ 組織体制・ガバナンス

- ・ 人数が少ない組織体制の中で、理事は理事長を含め兼任体制となっており、各個人の事情の変化により現在の体制が継続できない可能性があるため、より持続性のある組織体制の構築が必要
- ・ リクルーティングに係る費用や人件費が上昇しており、適した人材の確保が難しい

・ 関連団体との連携

- ・ 現時点で多くの関連団体との連携が限定的だが、今後のパラリンピック等各種大会の成績次第では現在良好な関係性にある団体との連携体制も希薄になる可能性がある

・ 実施環境（体験・練習拠点など）

- ・ 拠点の機能を維持するためには、施設の確保と併せ、現地における運営サポートを行う人材確保が必要

・ 資金（パートナーシップ・その他収益源など）


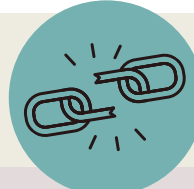


- ・ 助成金の縮小により、運営費を他の収益で補う必要があるが、現時点では助成金が全体の80%を占めており、補填が難しい
- ・ 国内企業のスポーツ投資意欲の低下とリターン提示へのプレッシャーにより、新規・持続的パートナーシップのハードルが上がっている

・ 広報マーケティング

- ・ 現時点では、興味がある人を増やす広報ではなく、興味がある人向けの広報となっており、広報のリーチが競技の認知度・興味関心度に依存している

クロスSWOT分析- 内部要因と外部要因を掛け合わせて事業上のリスクを洗い出し

クロスSWOT分析

	 S trengths (強み)	 W eaknesses (弱み)
 O ppportunity (機会)	強み×機会 <ul style="list-style-type: none"> ・ コンスタントにメダルを獲得できる競技力、既に関係性のある自治体との連携を活かして、関係団体（JCFやUCI等）との関係性強化のフックとする ・ 外部人材を活用しながら、組織体制を柔軟に整えられる 	弱み×機会 <ul style="list-style-type: none"> ・ 現時点で人材が不足していることが、ネックとなり自治体との更なる連携や関係団体との連携強化、更なる資金の獲得が滞ってしまう ・ 属人的に行われていることを自治体などと共に解決していく
 T hreats (脅威)	強み×脅威 <ul style="list-style-type: none"> ・ 理事会・事務局共に人数が少なく、外部的な要因により、運営体制が変わってしまうことのインパクトが大きい ・ 関係性の良いパートナーについても、パートナーシップについての考え方の変化で離脱してしまう可能性がある 	弱み×脅威 <ul style="list-style-type: none"> ・ パートナーシップのハードルが上がる中で、パートナーに対するメリットを明確に示せておらず、離脱が進むリスクがある ・ 人件費の向上により、不足している人材の確保がさらに困難となる可能性が高い

強みである、意思決定の早さや特定の自治体との関係性や競技力を生かして、関係団体との連携を強めつつ、柔軟な運営を進め、弱みである資金・人材についての対策を講じていく必要がある

目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
- **中長期計画立案**
- Next Steps
- Appendix

JPCF連盟の中長期戦略（2025～2032年度）は4つの戦略実現のための要素に支えられた3つの柱で構成されている

パリパラリンピック翌年からブリスベンパラリンピックの年までの2サイクルを本中長期戦略の対象とした

VISION & MISSION & VALUE

Mission: あらゆる人たちに届く追い風を、共に生み出す

Vision: 自転車を通じて、だれもが風を感じ、可能性を広げられる社会を実現する

Value: 熱意を持って挑戦し続ける。変化、失敗を恐れない。互いにリスペクトし、追い風を送りあう

NEW
VERSION



戦略の柱

①普及

パラサイクリングをより多くの障がいを持った人に触れ競技者を増やす（＝する）だけでなく、ファンを作ること（＝見る）、競技全体としての普及を図り発展させていく

②強化・パスウェイ

代表強化及び次世代選手の育成、更にそれに伴うパスウェイをより実現性のあるものするための環境整備などを行う

③社会的アドボカシー

自転車競技を通じ障がいのある人、ない人が共に自転車競技を楽しむことができ、共生社会の実現に向けた活動を行う



戦略実現
のための
要素



a) 組織体制・ガバナンス



b) 関連団体との連携



c) 資金（パートナーシップ、その他収益源など）

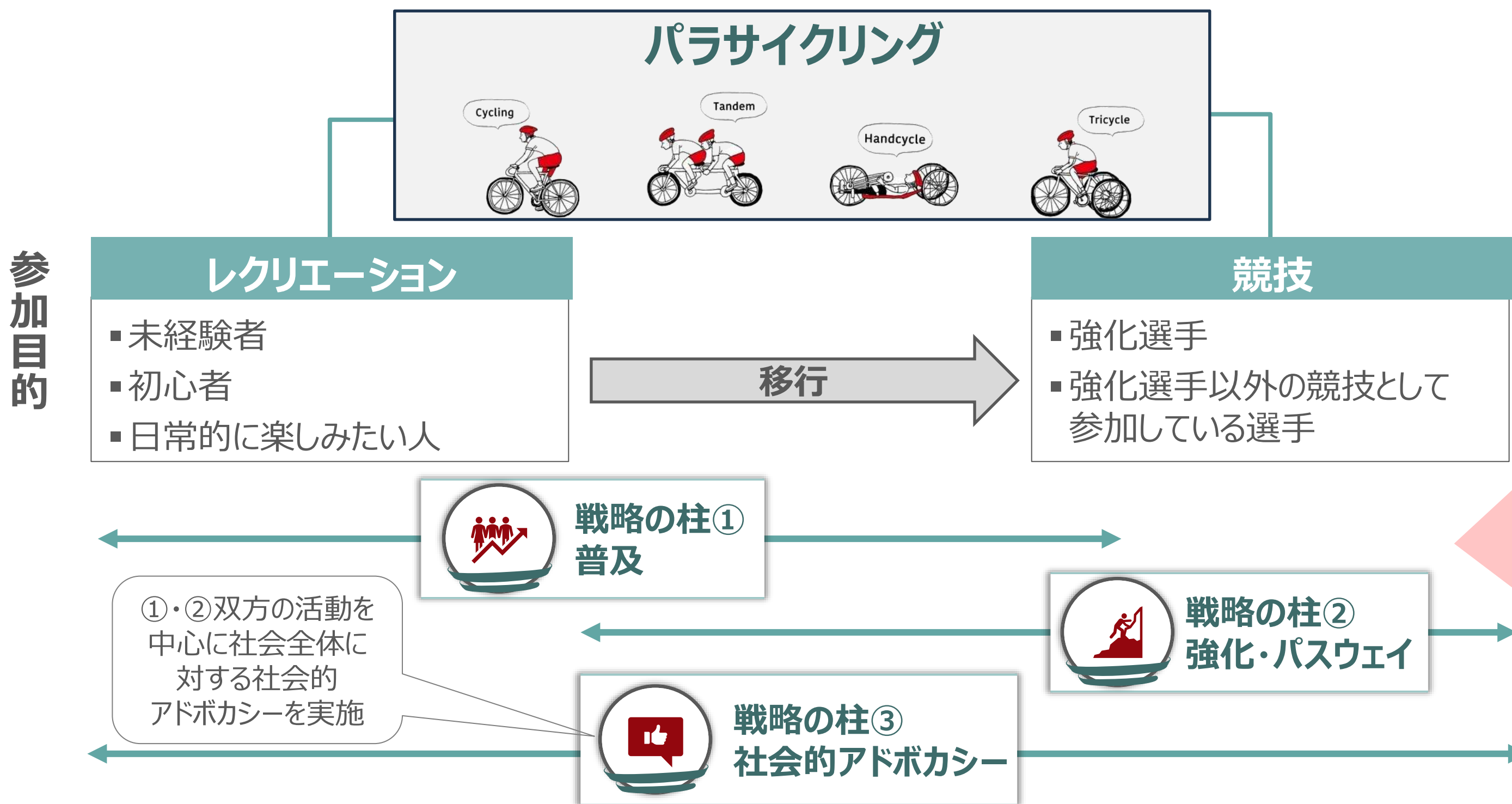


d) 実施環境（体験/練習拠点など）



e) 広報・マーケティング

戦略の柱①の普及は現状ベースに「障がい者のための自転車普及」と「競技としての普及」両方が必要なことが明確になったことから、レクリエーションと競技両方に跨ぐという位置づけにした



健常者対象の競技は、レクリエーションとして自転車に触れることは、子供のころから広く行われているが、**パラサイクリングはそもそも「障がい者のための自転車の普及」と「パラサイクリング競技としての普及」両方に取り組まなければならない、それぞれに対する施策を検討する必要があり負担が大きい**

ここで設定した戦略の柱に対し、ここまでの現状把握・分析から明らかになった課題からそれぞれに対し仮説構築を行う



戦略の柱① 普及

■ 目標

- パラサイクリングをより多くの障がいを持った人に触れ競技者を増やす（＝する）だけでなく、ファンを作ることで（＝見る）、競技全体としての普及を図り発展させていく

■ 目標の達成に必要な要素

- （機会・能力）障がいの有無にかかわらず体験が可能な地域の増加、継続的にパラサイクルを体験・練習できる形の創出
- （モチベーション）パラサイクリングをやりたいという気持ちを喚起するための施策、更に見たいと思えるきっかけづくり



戦略の柱② 強化・パスウェイ

■ 目標

- 代表強化及び次世代選手の育成、更にそれに伴うパスウェイをより実現性のあるものするための環境整備などを行う

■ 目標の達成に必要な要素

- 現実を反映したパスウェイ及びそれぞれの層に対するアプローチ手法の策定
- アプローチ手法を実現するための内部・外部リソースの活用の方方向性



戦略の柱③ 社会的アドボカシー

■ 目標

- 自転車競技を通じ障がいのある人、ない人が共に自転車競技を楽しむことができる共生社会の実現に向けた活動を行う

■ 目標の達成に必要な要素

- 普及活動や広報と絡めた、競技及び共生社会についての認知・理解の拡大
- ターゲットを意識した、適切かつ一貫性のあるメッセージ性及び最適な訴求手法の策定

未経験者および初心者・レクリエーション目的の経験者それぞれに対し、パラサイクリングとの接点を作るために、機会・能力とモチベーションの双方の面でのアプローチを実施することが必要



戦略の柱① 普及

目標

- パラサイクリングをより多くの障がいを持った人に触れ競技者を増やす（＝する）だけでなく、ファンを作ること（＝見る）、競技全体としての普及を図り発展させていく

目標の達成に必要な要素

- （機会・能力）障がいの有無にかかわらず体験が可能な地域の増加、継続的にパラサイクルを体験・練習できる形の創出
- （モチベーション）パラサイクリングをやりたいという気持ちを喚起するための施策、更に見たいと思えるきっかけづくり

現時点での仮説		検証事項（例）	
機会・能力	(する) 未経験者	<ul style="list-style-type: none">より身近で気軽に参加できる場所（＝全国）でのパラサイクリングに触れる機会が必要	<ul style="list-style-type: none">体験会に参加しうる障がい者はどのように分布（障がい、年齢、エリアなど）しているのか全国で体験会を実施する場合にどのような企画・準備が必要となるのか。ボトルネックは何か（場所、用具、体制、費用等）
	(する) 初心者～経験者	<ul style="list-style-type: none">定期的な体験会・練習会の開催による継続的な競技との接点の創出個人で自主的な練習を行う機会の創出の上、能力の向上を図る	<ul style="list-style-type: none">体験会を実施している自治体において、継続した実施に際しては何がネックになるのか（用具の保管、人的リソース、費用等）個人で体験会以外で練習を行う際のボトルネック及び可能にするために必要なことはなにか
	観る人	<ul style="list-style-type: none">現段階では観る人・ファンへの訴求は限定的なため、まず家族以外に興味を持ってもらうためのきっかけを作る機会が必要	<ul style="list-style-type: none">パラサイクリングを観たいといった場合、どのような機会があるのかファンエンゲージメントはどの程度・どのように行っているのか
モチベーション	(する) 未経験者	<ul style="list-style-type: none">パラサイクリングに少しでも興味を持って試してみたいという気持ちを喚起するための施策の充実及び実施地域との連携	<ul style="list-style-type: none">これまでの実績・経験上効果的なやり方はなにかどのようなことがきっかけで興味を持ってくれるのかターゲット別に誰が、どのようなメディアチャネルでどのようなコンテンツを訴求するのが最適か
	(する) 初心者～経験者	<ul style="list-style-type: none">継続的に参加したいというモチベーションを維持・向上策としての体験以外の形での競技との接点の増加	<ul style="list-style-type: none">体験以外の形でパラサイクルに触れる方法として、どのようなものが考えられるか（公園での貸し出し、街中でのレンタルサイクル、自転車の販売等）継続して参加したいと思うためには何が促進要因となるのか
	観る人	<ul style="list-style-type: none">実際見た上で認知・理解の上、サポートしたいと思うための多様な接点の増加が必要	<ul style="list-style-type: none">家族以外の人でパラサイクリングに興味を持って、サポートしている人はどのようなことがきっかけ・興味を持って参加しているのか



【戦略の柱】①普及：パラサイクリングをより多くの障がいを持った人に触れ競技者を増やす（＝する）だけでなく、ファンを作ることで（＝見る）、競技全体としての普及を図り発展させていく

普及実現のために 取り組むべき点①

自治体との連携推進（構築・見直し・実施）

- 既に関係性の構築がされている自治体を中心に、JPCFとしてどのような役割を求めるのか明確にし、各自治体と共にプランを作り、実行に移す
- 自治体と密な連携により、自治体主導で普及を行ってもらうを体制を整えていく

普及実現のために 取り組むべき点②

専門人材の育成（枠組み構築・関係構築・推進）

- コーチ・メカニックなどの専門人材のタレント発掘・育成システムの確立し、各所と連携体制を結び、「する」人の競技環境の改善を行う

普及実現のために 取り組むべき点③

eSports事業推進

- 全国展開する上でネックとなる人材の確保を、地域が限定されないeSports事業に乗り出すことで、遠隔地の人も参加や練習に加わることができる体制を作る
- eSports×自転車×健康などを組み合わせることで、パートナー企業への新規価値を創出

実現する上での大きな課題

- 組織的にどの様に地域とかかわっていくのか、良好な関係性を継続的に気づいていくためにも、まず組織体制及びオペレーションモデルの見直しが必要
- 広報との連動性を意識し、パラサイクリングの魅力を伝える仕掛けなどをイベントごとに行う
- これらの活動を支援するパートナー企業（新規・既存）探し

発掘育成システム、医・科学研究やコーチの確保・養成、競技大会の観点でのサポートが不足しており、内外のリソースを活用してサポートを充実させることが必要



戦略の柱② 強化・パスウェイ

目標

- 代表強化及び次世代選手の育成、更にそれに伴うパスウェイをより実現性のあるものするための環境整備などを行う

目標の達成に必要な要素

- 現実を反映したパスウェイ及びそれぞれの層に対するアプローチ手法の策定
- アプローチ手法を実現するための内部・外部リソースの活用の方方向性

アプローチ の方向性 *

発掘・ 育成 システム

- 普及の取組を進めるとともに、見込みのありそうな選手の情報が集まる
タレント発掘システムの構築が必須
- 強化選手手前の競技者の日常的な練習環境の確保**

医・科 学研究

- 大学・実業団等との連携**を通じた、研究への協力
- 学校でのカリキュラムに取り入れてもらうなど教育の一環として捉えてもらう

コーチの 確保・ 養成

- 自治体や学校、実業団等を通じた、強化スタッフの採用ネットワークの拡大**
- 強化スタッフの育成に当たっての**網羅的な研修プログラムの策定**

競技 大会

- 国内での**実戦機会の拡張を目指した、JCFとの連携の強化**

アプローチに当たって のリソースの活用

- 最大限外部リソースを活用する形での実施を行い、負担の分担が必要

検証事項（例）

- JPCFのスタッフ以外を通じた活動の中での情報の吸い上げはどのような形が望ましいか

- 自治体や現地の学校や実業団との連携を通じての練習環境の確保は可能か

- 現在の強化における医・科学上のニーズは何か
- 現時点で提携先の候補となる大学や実業団はあるか（エリアごと、現実性など含め）
- どのような形での提携がお互いにとって望ましいか

- どのような経路での採用ネットワークの拡大が最も効果的か

- 強化スタッフの各役割に対して、どのような内容の知識・スキルの共有が必要か

- JCF主催の国内大会にてパラサイクリングを実施する交渉における想定される障壁は何か

- 組織内部で行うべきことと、外出しできる部分はそれぞれどのような役割・タスクか



【戦略の柱】②強化・パスウェイ：今後の競技繁栄のために普及から競技への移行パスウェイ、タレント発掘、更には日常練習場所の確保および医科学サポートなど多面的に取り組む

普及実現のために 取り組むべき点①

普及活動から競技に至るまでのパスウェイ構築

- ・ 現在レクリエーションから競技の間の移行がうまくいっていないため、パスウェイを構築の上、普及活動と連動させ、タレント発掘を行う

普及実現のために 取り組むべき点②

大学・実業団チームなどとの連携を通じたに日常練習場所の確保

- ・ 競技として取り組む場合に課題として挙げられている日常の練習場所などの確保として、大学や事業団チームなどと連携を進める

普及実現のために 取り組むべき点③

医科学サポートの拡充（医科学、栄養など）

- ・ 普及における「専門人材の育成」と連動させることで、育成の段階から強化のサポートも行うことで現場を知ってもらうなど連動も念頭に拡充を進めていく
- ・ 選手に対し栄養サポートなどより医科学サポートなど成長する上で必要な知識を提供

実現する上での大きな課題

- ・ JCFや県車連、大学などとの連携強化するにあたっての組織体制、オペレーションモデルの見直し
- ・ 強化選手がいかに普及・社会的アドボカシーに寄与すべきなのか、何を行うべきなのかを明確にし、選手たちと広報担当などと密なコミュニケーションを行う必要がある

パラサイクリングを通じた共生社会の実現するにあたり、まず個々の障害者が中心となり認知・理解を進め、周囲の関与・行動を促すことで、最終的にその人自身に還元される仕組みの構築が必要



戦略の柱③ 社会的 アドボカシー

■ 目標

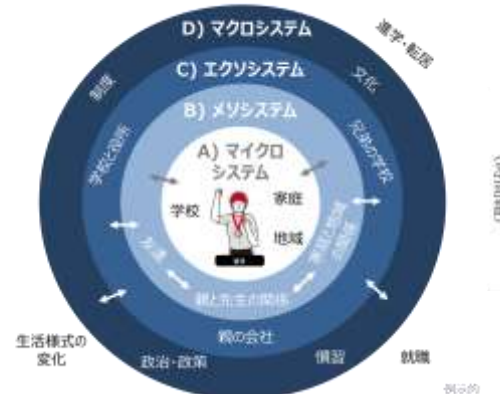
- 自転車競技を通じ障がいのある人、ない人が共に自転車競技を楽しむことができる共生社会の実現に向けた活動を行う

■ 目標の達成に必要な要素

- 普及活動や広報と絡めた、競技及び共生社会についての認知・理解の拡大
- ターゲットを意識した、適切かつ一貫性のあるメッセージ性及び最適な訴求手法の策定

共生社会の 実現に向けた 取り組みの構造

生態学的
システム
理論的
観点



社会的アドボカシー のステップ

認知

理解

関与

行動

①内から外に働く力

- 選手個人が周囲に働きかけることで、周りの変化を促すための基礎を作る

②外から内に働く力

- 変化を促された人・組織などが、結果的に自主的に関与・行動する

選手
への還元
&
共生社会
の実現に
貢献

**【仮説】社会的アドボカシーに必要なこれらのステップを意識しながら、
①・②双方の力を最大限活用しなければ、インパクトの最大化は図れない**

WHAT	現時点での取り組みで何が足りていないのか、そのためには何がどのような状態となるのが望ましいか整理が必要
WHO	目標を達成するに当たって、だれに対し、どこでアプローチするのがベストなのかの検討が必要 <ul style="list-style-type: none"> これまで個々のアスリートが行ってきた活動にはどのようなものがあるのか 体験する機会・試す機会は障がい者、健常者別々に行われていたのか？インクルーシブな取り組みはあったのか 聞く機会（講演会など）ではどこで誰に対して行い、双方の理解を深めるような進捗がなされていたのか 実施するにあたり、どの程度準備・工数がかかるのか
WHERE	上記のWHO/WHEREと合わせて、どのようにアプローチするのか手法などの検討が必要
HOW	<ul style="list-style-type: none"> これまでどのようなコンテンツ×メディアのリーチが最も高かったのか？もしくは悪かったのか これまで個々のアスリートが行ってきた活動ではどのようなメッセージが伝えられていたのか



【戦略の柱】③社会的アドボカシー：全体の枠組みを策定し、「軸」を明らかにした上で、広報・マーケティングの戦略を併せて策定し、連動性を持たせた活動を行う

普及実現のために 取り組むべき点①

社会的アドボカシーに関する全体の枠組み策定・事業策定

- ・ 誰に、どのように社会的アドボカシーを行っていくのか、また誰がどこ（場所、プラットフォームなど）行うのかという点など活動の戦略的枠組みを決めた上で事業の検討

普及実現のために 取り組むべき点②

広報・マーケティング戦略の策定及び実施

- ・ 社会的アドボカシー推進するにあたり、必要不可欠な広報・マーケティング戦略を策定
- ・ 策定された戦略を実行する際に、社会的アドボカシーの「軸」を定め、それに沿ってJPCFの各事業や活動において広報できる仕掛けを提供する

普及実現のために 取り組むべき点③

新たな既存及び新規パートナー企業の創出・価値創造

- ・ 既存のパートナー及び新規パートナー企業に対し、社会的アドボカシー活動がいかに関業理念やビジネスに直結するポテンシャルがあるのか理解してもらった上で活動に賛同してもらう必要がある（新規社会的アドボカシーパートナーパッケージなども検討）

実現する上での大きな課題

- ・ 属人的に選手個人で行っていることも多いため、誰がどこで何を行うのかという戦略を明確に示す必要がある
- ・ また、軸がない、事業間の連動性がない場合、インパクトが少ないため、横断的に常に社会的アドボカシーということを意識する必要がある

【戦略実現のための要素別仮説（1/2）】全体として、関連団体を含めた外部のリソースを上手く活用しつつ、人材・資金を調達し、事業を拡大していくことが必要

戦略実現のための要素		現時点での仮説	検証事項
	a) 組織体制・ガバナンス 	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 迅速な意思決定を維持するために、組織が大きくなっても会議体及び参加者数は不用意に増やす必要はないが、中長期戦略に必要な専門技能を持った人の関与は要検討 ▪ 人材不足を補うための外部のリソースを広く活用し、特定の業務にフォーカスした人材の活用を進めることが望ましい ▪ 長期的に人が働きやすい環境を整えるために現段階での雇用体系・給与体系の見直しなどの見直しが必要 ▪ 強化人材に必要な知識・スキル・経験等の棚卸しをした上で、採用ネットワークの拡大や研修コンテンツの作成による人材の質の担保が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 現在の意思決定体制における課題はないか ▪ 普及や事務を中心に職員等が増えたことを想定した際の理想的な体制はどのような形か ▪ 現在人手が不足しており手を付けられていない業務・タスクはどのようなものがどの程度のボリュームで存在し、それらの業務・タスクは内部・外部どちらによって実施されるべきなのか ▪ 外部人材登用するにあたって、整備が必要な点はなにか ▪ 強化人材に必要な知識・スキル・経験・素質はどのようなものがあるのか ▪ 理想的な強化人材に近い人物はどこにいて、どのようにネットワークを拡大することでアクセス・育成できるのか
	b) 関連団体との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 【①普及】JPSAやJPC、JCF等との関係性を活用・強化し、普及事業における助成金や事業サポート・協力体制を強固なものにすることで、より広く継続的な普及活動の可能性を探る ▪ 【②強化・パスウェイ】特にJCFとの関係性を強化し、国内での実戦機会を拡大し、強化の推進につなげられるか検討できるのではないか ▪ 【③社会的アドボカシー】競技関連団体や、自治体等の団体との連携を行うことで、訴求できるメッセージやリーチの点でアドボカシー活動の充実化が可能 	<ul style="list-style-type: none"> ▪ どの団体と連携することが費用、工数、効果の面で最も効率的か ▪ 関係性を強化するにはどのような働きかけが有効か ▪ 関係性を強化し、国内大会へのパラアスリートの参加を実現するにはどのような働きかけ・交渉が有効か ▪ どの団体と連携することが費用、工数、効果の面で最も効率的か ▪ 関係性を強化するにはどのような働きかけが有効か

【戦略実現のための要素別仮説（2/2）】全体として、関連団体を含めた外部のリソースを上手く活用しつつ、人材・資金を調達し、事業を拡大していくことが必要

<div data-bbox="126 821 259 960"></div> <div data-bbox="59 1084 319 1298">戦略実現のための要素</div>	<div data-bbox="449 622 976 847">c) 資金 (パートナーシップ、 その他収益源など)</div> <div data-bbox="663 907 779 1005"></div>	<div data-bbox="1429 401 1812 457">現時点での仮説</div> <div data-bbox="1092 495 2135 1065"> <ul style="list-style-type: none"> 助成金への依存度が高い状況を改善する目的で、パートナーシップによる協賛収益を高める必要がある パートナー企業に対する協賛によるメリットについて明示し、定期的なコミュニケーションが必要 併せて、パートナーシップのパッケージの見直しが必要（プログラム別など細分化、冠大会など） <hr/> <ul style="list-style-type: none"> さらに助成金を獲得する余地がある中で、外部人材の活用も含め、助成金の件数の増加に伴う申請及びレポート業務が実施可能な体制の構築と助成金額の増加の最適なバランスを検討する必要がある </div>	<div data-bbox="2625 401 2852 457">検証事項</div> <div data-bbox="2202 551 3292 1065"> <ul style="list-style-type: none"> 協賛以外の収益源で一定程度のボリュームが期待できるものはあるか（個人サポーター等） パートナー企業による協賛の継続・更新が上手くいかない場合の要因は何か <hr/> <ul style="list-style-type: none"> 助成金の額に対し必要な業務・タスクはどの程度で、外部に委託した場合・人材を雇用した場合の費用はそれぞれどの程度か 助成金の件数とそれに対応する人材を増やすのと、スポンサーを増やすことにかかる工数と持続性含めどちらが適しているか </div>
	<div data-bbox="426 1185 1019 1335">d) 実施環境 (体験/練習拠点など)</div> <div data-bbox="663 1335 779 1448"></div>	<div data-bbox="1092 1234 2135 1384"> <ul style="list-style-type: none"> 強化選手以外の選手向けの練習拠点の確保のために、普及施策と連動する形で、自治体や施設との連携を強め、継続的に普及および自主的な練習に使用可能な形を目指す </div>	<div data-bbox="2202 1204 3245 1410"> <ul style="list-style-type: none"> 現時点で強化選手以外の登録選手はどのような環境で練習を行っており、何を課題と捉えているのか 自治体や施設と、継続的に普及や練習の拠点として使う形での連携するにはどのようなアプローチをする必要があるか </div>
	<div data-bbox="409 1542 1032 1617">e) 広報・マーケティング</div> <div data-bbox="663 1628 779 1710"></div>	<div data-bbox="1092 1553 2119 1703"> <ul style="list-style-type: none"> 組織全体としてのブランディングも含めた方向性を再検討し、広報施策もそれに沿って実施することで、組織としての目標の達成に寄与する効果的・効率的な広報施策を実施可能 </div>	<div data-bbox="2202 1572 3262 1684"> <ul style="list-style-type: none"> 連盟としての方向性はどのように定めるか 方向性に適合する広報施策をどのように設計する必要があるか </div>

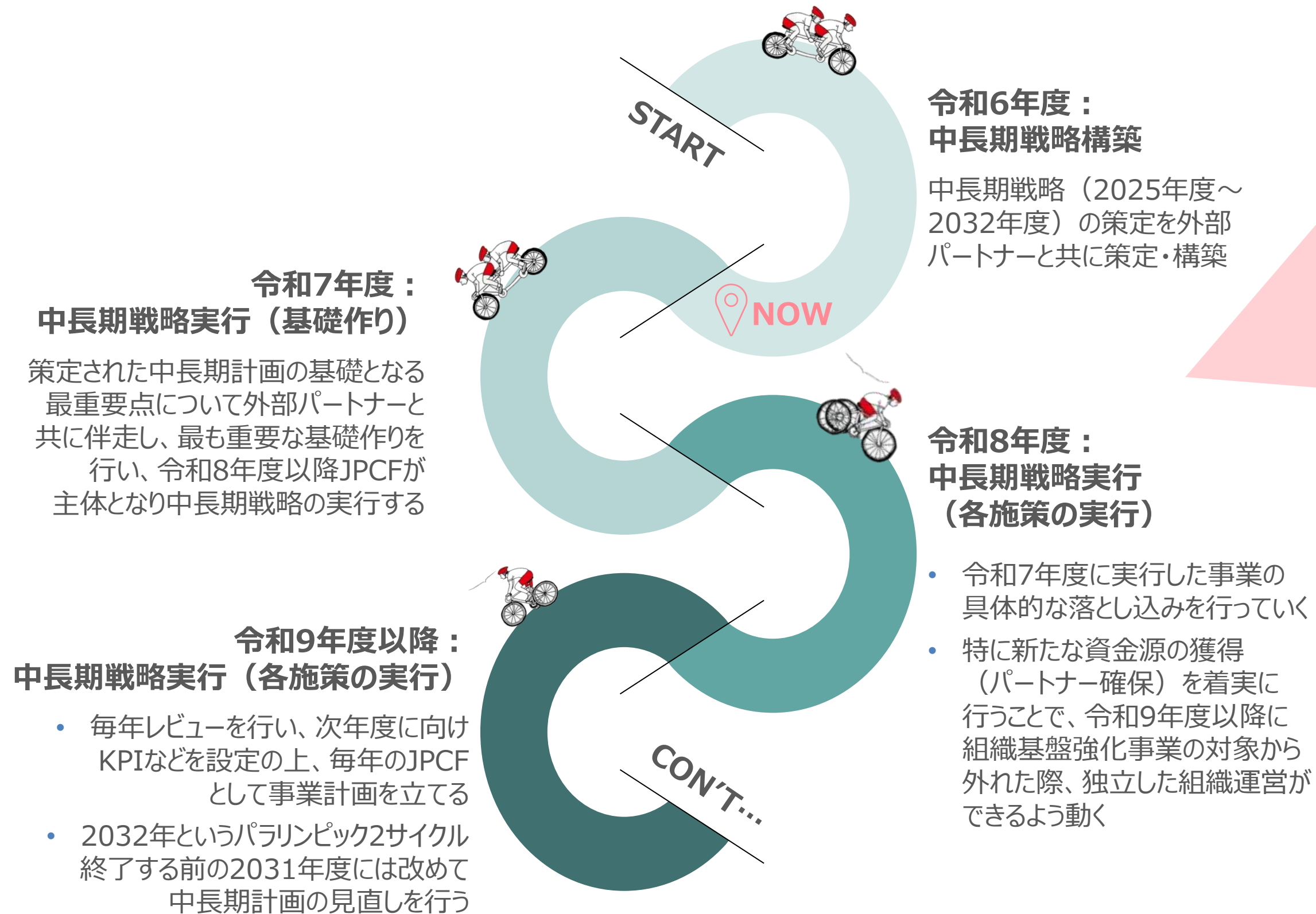


【戦略実現のための要素】戦略の柱3つを確実に推進するために必要不可欠な5つの要素についても、同時にすすめていかなければ、柱自体前進することができないため、連動性を意識して行う

戦略実現のための要素

	a) 組織体制・ガバナンス	b) 関連団体との連携	c) 資金 (パートナーシップ、 その他収益源など)	d) 実施環境 (体験/練習拠点 など)	e) 広報・ マーケティング
普及実現の ために 取り組むべき点	<ul style="list-style-type: none"> 組織体制・オペレーションモデルの見直し 実施事業や組織運営のマニュアル化 将来的な団体拡大を見据えたガバナンスの整備 	<ul style="list-style-type: none"> JCF、県車連、スペシャルオリンピックスなど各種団体との連携できる事業などの洗い出し 連携に向けた具体的なタイムラインの策定 	<ul style="list-style-type: none"> 自由度が高い資金確保のためのパートナーパッケージの見直し（新規・既存） 助成金にて実施すべき事業とそうでない事業の仕分け 活用できそうな助成金の洗い出し・担当者へ連携するシステム構築 	<ul style="list-style-type: none"> 普及のための体験会やそのあとの練習拠点を作るための自治体などとの連携を含めた枠組みの構築 普及・強化の両側面の視点から安全かつ持続的な練習環境の提供の枠組みの構築 	<ul style="list-style-type: none"> 全ての戦略の柱を効果的に対外的発信するだけでなく、事業実施する際の「軸（コア）」となるものの確立 広報・マーケティング戦略の構築・実施
実現する 上での 大きな課題	<ul style="list-style-type: none"> 属人的に行われているものをどう解消していくのか 団体が拡大した際を見据えた動き 	<ul style="list-style-type: none"> 各団体の意向などもあるため、実現性に向けたタイムラインが明確にしづらい 	<ul style="list-style-type: none"> 持続的関係性構築の点から、スポーツパートナーシップ市場の動きを知った上で、企業視点から付加価値の構築を行っていく必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> システムとしてきちんと動くまでは属人的な動きをしなければいけない可能性があるため、特定の人に対する負担が大きくなる可能性がある 	<ul style="list-style-type: none"> 全ての事業において「軸」を中心にいかに常とその観点を意識してもらえるかも併せて検討しなければ、単発の取り組みにとらえられる可能性あり

【ロードマップ】中長期戦略を通じ、組織基盤強化を図るため、最初の2年間は外部のプロと共に体制を構築し、3年目以降はJPCF主体で自走を目指す



中長期戦略を通じた組織として 自立した団体運営体制の構築

- 今回中長期戦略を策定した背景として、より強い組織としての基盤の確立を行うことで、組織の成長をはかりたかったが挙げられる
- そのため組織基盤事業の対象になっている時に、プロの力を借り、大枠の策定及び基礎作りを徹底的に行ってもらうことで、対象外になった際に強靱な組織基盤をベースにJPCFが中心となり、各事業を進めていくとした
- そのため、中長期戦略のは外部のプロと共に策定を行ってきたが、あくまでも組織基盤をこれら中長期戦略を通じて強化していくという目的がある
- そのため、再来年度（令和8年度）からのJPCFがなるべく主体でできるように、過度の依存はせず、来年度（令和7年度）は共に伴走をした上で再来年度に向けた基礎固めを共に行っていく
※令和8年度は移行の年とし、令和9年度移行は自立するべく行う

目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
- 中長期計画立案
- **Next Steps**
- Appendix

下記の戦略の中身を検討していく中で、特に今後のJPCFの組織基盤を作る上で優先度が高いのは組織体制・ガバナンス、資金、普及、そしてそれに伴う社会的アドボカシーであることで合意が得られた

MISSION & VISION & VALUE

Mission: 自転車を通じて、だれもが風を感じ、可能性を広げられる社会を実現する

Vision: あらゆる人達に届く追い風を、共に生み出す

Value: 熱意を持って挑戦し続ける 変化、失敗を恐れない 互いにリスペクトし、追い風を送りあう



戦略の柱

①普及

パラサイクリングをより多くの障がいを持った人に触れ競技者を増やす（＝する）だけでなく、ファンを作ること（＝見る）、競技全体としての普及を図り発展させていく

②強化・パスウェイ

代表強化及び次世代選手の育成、更にそれに伴うパスウェイをより実現性のあるものするための環境整備などを行う

③社会的アドボカシー

自転車競技を通じ障がいのある人、ない人が共に自転車競技を楽しむことができ、共生社会の実現に向けた活動を行う



戦略実現のための要素



a) 組織体制・ガバナンス



b) 関連団体との連携



c) 資金（パートナーシップ、その他収益源など）



d) 実施環境（体験/練習拠点など）



e) 広報・マーケティング

【令和7年度の取組】 令和7、8年度の2年間で、特に優先順位度が高い、4つの事業を行う

① 組織体制・オペレーションモデルの見直し

現在、属人的な組織体制が多いため、オペレーションモデルの見直しを行い、マニュアル化できる業務は効率化のために進める

② パラサイクリング普及

自治体との普及活動強化・連携体制を構築；専門人材の確保・育成のための連携推進；eSports事業を推進して新たな競技者獲得

③ 社会的アドボカシー推進

普及や強化活動を通じて推進すべき社会的アドボカシーを検討し、広報戦略を策定して実行

④ パートナーパッケージ・価値創出

サステナブルな団体運営のために、パートナー企業増加目指し、既存・新規パートナー開拓のためのパッケージ見直し、パートナー企業ごとの戦略構築・モニタリングの上実施サポート

令和7～8年度の2年間に於いて組織機能の強化および新規事業の推進を通じ、パラサイクリングおよび団体としての価値をパートナー企業や一般の人々に創出・発信し、結果的に既存パートナーとの継続的支援及び新規パートナーの獲得を目指す

これにより、助成金に依存せず、団体として経済的により独立したより柔軟な組織運営を実現することを目指す。

また、関連団体との共同で実施できる事業の創出にも積極的に取り組み、事業終了時には団体としてより自立した運営の実現を目指す

【令和 7 年度の取組】 ①組織体制・オペレーションモデルの見直し

【概要】

- 現在、多くの課題が属人的な組織体制に起因しており、事務局員も少ないため、サステナブルな組織運営が難しい。このため、組織運営の根本的な改善が急務である。組織の体制見直しだけでなく、業務の効率化および非属人化を目指し、根本的なオペレーションモデルの見直しを行う
 - なお、フルタイムの人材を雇うより、特定の専門知識やスキルを持った人を登用することで、能力の高い人の雇用を地域に限定されることなく登用できる
 - フルタイム人材を増やすことはリスクも高いため、積極的な専門人材を副業や業務委託で登用し、業務の効率化を図る
- また、業務効率の改善のために、マニュアル化できる事業や日常業務についてはマニュアル化を進める。本年度は現在実施されている事業の洗い出しを行い、マニュアル化すべき点の優先順位付けを行った上で、次年度にマニュアル化を進める
 - 令和 8 年度にマニュアル化を行う前に精査した上で、最も必要な点を洗い出すことで、効率的かつ効果的にマニュアルの作成に取り組むことができ、結果組織としての業務の改善を行うことができる

① 組織体制・オペレーションモデルの見直し

現在、属人的な組織体制が多いため、オペレーションモデルの見直しを行い、マニュアル化できる業務は効率化のために進める

【令和 7 年度の取組】 ③ 社会的アドボカシー推進

【概要】

- 普及や強化などの全ての活動を通じて、どのような社会的アドボカシーを推進するのかを検討・実施する
 - 特に②のパラサイクリング普及において、社会的アドボカシー推進の観点から興味関心を得ることを考え、普及との連動を意識して事業を年度前半に策定する
 - 策定後は、実際の活動を行う
- 社会的アドボカシー推進のための事業策定と並行して、広報を通じたインパクトの最大化を図るため、広報担当が広報活動を通じて社会的アドボカシーを推進できるよう戦略を策定し、Q2以降の広報活動で一貫したメッセージングを行う
 - この広報活動は他の事業に関する広報でも「社会的アドボカシーの推進」を意識し、異なる事業間でも一貫したメッセージを対内外に発信する

③ 社会的アドボカシー推進

普及や強化活動を通じて推進すべき社会的アドボカシーを検討し、広報戦略を策定して実行

【令和 7 年度の取組】 ④ パートナーパッケージ・価値創出

④ パートナーパッケージ・価値創出

サステナブルな団体運営のために、
パートナー企業増加目指し、既存・新規
パートナー開拓のためのパッケージ見直し、
パートナー企業ごとの戦略構築・
モニタリングの上実施サポート

【概要】

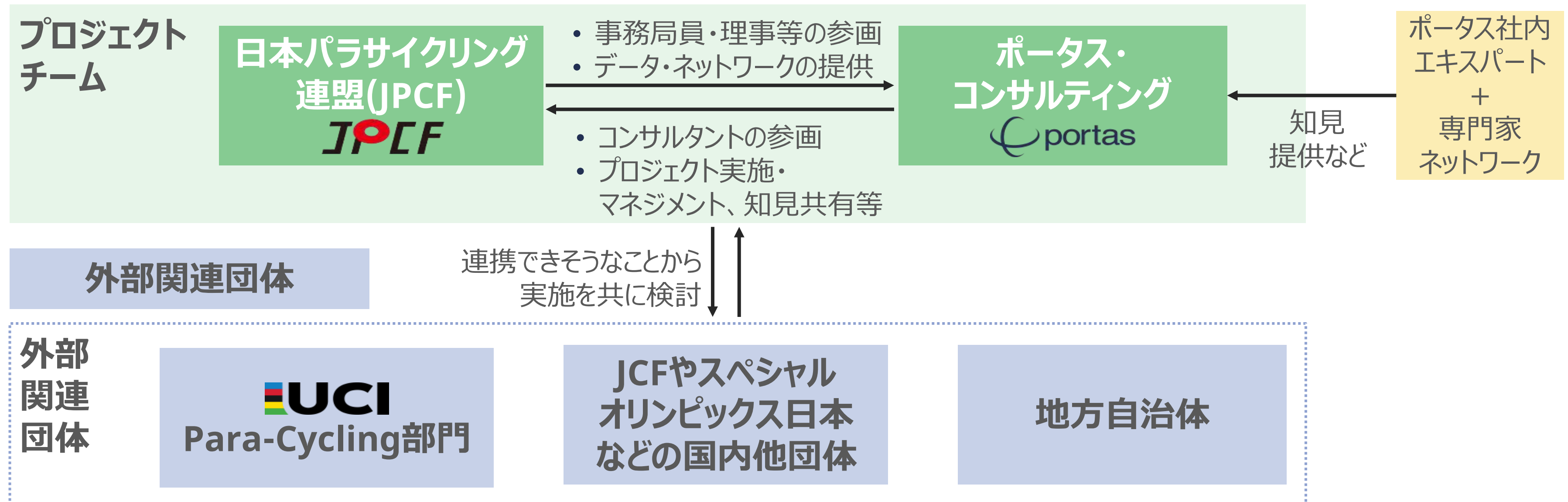
- 現在、助成金に依存した組織運営のため、新規事業や取り組みの自由度が低く、新しい活動が難しい状況である。助成金依存度を下げ、パートナー収入を増やすことで事業の幅を広げ、持続的な組織運営を目指すため、パートナーパッケージの見直しを行う
- パッケージの見直しに際し、既存パートナーのアップセルと新規パートナーの獲得の両方を検討する。
 - 【既存パートナー】既存パートナーに対して継続的な支援を得るため、各パートナー企業の現状を把握し、JPCFへのエンゲージメントを高めるための付加価値を整理する。双方にとってwin-winな関係性を提案し、共にパラサイクリングの価値向上に努め、次年度以降の長期コミットメント・パスウェイを構築する
 - 【新規パートナー】新規パートナーの開拓も並行して進める。中長期計画に基づき、各事業の目的に沿った新規パートナーの開拓を進め、パッケージの見直しとターゲットの精査を行う
- なお、新規・既存のパートナーそれぞれに対して戦略と価値創出方法を精査し、モニタリングを行う

【令和 7 年～8年度の取組】 優先度の高い事業に関するタイムライン

事業	令和7年度				令和8年度			
	Q1	Q2	Q3	Q4	Q1	Q2	Q3	Q4
①組織体制・オペレーションモデルの見直し 事務局などのオペレーションモデルの見直し 実施事業や組織運営のマニュアル化								
②パラサイクリング普及 既存の連携自治体との連携推進（構築・見直し・実施） 地域における普及活動の実施・推進 専門人材育成（枠組み構築・関係構築・推進） eSports事業推進（枠組み構築・関係構築・推進）								
③社会的アドボカシー推進 社会的アドボカシー推進のための事業策定 社会的アドボカシー活動の実施 広報戦略策定・実施								
④パートナーパッケージの見直し 【既存パートナー】連携内容見直し・パートナー毎の戦略構築 【新規パートナー】新規開拓に向けたパッケージの見直し 【新規パートナー】パートナー毎の戦略構築								

【令和7年～8年度の取組】 方向性および体制

- 中長期戦略のは外部（スポーツビジネス専門の戦略コンサルティングファーム）と共に策定を行ってきたが、あくまでも組織基盤をこれら中長期戦略を通じて強化していくという目的がある
- そのため、再来年度（令和8年度）からのJPCFがなるべく主体でできるように、過度の依存はせず、来年度（令和7年度）は共に伴走をした上で再来年度に向けた基礎固めを共に行っていく

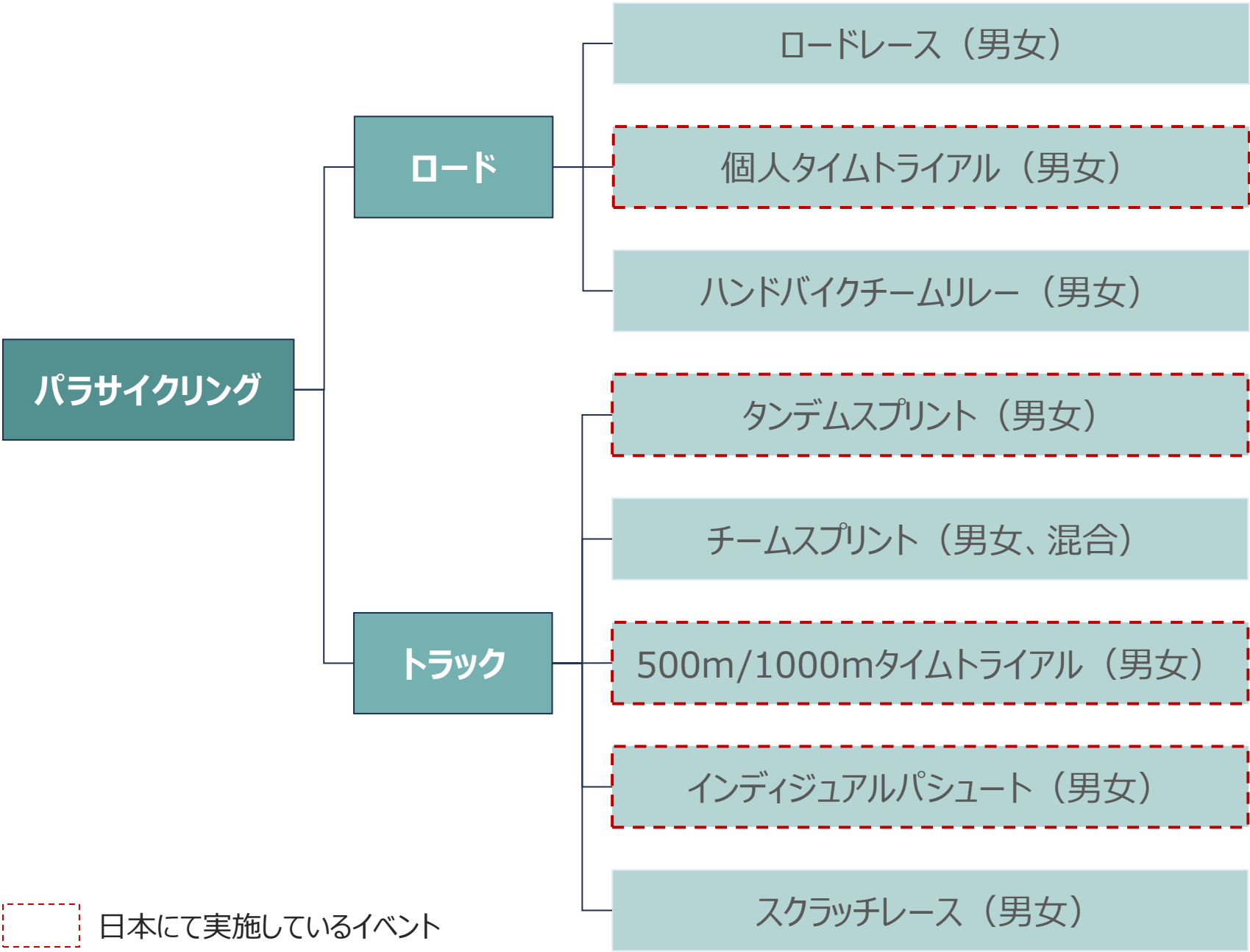


目次

- プロジェクト背景
- フレームワーク
- Mission / Vision / Valueの見直し
- 現状把握・分析
- 中長期計画立案
- Next Steps
- **Appendix**

パラサイクリングは障がいの種類と仕様する自転車による4つのクラスと障がいの度合により分類され、また、これらは「ロード種目」「トラック種目」の2つの種目に分かれている

UCIの定めるパラサイクリング競技のイベント



日本にて実施しているイベント

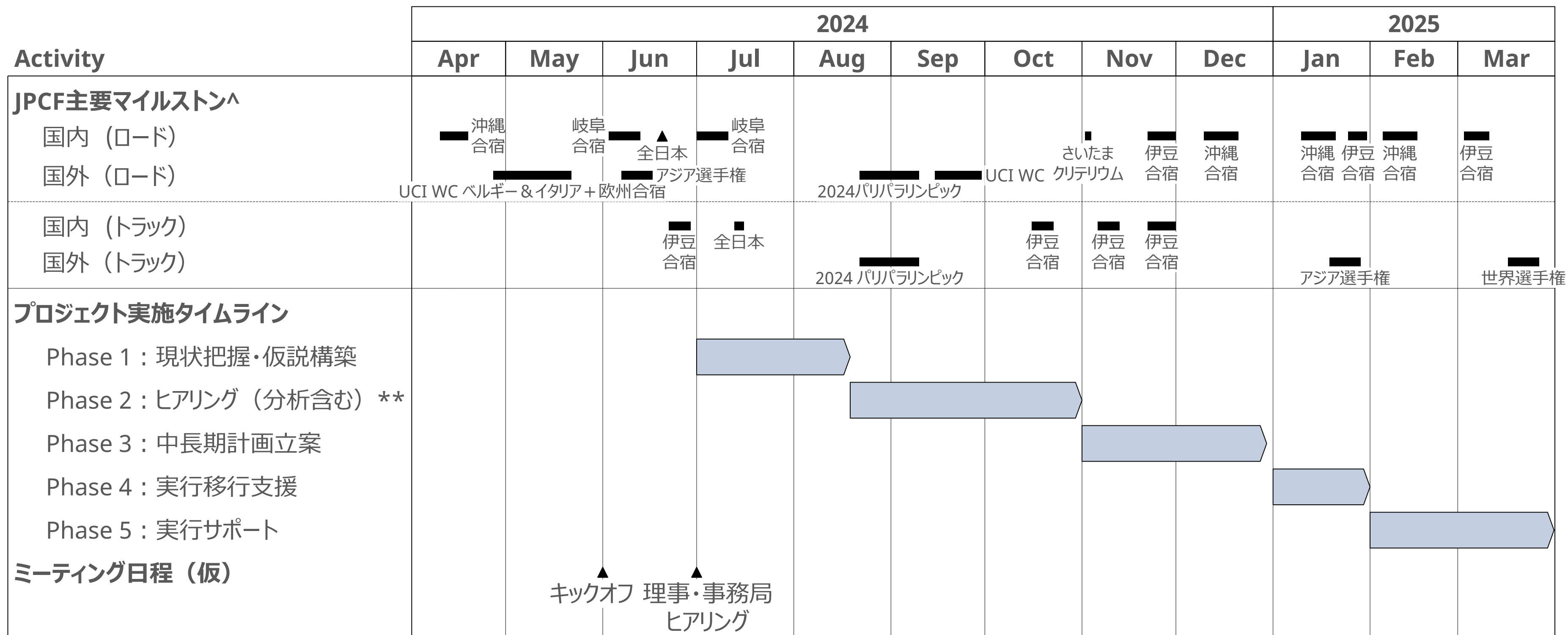
<div>Cycling</div> <div>Class Cycling</div> <div>(通常の二輪自転車)</div>	<div>Tricycle</div> <div>Class Tricycle</div> <div>(トライシクル/三輪自転車)</div>	<div>Tandem</div> <div>Class B Tandem</div> <div>(2人乗りタンデム自転車)</div>	<div>Handcycle</div> <div>Class Handcycle</div> <div>(ハンドサイクル)</div>
四肢障がい (C1～C5)	重度の四肢障がい (T1～T2)	視覚障がい者 (B)	下半身不随など(H1～H5)
✓	✓	✓	✓
✓	✓	✓	✓
			✓
✓ (女子3000m、4-5 男子 4000m, 1-2 男子 3000m)		✓ (女子3000m、4-5 男子 4000m)	
✓			
✓		✓	
✓ (男子 1000m, 女子500m)		✓ (男子 1000m, 女子500m)	
✓		✓	

プロジェクトの進め方② フェーズ別タスク詳細まとめ

	タスク	内容	担当
Phase 1	現状把握・分析	<ul style="list-style-type: none"> 現状がわかる資料（広報誌、事業計画書など）をベースに現状把握 これまでの経緯や事務局含め組織の現状を把握している方とのミーティング 	ポータス・事務局
	課題についての仮説構築	<ul style="list-style-type: none"> 現状把握・分析をもとに、Phase 2のヒアリングのベースとなる課題仮説の構築を行う 	ポータス
	他団体・国における事例検証	<ul style="list-style-type: none"> デスクトップリサーチにて参考となる他団体や国の事例について検証 	ポータス
	レポーティング	<ul style="list-style-type: none"> 上記結果についてレポート作成 	ポータス
Phase 2	ヒアリング用ガイド作成	<ul style="list-style-type: none"> Phase 1の結果（課題仮説、事例等）をベースにヒアリングガイドの作成 	ポータス
	ヒアリング人選・日程調整	<ul style="list-style-type: none"> ヒアリングの調整（主にJPCF経由、もしくはUCI-Paraなど海外はポータス側でも調整可） 	事務局（ポータス）
	ヒアリング	<ul style="list-style-type: none"> ガイドをベースにヒアリング実施（30－60分を想定）※必要に応じて出張可 	ポータス
	分析	<ul style="list-style-type: none"> ヒアリング結果の分析 	ポータス
	結果・レポーティング	<ul style="list-style-type: none"> 分析内容を元にレポート作成 	ポータス
Phase 3	中長期計画枠組み作成＋詳細作成	<ul style="list-style-type: none"> 現状分析及びヒアリングで明らかになった内容を元に中長期計画の枠組みを作成し、大枠合意がとれた後、詳細案を作成 	ポータス＋事務局
	ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> 中長期計画の詳細についてワークショップを通じて内容の検討 	ポータス＋事務局
	体制枠組み案・ロードマップ作成	<ul style="list-style-type: none"> 中長期計画実施にあたって最適な体制案の枠組み御提案・合意形成 中長期的なロードマップ（大枠）について作成 	ポータス
	レポーティング	<ul style="list-style-type: none"> ここまでに行ったこと全てをまとめ、中長期戦略を提示 	ポータス
Phase 4	体制案作成	<ul style="list-style-type: none"> 合意形成した体制の枠組みにのった詳細の体制案の作成（含具体的な人材配置） 	事務局＋ポータス
	中長期計画の取り組み項目の優先順位付け	<ul style="list-style-type: none"> 策定した中長期計画を実行に移すにあたって、優先順位について検討・合意形成 	ポータス＋事務局
	プレゼンテーション	<ul style="list-style-type: none"> 理事などの内部ステークホルダーに対する理解を深めるためのプレゼンテーション 	ポータス
Phase 5	具体的施策のプランニング・基礎作り	<ul style="list-style-type: none"> Phase 4までに合意した計画を本格的に次年度以降実行の具体的施策のプランニング・基礎作り 	ポータス＋事務局

プロジェクトタイムライン

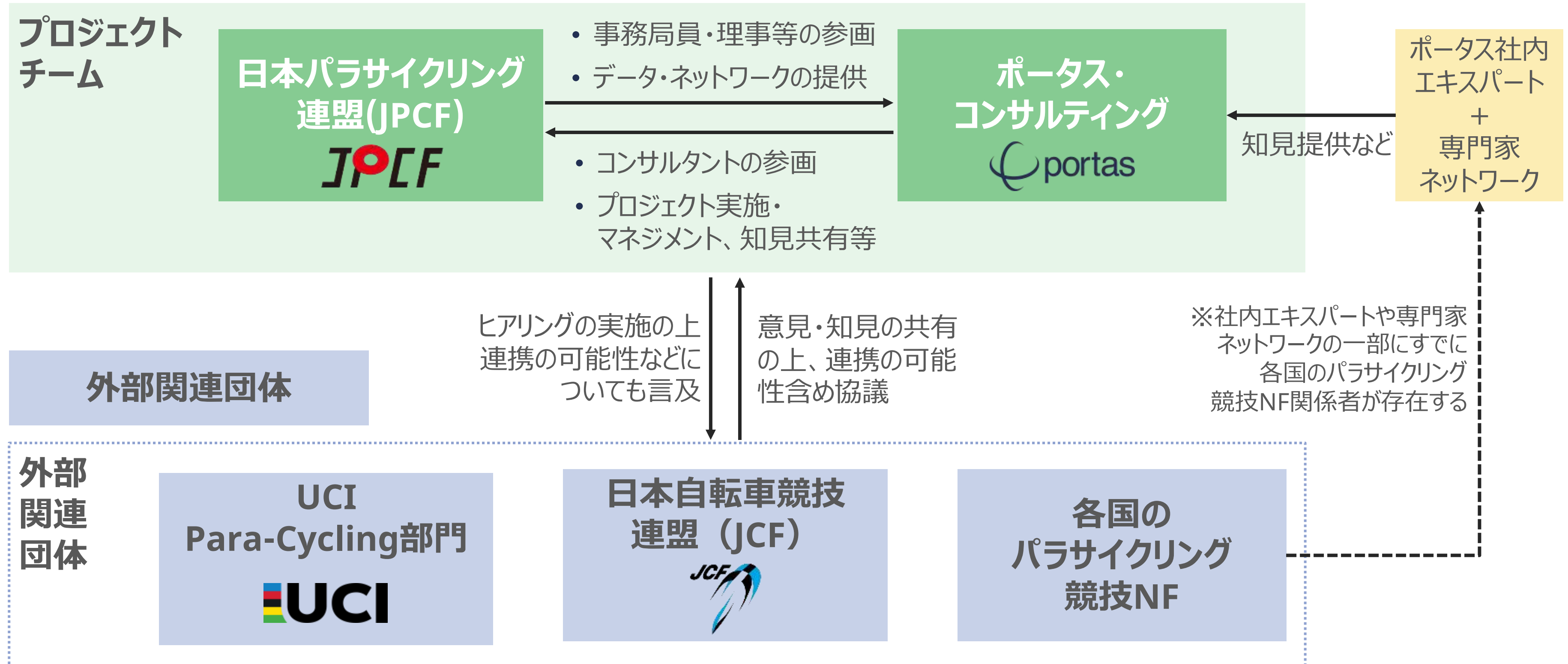
パリパラリンピックなどJPCFの稼働が難しい時期も想定の上、柔軟なスケジュールで実施した



Source: JPCF, UCI, Portas Analysis

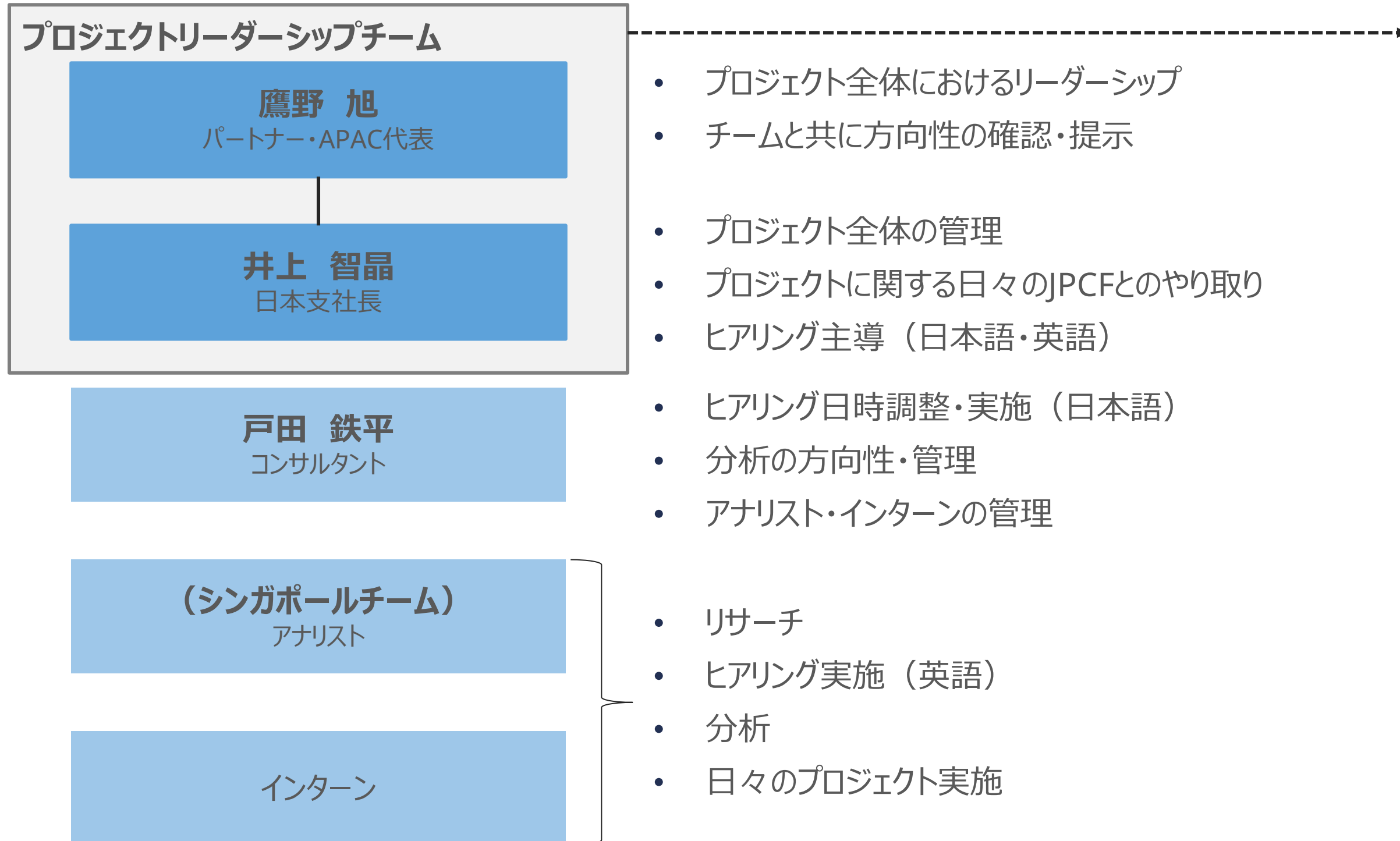
Note: *WC = World Championships（世界選手権）, **パラリンピック、UCI WCが連続しており、関係者のスケジュールの制約等も考慮し長めに設定、△一部変更の可能性あり

令和6年度プロジェクトの進め方：実施体制（全体像）



プロジェクトの進め方：実施体制（ポータスチーム）

ポータスチーム体制



ポータス社内エキスパートネットワーク（例）

Jennie Price



元Sports England（スポーツ庁）のCEO (2007-2018)。草の根スポーツに対するインクルーシブなアプローチを開拓し、世界中のスポーツ政策に影響を与えた

Kereyn Smith



元ニュージーランドオリンピック委員会CEO。特に、組織のインテグリティ、アスリートの健康、財務の健全性やガバナンス関連の取り組みを主導

Petra Santini



競技団体プラクティスのパートナーとして、これまで多くの競技団体及び政府機関向けにコンサルティングを提供。オペレーションモデルの構築などに強みがある

プロジェクトの進め方（Phase 1：現状把握・仮説構築）

目的 #1

JPCFの置かれている現状についての解像度を高め、諸外国の事例等も踏まえて課題仮説を立案し、中長期計画の基礎を作る

想定タスク

タスク	詳細	実施主体
現状把握・分析	<ul style="list-style-type: none"> 現状がわかる資料（広報誌、事業計画書など）をベースに現状把握 これまでの経緯や事務局含め組織の現状を把握している方とのミーティング 	ポータス・事務局
課題についての仮説構築	<ul style="list-style-type: none"> 現状把握・分析をもとに、Phase 2のヒアリングのベースとなる課題仮説の構築を行う 	ポータス
他団体・国における事例検証	<ul style="list-style-type: none"> デスクトップリサーチにて参考となる他団体や国の事例について検証 	ポータス

アウトプット

- 以下の内容を含むレポート
 - 現状分析（含資料の分析結果やヒアリング・ミーティングの議事録等）
 - 課題仮説
 - 他団体・国における参考事例



**2024/7/1~8/14
(6週間)**

プロジェクトの進め方（Phase 2：ヒアリング）現状把握・仮説構築

目的 #2

広くヒアリングを実施し、よりJPCFの置かれている現状や市場環境についての解像度を高めることで、課題仮説の精緻化及び中長期計画の仮説を立案



**2024/8/14~10/11
(9週間)**

想定タスク

タスク	詳細	実施主体
ヒアリング用ガイド作成	・ Phase 1の結果（課題仮説、事例等）をベースにヒアリングガイドの作成	ポータス
ヒアリング人選・日程調整	・ ヒアリングの調整（主にJPCF経由、もしくはUCI-Paraなど海外はポータス側でも調整可）	事務局 (ポータス)
ヒアリング	・ ガイドをベースにヒアリング実施（30 – 60分を想定）※必要に応じて出張可	ポータス

アウトプット

- 以下の内容を含むレポート
 - ヒアリングの議事録
 - ヒアリングをもとにした定性分析結果

プロジェクトの進め方（Phase 3：中長期計画立案）



**2024/10/1~11/30
(9週間)**

目的 #3

関係者との検討を通じて中長期計画の枠組み及び詳細を策定し、その実行に向けた体制の枠組みやロードマップを併せて策定

想定タスク

タスク	詳細	実施主体
中長期計画枠組み作成 + 詳細作成	<ul style="list-style-type: none"> 現状分析及びヒアリングで明らかになった内容を元に中長期計画の枠組みを作成し、大枠合意がとれた後、詳細案を作成 	ポータス + 事務局
ワークショップ	<ul style="list-style-type: none"> 中長期計画の詳細についてワークショップを通じて内容の検討 	ポータス + 事務局
体制枠組み案・ロードマップ 作成	<ul style="list-style-type: none"> 中長期計画実施にあたって最適な体制案の枠組み御提案・合意形成 中長期的なロードマップ（大枠）について作成 	ポータス

アウトプット

- 以下の内容を含むレポート
 - 中長期計画の枠組み及び詳細
 - ワークショップの実施結果
 - 体制の枠組み案・ロードマップ

プロジェクトの進め方（Phase 4：実行移行支援）



**2024/12/1~12/27
(4週間)**

目的 #4

策定した体制の枠組みに準じて最適な人材の配置をし、配置された人に対する中長期計画の自分事化をはかると共に、取り組むべき項目の優先順位を明らかにする

想定タスク

タスク	詳細	実施主体
体制案作成	<ul style="list-style-type: none"> 合意形成した体制の枠組みにのった詳細の体制案の作成（含具体的な人材配置） 	事務局＋ポータス
中長期計画の取り組み項目の優先順位付け	<ul style="list-style-type: none"> 策定した中長期計画を実行に移すにあたって、優先順位について検討・合意形成 	ポータス＋事務局

アウトプット

- 以下の内容を含むプレゼンテーション・レポート
 - これまでの検討内容のサマリー
 - 体制案
 - 中長期計画の優先順位

プロジェクトの進め方（Phase 5：実行サポート）



2025/1/4~3/31
(継続的に実施)

目的 #5

策定した中長期計画の具体的な実行案の現実可能なプランの詳細を明確にし、次年度以降に実行に移すにあたり必要な基礎作りを行う

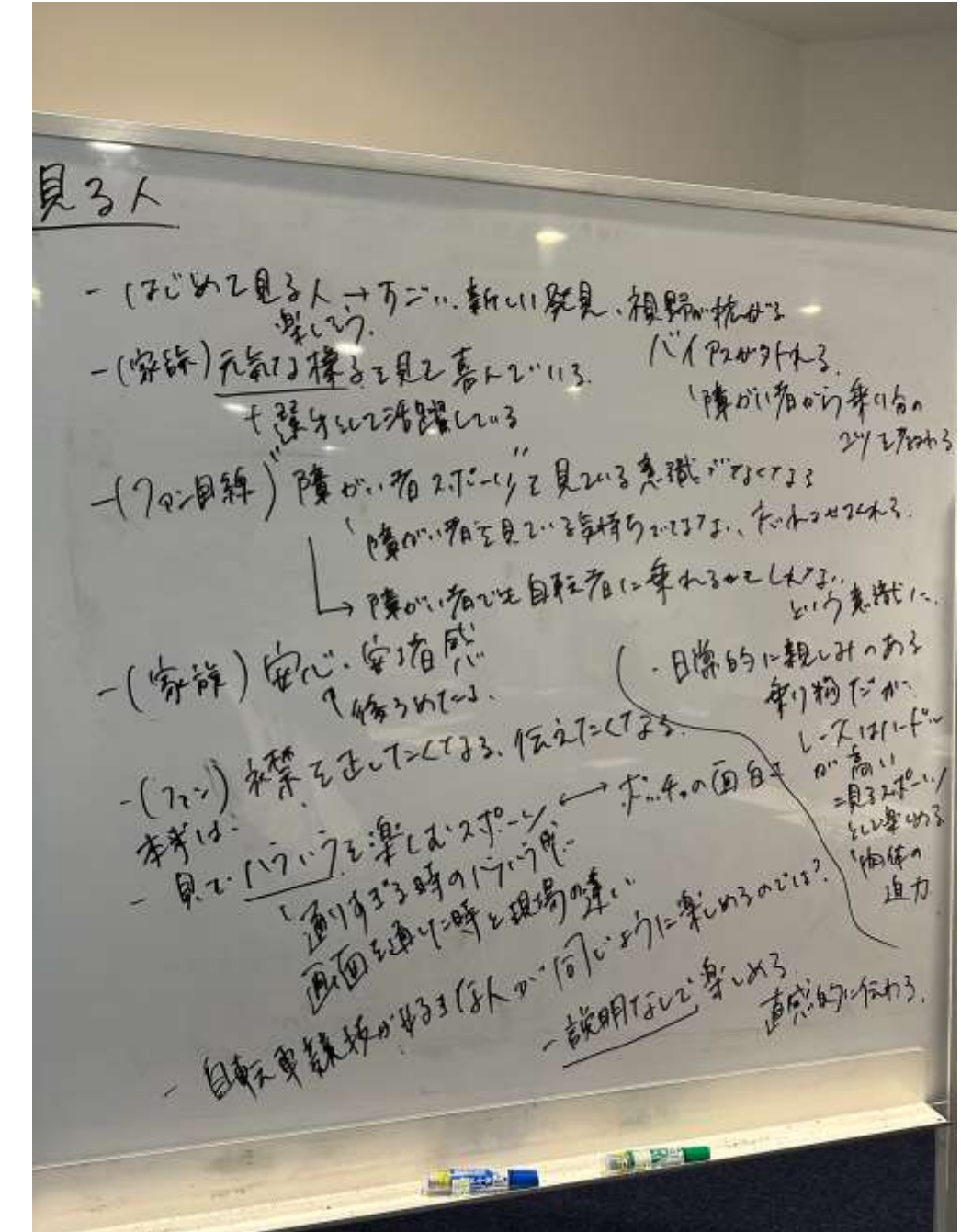
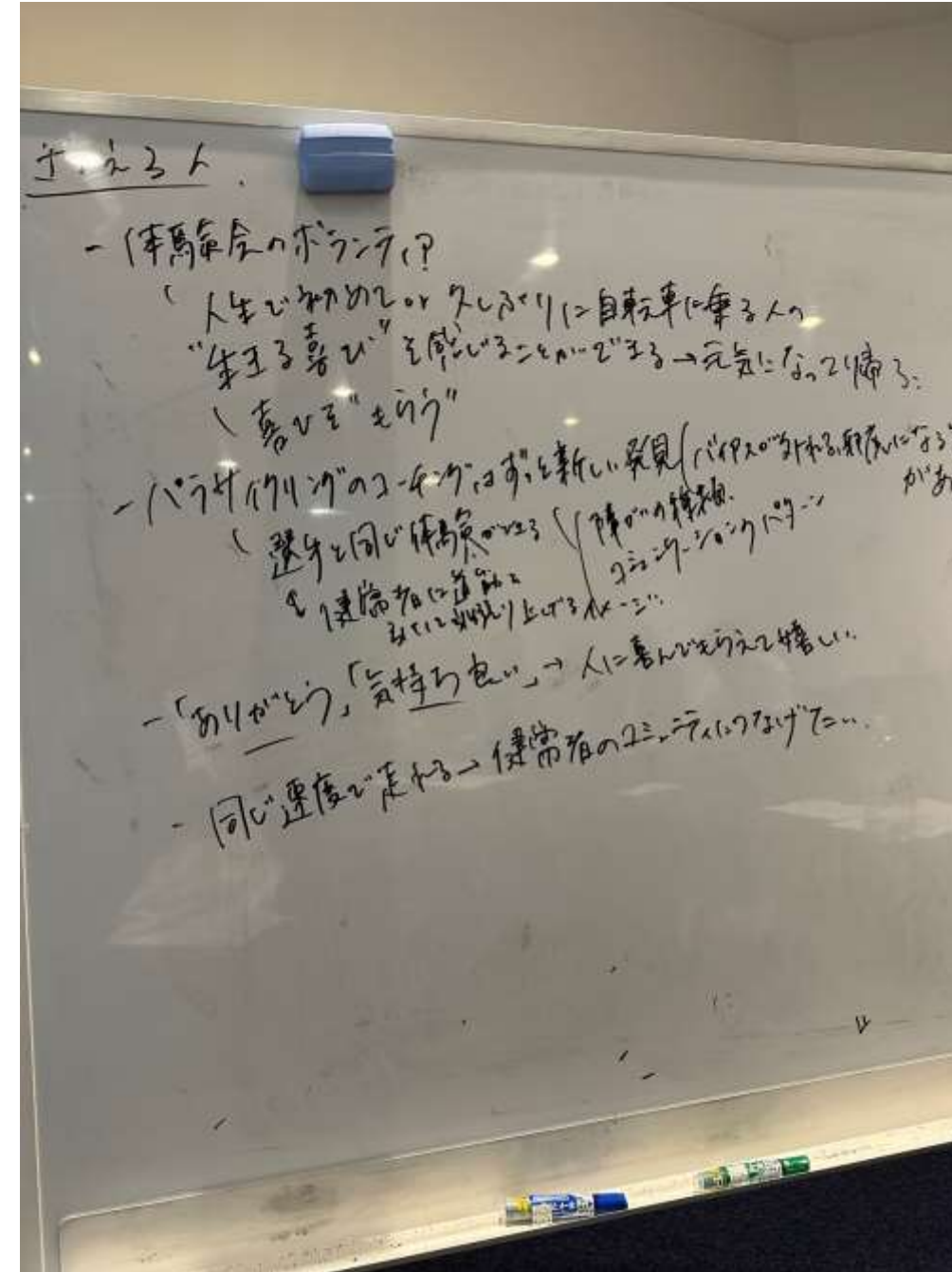
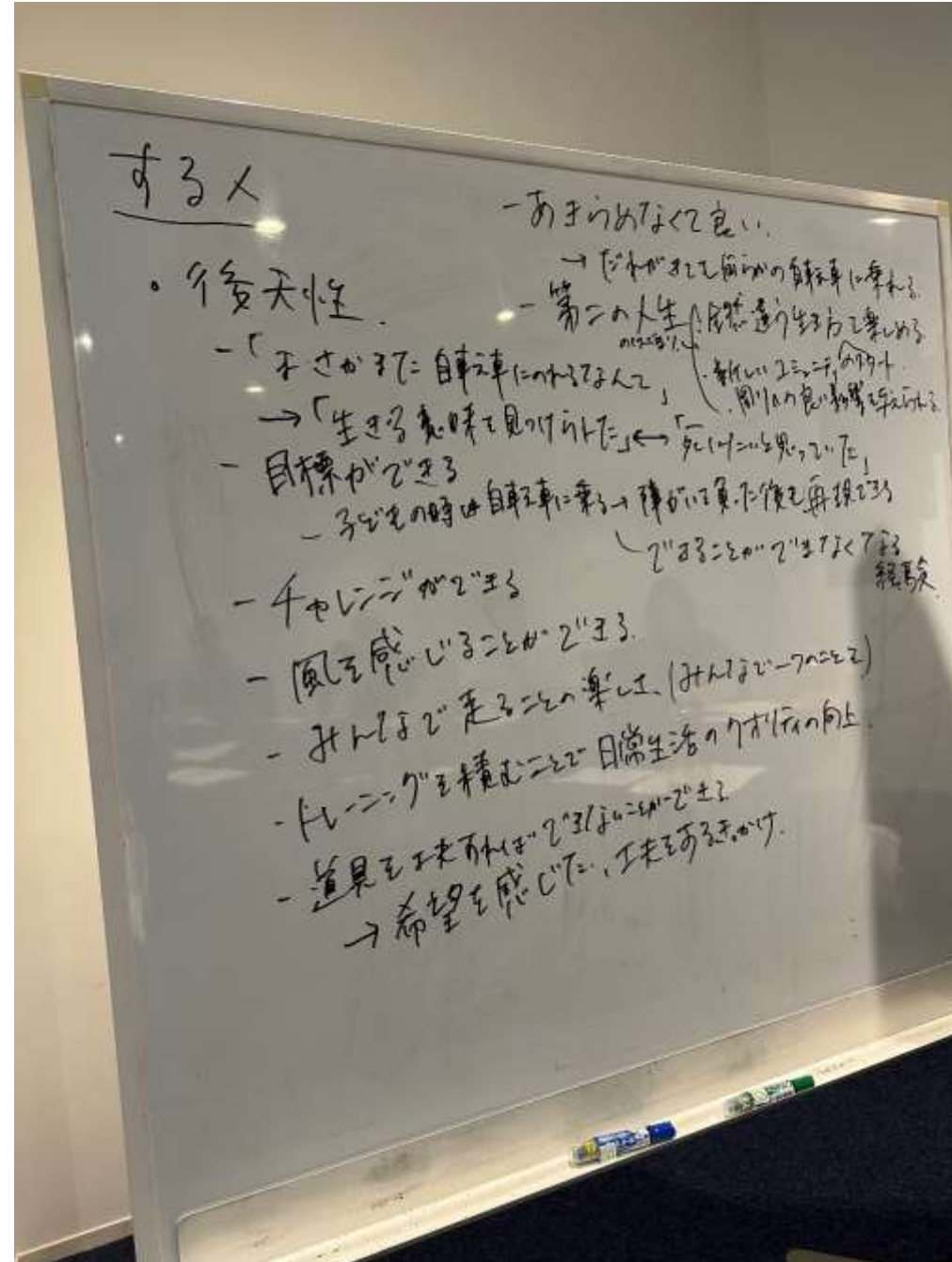
想定タスク

タスク	詳細	実施主体
具体的施策のプランニング・基礎作り	<ul style="list-style-type: none"> Phase 4までに合意した計画を本格的に次年度以降実行の具体的施策のプランニング・基礎作り（体制、資金含む） 	ポータス＋事務局

アウトプット

- 以下の内容を含むプレゼンテーション・レポート
 - 各施策のプラン
 - 施策実行における資金・体制案

（参考）ワークショップの様子



Reported by:

 portas

